

青年学校時代

国民学校を卒業して、青年学校では、普通の勉強(国語など)が少しと、あとは軍事教練でした。二十歳で兵隊検査を受けていたのが早まるということでしたが、私は14歳から郵便局で働きながら、修練道場にひっぱられました。兵隊に行く前の軍事教育でした。静内に修練道場がありまして関東軍の将校が所長でした。教官の一人に幌村春雄さん、後に日高建設協会の会長をやった人ですが、漢文を教えていました。

青年学校(本科5年)を卒業すると、後で学歴は新高卒となりました。高校を卒業したのと同じになります。青年学校は、3年に編入しました。

青年学校では、岩本源太郎さん、相生猛雄さん、助役をした栗山末吉さん、金田八十次さん(昔、大工さんだったかな)が教官でした。各地区ごとに、毎日、每晚やってました。私は幌泉尋常小学校で受けていました。夜学です。小学校が空いた後です。

郵便局での仕事・木炭バス

日中は郵便局で働いていました。夜の7時に様似から郵便が届きます。その郵便を降ろして、広げて、猿留だ、庶野だ、小越だ、というふうに分けて、さらに自分の配達地区の順立てをしなければいけない。準備して、9時に帰るんです。で、朝の6時に出発。自転車がないんですよ。歩くんです。東洋のエンドモまで行く、戻ってきて上歌別に行く。郵便局に帰ってくるのが3時半です。お昼は弁当でした。おにぎりです。郵便局に帰ると当直が当たるんです。召集の電報が来ると、どこにでも持っていかねばならない、笛舞の漁場に来ている人に召集電報が来ると、持って行くわけです。夜の12時半ごろ持って行く、場所がわからないから先輩に聞いて行くんですけど、「坂を下ったところに木があるぞ～。首吊るした木だぞ～」って教えてくれるんです。

私が配達していた頃は、崖の上にはほとんど家はなかったですよ。みんな浜にありました。ウタロップ、エンドモ、ず～と浜を歩いて藤井昇三さん、亀三郎さんで、上にあがるんです。

岬へ行く道があった。木炭バスが走ってました。私は、母親と岬のコンプを手伝いに行ったときに初めて木炭バスに乗りました。バスが走れる程度の道はありましたが、家は浜にあるので、配達はいつも浜でした。笛舞、大和、今、国道沿いに家がありますが、昔はみんな浜に家がありました。

崖の上は、ほとんどが採草地でした。馬を養うためのものですね。

えりもの水田

歌別から上歌別への道、今のえりも牧場のあたりは、道路にうっそうと木がかぶさっていました。休み所、

ちょうちん坂。

菅原さんが牧場をやっていました。写真屋さんの先代、そこで水田を作ってたんです。上の成田さんでは、コロップの沢の奥で水田を作っていました。今でも跡が残っていますが、現在は村中さんの所有地です。米はできなかったんです。温度が足りなかったのでしょうか。岡さん、庶野の上島さんは陸稲を作ろうとしましたが、だめでした。戦時中の話です。

豊幌

金子さん、岡さん、池田さん、三浦さん、熊谷さんはもともと上歌別。上歌別の上、豊幌に入ったのが戦後入植です。

上歌別の自治会の総会があると、そこで貯金してもらったり、保険に入ってもらったりしてました。「佐藤さん、ふんごめ！」って言うんです。何かな～と思ったら、大きな炉があって、その中に靴のまま踏み込みなさいってことなんです。

戦時貯蓄債は、軍資金を集めたものですが、戦後、国債なんか二束三文になって、価値がなくなり、なげたもんです。



戦時貯蓄債券

昭和20年7月14日空襲

7月14日の空襲の日は、ガスが垂れ込めてました。飛行機の音がすごいんです。爆音が、ガスの雲に響いてミンミンミンと聞こえる。ぜんぜん見えないんですが、周りの人も味方の飛行機だろうと。

そうこうしているうちに、ガスが晴れてきたら、水平線上に、飛行機の影がたくさん、わ～と思っているうちに、その飛行機が向きを変えて、幌泉の街を攻撃し始めたんです。軍に徴用された船が2隻、港にありました。それには機関砲がついていて、応戦したんですね。するとくり返しくり返しその2隻が攻撃されました。

爆弾が落ちたとき、僕は郵便局にいて、今の役場のところ、爆弾が落ちたら、悪い道路にバスがはまったように、ひどいもんですわ～、申し訳程度に作った壕は、上から土がバラバラ落ちてね、ひどかったね。

壕は、あっちこっちにあったんですが、今で言えば自治会ごとに作ったようなものです、長坂さんの上の方とか。

僕は1年目は郵便やって、2年目は貯金保険をやりました。その間に有線電信の検定を受けてやるかと練習していました。

空襲のあった昭和20年は電信を担当していたので、逃げられないんですよ。空襲があったときは、すごい揺れて、こりゃだめだな～生きると思ったら、逃げるよりしょうないな。懲役になってもしょうないなと、思って外に出たら、上の防空壕から、長坂さんの坂を走って降りてくる佐々木前町長の奥さんの親、榎田道勇さん、警防団長、と広島獣医さん、広島勉さんの二人が走ってきて「おう、佐藤さん手伝ってけれ～」って。牧野組合が煙あがっているので消そうと。

途中にある役場の中山さんの畑などを横切って、牧野組合に走った。すると竹内餅屋さん竹内亨さんが一人で消しにかかっている、私ら3人が加わって、「佐藤さん砂持ってきてけれ～」って。玄関先にセメント樽に砂が入っていて、それをなんとか持っていきましただよ。火事場の馬鹿力っていうけれども、このことでしょう。

今の神田さんの、前の坂田さんの奥さんの実家も焼けたし、坂田さんの親戚の守田さんの漁業部の親方の家も完全に焼けてしまいましたね。風がなかったので、広がらなかったです。藤原順子さんが機銃掃射でやられましたが、死者は出ませんでした。

牧野組合の火を消しにしているうちに、次の空襲が来る。前に入れさせてもらった防空壕に行ったら、もう畳で入口にふたをしちゃってる。それで、竹内さんの昔のカネサさんの漁場の石垣を降りたら、行李やいろいろなものが、そこに落としてあるんです。焼かれないために、家が燃えても助かるようにね。そこに降りて隠れたけれども、飛行機の機銃掃射、石垣にカチンカチンと、葉莢がぶつかると、そこにあるもので頭を覆って一人で隠れてました。一生の思い出ですよ。

山が近いから思うように攻撃できなかつたかもしれませんが、機首をすぐに上げなきゃならない。上の防空壕から見た人は、飛行機に乗っている人も見えたといいです。焼夷弾は落とされましたね。爆弾は船のいた港付近、30m位の穴があいていました。反撃した船は3日間も火が消えませんでしたね。夜どうし燃えていました。死者が出なくてよかったです。

昭和14年15年マグロの大漁

ガスがかかると思い出すのは、子供のとき寝てるとね「ドンドコドン！ドンドコドン！」って音が聞こえるんですよ。「あ、マグロ大漁だ」ってわかるんです。沖の船からのマグロ大漁の合図で、船板を櫂でたたく

んです。そろって、「ドンドコドン、ドンドコドン」って聞こえてきたんです。聞こえたら、人の手配をするわけです。

ガスがかかると空襲を思い出すし、マグロの大漁を思い出しますね。

マグロは獲れて、獲れて。本州へ運び出す。それが道路では運べない。氷を積んだ船。冷凍船で運ぶ。それが間に合わなくて、海の上に竿を立ててマグロを浮かばせていた。幌泉の街中、臭い、臭い、マグロの血の匂いで。すごかったですよ。解体しているひまないので、丘に上げて並べた以外にも獲れてるんですから。

あの大きなマグロを「3軒で1本買ってくれませんか。」と言われたことがあります。そう言われたって、心臓も大きくて、もらって食べてる、頭ももらって食べてる、もうそれで十分ですから、「3軒で組んで、1本3円でいいですから、買ってください。」と言われてもね。



マグロ大漁（昭和14年ごろ）

長持ちさせるために、内臓を引き出ししたり。船からマグロを上げるのに、男5人がロープを引っ張って走ります。船倉から引っ張り上げるんです。男たちの走るところだけが、マグロ1本通る幅であいている。男たちが走って行って、ややしばらくして、船からポーンとマグロが飛び上がる。

その船から飛び上がるマグロを見たくて、植木さんの角で靴屋さんをしていた人の奥さんが、男たちが走って行った後に飛び出して、船から上がるところが見たくてね、ところが、そのマグロがポーンと上がっても男たちは後ろを見ないで、走って行く。マグロが走った後にはぬめりがあるから、そこでその女性がすべって転んでしまった。その上をマグロが行く。マグロの鱗で腹さかれて、その晩、通夜でした。

マグロをやっていたのは、山根漁業部、八戸から来た人。守田漁業部、山形漁業部が地元、浦河の岩船漁業部が笛舞でやってました。その岩船漁業部に召集電報がきて、僕が持っていたことがあります。

マグロは、幌泉、笛舞、東洋でも水揚げされてまし

た。山根漁業部は東洋にも、幌泉にも、大和にもありましたね。

三陸津波

三陸の津波、昭和8年は覚えています。沢町の川の水の上を波が登って行くんです。寺の方まで、ここには危ないと、近所の人に山に連れられました。そのときは、今のニコニコ旅館を下ったところで見てました。6歳でも覚えていますよ。その時、えりも町内で13名の方が亡くなっています。襟裳岬の竹内町子さんの家族の方、庶野の黄金道路にいた方々。

津波は3月、黄金道路の後ろは氷が張ってデラデラしている。そこを子供を抱えて、父親がようやく崖の上に昇って、ぼっとして見たら、寝巻だけで子供がすっぱりぬけていたと聞きました。坂本さん、山崎さん、目黒でも一人亡くなっています。

小学校の頃

今の教育長の公宅地は昔小学校の土地だったんです。小学校の中に小林宗八さんの土地があって、そこで小林さんがイモやカボチャを作っていたんです。それで土地を交換したんですね。

昔、公会堂というものがあまして、予防注射がありました。

生徒が並んでいるところで、プラスバンド部の男子が小学生に小便をかけた、罰で小学校の小便汲みをやりなさい、となつて樽に棒を通して二人で、運ぶわけです。今みたいに平らでなくて、沢があって、シラヌマナイという沢を降りて登って、小学校の玄関出たところで、ジャボンってこぼれて足に落ちると、下駄の鼻緒が切れるんですね。

そんなことをやっているうちに、運がいいのか、悪いのか、その日が一番ふのりを採る日だったんです。やってるうちに川村春雄君のお父さんが、かます背負って、わらじ履いて、怒って来たもね～「今日は何の日だと思ってる！一番ふのりの日だ、どうして生徒を帰さないんだ～」そのふのり採りの日はみんな休みになって、家に帰るわけです。それを返さないで罰をさせているわけですから、プラスバンドの指導をしていた坂口安次郎先生、生徒は悪口で「あんじろう」って呼んでましたけど、「この青二才！」って先生がやられて、「一番ふのりの日って気づかんかった、帰れ！」ってことありましたね。

その頃は、組合で札（鑑札）を買うと一般の人でも海藻を採れました。僕なんか寝坊で寝ていると胸ぐらつかまれて起こされて「幸雄起きれ、今日は住吉さんでふのり採るぞー！」って、母親にね。昔、住吉神社は今の灯台公園の山にあったんです。そこが住吉山。今は、崩されて平地にされ、山の上にあった灯台が降ろされて、記念の灯台になっていますが、昔は山が海ま

で続いていました。その先、岩が続いていて、そこへふのりを採りにいきました。帰ると家の前で、ムシロを広げて、干して、ゴミを拾って、乾燥させて、組合の集荷日に出すわけです。

私の家に昔の鑑札ありますよ。笛舞の島さん、島龍左衛門さんの木の札です。



コンブの鑑札（表裏）

米

両親は畑でイモ、カボチャを作っていました。畑といっても平地ではありません。斜面ですから、耕して作ってました。幌泉は米が穫れないところですから、米は三石まで買いに行くんです。僕がちょうど出張で三石の本桐まで行ったら、本桐郵便局の人が「佐藤さん、米少し持ってけ。」って、持たしてくれて。ところが、バスで来ると警察官が張り込んでいるんですよ。様子の駅なんかで、見つかると全部徴発されるわけですから、米を買ってきた人は、闇米ですから、バスが駅に着く前に窓から外に落とす。バスを降りてから、落とした荷物を取りに行っていました。

冬島でバスが止まったことがありました。そこから幌泉まで歩くということで、みんな歩き出す。ところが、米を持っている人は、ほかの人と同じように、当り前に歩くことができない。たまたま、バスに乗ったときに幌満の警察官と一緒にだったんです。二人で歩きながら、後ろから米の買出しの人が遅れながら5～6人来るのがわかるんです。トンネルの中で、なるべく警察官と話しながら端に寄るんです。そうすると、米の人が私たちを抜いていくわけです。その時、警察官も私と一生懸命しゃべるんです。そのうちみんな先に行つてね。警察官が「佐藤さん、宿世話するから幌満に泊まっていきなさい。」って高山さんというお宅に泊めていただきました。米の買出しの人も必死だったからね。

当時の木炭バスは、薪で走ってました。握り拳を薄くしたような木片をバスの後ろのタンクに詰めるんです。バスの外側にタンクが付いていました。

トラック

戦後、スタルヒンが帯広に来るということで、さあ、見に行こうということで、今の商工会の所に林カネキ旅館があって、そのトラックで行きました。トラッ

クの上に乗かって、シートをかぶっていくんです。トラックの木炭、燃やすところが荷台の前にあるわけですから、僕らの上を煙が走るわけですよね。丹さんという魚屋さんが同じ荷台の上にマグロを1本乗せて帯広まで運ぶわけです。野球見に行く人、マグロを運ぶ人、いやいやひどかったですね。

先祖の出身地

私の祖母は能登出身です。珠洲市の近くです。昭和29年に合併になったところです。明治の早い時期に来ているんでしょう。扇谷似太郎さんが、北前船が幌泉に寄るようにしたのが、明治の15年ごろなんですよ。それ以前ですから、生まれたところを訪ねるなんて想像もしなかったでしょうね。

私の先祖は鍛冶屋でした。おそらく北前船で来たんでしょうけど。幌泉でも鍛冶屋をやって、屋根にトタンを葺くようになってから、板金もしてました。学校卒業したときは、病院の事務方やっていたようです。山田病院です。その後、鍛冶屋のようです。

山田病院

おやじは小学校の頃、成績がよかったようで、病院から引っ張られたのでしょ。山田病院は、今の沢町のだるまやさん、そこにありました。岬でも病院をやるんです。そのあと、今のサンマートの所で山田病院をやったんです。うちで、子供たちが具合悪くなるとみんな山田病院でした。

石川重吉さん

石川さんは笛舞村農(みのり)にいました。下笛舞の奥の、通称炭焼きコタンというところ。

明治の最初ですね。開拓史の中判官として勤めていた榎本に随行するのが東洋の石川重得さんです。岩手県南部の金銀銅鉛の銅山補手代だったんです。蝦夷地の金銀銅鉛の検分に来たわけです。

榎本が歴船川の調査をしていたのを石川が引き続きやるということが、広尾町史に載っています。歴船川の下流を日方川といいます。

昔の食糧確保

そのころ幌泉には定期船は来ていませんから、米は持ってくるだけ持ってきてもらっています。なんとかその米を食い伸ばさなきゃいけないということで、イモでもカボチャでも果物でもとれるところに入ったわけです。炭焼きコタン、苫別、産馬牧場なんかです。コンブの時期になれば浜に移動する。「すみやかたん」と呼ぶこともありました。

町のはじまり

南部家が幌泉の最初ですね。墓地の前の道を作って、

沢町をまず開いていく。

大内さんと工藤さん

大内守三さんと工藤紋弥さんは本当に仲がよかったです。工藤さんが馬で来ると大内さんへ寄る。大内さんと工藤さんが、“だるまや”さん、中野鉄蔵さんのところへお酒を飲みに行く、二人はきちんとした飲み方をします。夜になると、“だるまや”さんではお客さんを残して寝てしまう、大内さんと工藤さんは火の始末をちゃんとする、灰をかけて火が他に飛ばないようにする、ということで信用されていたんでしょうね。

工藤紋弥さんの娘さん、工藤すえのさん、女学校を出て猿留郵便局へ勤めてました。藤原順子さんと工藤すえのさんは藤原家へ下宿してました、高等科時代、それから女学校へ行ったんですね。

札幌県、函館県、根室県だった時代に、十勝は札幌県だった。大内平八郎が郡書記で来ていた。十勝を分離しようと広尾と當縁を浦河に残して、五郡を十勝支庁とし、長には大内平八郎になって、大津にその支庁ができるわけです。

長岡さん

庶野の長岡さんは明治3年に来ている、守田さんは杉浦嘉七と取引があって、漁場と場所請負を引き受けたのでしょ、明治2年に入ってきています。

小越の病院

小越の病院、小越博愛医館木村薬室。油駒とウタロップ村、二つの村から、えりも岬の病院へ通っているわけです。



小越博愛医館の薬袋

開拓使の時代

北海道庁になって、警察署が浦河に移動するわけです。明治19年です。

開拓使の関大主典に従って来たのが、伊藤れいかいさん、渡辺公平さんの親戚です。幌泉周辺の管理に来ているわけです。開拓使でも農業ではなかった、漁業

しかなかったですから、今の山形さんの下の小林床屋さんが、会所跡です。

会所前

東洋の人は「仕事なくなった。かしょまえ（会所前）さいくぞ〜」と、仕事がある、舢の仕事、定期船が入ってくると荷降ろし積み込みがあるんで、会所前に行く人が多かったんでしょうね。力のある大きな人が、舢を、歩み板を、パンパンパンと渡っていきますからね〜積み込んだら、舢が出て本船に積み込む、また荷を降ろしてくるといことです。

明治の香典帳

明治 26 年の香典帳があります。定期船が来る前、みんな成り物のいい場所に入った。そのときにこういう寺ができた、幌泉法善寺、法光寺の記載もあります。法光寺さんの初代、長浜さん、扇谷似太郎商店の小口のお得意さん、佐藤善助（私の祖先）、林重吉、本間菊蔵、「ヤマカノ酒屋の水」は今でも竹内さんのところから下へ流れている水がそうです。大内平八郎さんの名もあります。会所前。「山の上」は風があってなかなか家がたたないところ、成田由五郎、昔旅館だったんです。蛸子よしじろう、小越の郵便局長になる人の名もあります。「山の上」とはカネサさんのところから、坂を上がって、芳賀さんから上を「山の上」と言いました。

お風呂屋さん

留め湯のお風呂屋さん。扇谷さんでも風呂屋さんをやっていた。沢町のみゆきの隣のところに亀田という割烹があって、お客さんをもてなす女性を風呂に先に入れる、その後、風呂に入る人がいないから、近所の人があだでもらいにくる。そこへ、割烹へ来たお客さんが、「なんだ俺ら金払って来ているのに、俺らも入れる。」ということになって、亀田さんでは、風呂屋やるうと。そして扇谷さんでもやるようになる。留め湯四人分で行くくらい、という記述があります。中沢徳兵衛さん、白米 50 俵も買うんですね、お店屋さんだから。扇谷似太郎商店が函館と取引していました。昔の会所の跡でやっていた。

だるま屋さんは、はじめナンブケにあったんです。沢町が切り開かれたので引っ越してきた。沢町の岡崎さん、喜多さんのとなり、菅沼さんの通りの山側の方、裏通りを下りた角地にありました。

（平成 17 年 8 月ほか採録、中岡俊子・中岡利泰）



ふじの湯のマッチ箱

笛舞の昔を語る会

（昭和 55 年 4 月 20 日の記録テープから抜粋。）

小笠原キクエさんが管理していたササヒラさんの小屋をほぐしたときに出てきた資料を、佐藤幸雄と神子島清八さんが受け取りに行ったが、すでに捨てられており、二人で一部を回収、その資料を使って佐藤幸雄がお話をする。

その小屋には明治時代のダイナマイトが出てきた。幌泉浦河の警察が来て調べていた。

明治の香典帳

明治 7 年の澤さんの香典帳です。ポロモイの長吉とあります。白米三升、大白豆（だいはくず：大福用）一升、ロウロク（ろうそく）3 丁、金一朱。チカヨップの与助、一つ金一朱、天保 4 枚、松太郎、中には十銭という、当時ではまだ珍しい銭というお金、明治 4 年から銭円になりました。このへんにはまだ新しいお金が出回っていない。チカヨップの長吉、堤の本家の先祖だと思えます。笛舞に「高浜の」という記述があります。「高浜のコウスケ」「高浜のゴンジロウ」「ナカトリのウイチ」。シラヌマナイはえりも小学校のシラヌマ橋のところ、シラヌマナイのチョウサプロウ。ポロモイの長吉、ポロモイは大きな湾、堤さんの辺。アベヤキの傳太郎、幌泉の方では若い人が知っていました、クマと格闘したデンさんだっ。デンさんってクマ獲りだった。

まだ苗字がついていません、どここの誰それって。明治 3 年 9 月に戸籍法ができますが、まだ明治 7 年の幌泉周辺では戸籍法の適応がまだできていない時代。ところが寺島さんは当時から苗字がついていた。松前からきた人。村長制の前の戸長でした。

サツコツのシンキチ。ホロマンベツの源吉、幌満の渡し守ですね。お布施が金 2 両と書いています。

お寺

明治 26 年日清戦争の時代の資料。幌泉の法善寺と書いてあります。能入寺は函館の能入坊から直接来ています。法光寺さんもある。光明寺さんもある。法善寺は、善法寺さんか、大法寺さんか、またまた別の寺か？はつきりわかっていません。大法寺さん、長坂さんが来る前に、一度寺号取り消しになっています。以前は、なんと呼ばれていたのか？知りたいものです。

商店

幌泉の今の竹内商店、昔の小山田というカフェがあった。「ふなばや」という遊郭がでてくる。苗字はなるみ？ですね。「ふなばや」の仏壇が今でも使われています。小山内定五郎・秀夫さんのところで。「ふ

なばや”の後が“福原”という遊郭になり、“まるし青山”という遊郭になり、ナンブケから“だるまや”さんがきて、“だるまや”という食堂になるんですね。

幌泉で料理屋で古いのは“だるまや”さんです。そこに石井さんがわらじを脱いで、“だるまや”さんは“またまん”という屋号、わらじを脱いだ石井さんも“またまん”で働いています。山の上の成田よしおさん、成田由五郎さんも“だるまや”にわらじを脱いでいます。で、いまだに“わらじ組み”の関係でおつきあいをしている。



「だるまや」のマッチ箱

菅原さん、宮津さん、山本八衛門さん、堺さん。

当時の香典は10銭20銭、お布施が2円50銭、道具料が50銭、光明寺さんへ1円、合わせて4円払っています。明治7年は2両でした。

幌泉に扇谷商店ってありましたね。函館のゴミチョウベイという店と取引している。なんでもやっています、風呂、中沢さんへ物を売っている、たまさと、みやこ丸の運賃、扇谷さんでチャーターしていた船です。一月121円80銭白米50俵貸し、扇谷さんから中沢さんへ白米50俵貸しています。味噌7樽、醤油3函で1こごり、これを3こごり貸している。みやこ丸の運賃7円いくらかを立替えました。中沢さんのナンブケの方へ運びましたと書いてあります。

東洋の神田宇三郎、今の神田由太郎さんの先祖へは“だいらょう”という名のタバコ、“白かな”、“黒かな”。“だいらょう”というのはろうそく、“するはん”10、“するはん”とは汁椀のこと。“ちゃはん”は茶碗。“みやこどり”20玉、タバコです。酒はどの店でも「大山酒」ばかり、あば縄など書いてあります。

幌泉の顧客はいっぱいひとからめです。私の先祖、佐藤善助、大内平八郎、法光寺さん、佐野さんの前が国下さん、その前が長浜さん、長浜寺と書いてあります。何を買ったのか書いてある。林重吉さん、ヤマカカの酒屋だの、本間菊蔵、今の信用金庫のところ、前が国鉄のバス停、それ以前は太田カネコ店、その向かし(向かい側)が本間という店でした。

目黒から馬で

目黒の本間さんは、会所町から目黒に引っ越すわけです。本間さんが幌泉にいるときに、西川さんが店を出す明治31年。本間さんが目黒に引っ越してから、

時々西川さんへ遊びに来ていたようです。「かねに」の西川さんの広告も持っています。明治36年。「おどろくなかれ、大景品つき、タバコの大売出し。」阿波たばこ。鳴門の、淡路のたばこです。タバコは明治35年から専売になりますが、北海道に制度が入ってくるのに時間がかかるので、こうなるんです。

当たりくじを必ず子供に引かせる。1等に白米5俵、当たったのを最初にひばたら1等、次が2等。100等まで行く、100等は風呂敷1枚、101等、1がつくとまた白米1俵。

本間さんが遊びに来ると西川さんも歓待してたそうです。本間さんは孫に馬を引かせて猿留から来るそうです。夜また、クマの出る猿留山道を孫が引く馬に揺られて帰っていったそうです。



猿留山道(平成18年6月笛舞小学校生徒が歩く)

商店

西川さん、大火のとき(昭和10年)に焼け残ったわけです。商品を焼かないようにと、建て直すときに、地下室を作るんです。これには歌別の岩間さん方が出面に来たそうです。土をとってみたら、「粕釜」の跡がいっぱい出てくるわけです。埋めていたんですね。

だるま屋さん、石井さん、成田さんが来たときは、幌泉の沢町はまだヤチだった。ヤチでヤチで、ドングイわらで、手のまわらない大きな木があったといひます。沢町は明治になってから開けた。ナンブケが先に開けていた。その証拠はお墓です。墓地はナンブケが見えるところに造られていた。沢町が先にできていれば、沢町を見下ろせる高台に墓地ができていたはず。ナンブケの橋は長さ9間、幅9尺、高さ5尺あったそうです。橋の見積書、これも長岡清次郎さんがやっています。

明治7年のお布施が2両、明治6年の借用証文、200両と300両。莫大な金額の証文です。当月中に元利そろえて返しますよと書いてある。ここから幌泉の経済活動が大きかったことがうかがえます。「10両ぬすんだら首が飛ぶ。」といわれた江戸時代のすぐ後です。

明治2年ごろは、だれも明治2年とは言わなかった。慶應5年と言っていた。まだ、箱館(函館)で戦争していた時代です。

西川さんとサメ釣り

幌泉裁判所書記官、長岡さんとのやりとりの封筒です。幌泉鮮魚組合というのもあったんですね。サメ釣りで川崎船が18艘あった。サメの供養塔が法光寺境内にあります。西川さんの話ですと、サメのために西川さんでは2艘の船を持っていた。でもサメでうまくいなくて大変だったそうです。函館から商品を入れていた。秀吉に追い出される近江八幡の商人がみんな松前箱館に来たそうです。西川さんも、その子孫。それで、箱館の西川関係の人たちが助けてくれたそうです。

三陸津波

庶野のばあさんたちは、小さいときから、「津波になったら戸を押さえてないで、逃げろよ〜」って。明治29年の津波の時には、庶野の咲梅にいた人が、板戸を押さえていた。その板戸ごと返り波で持っていかれ、流されてしまった。今のばあさんのばあさんからそう教わった。このとき、岩手県では2万3千人が死んでいる。

在田さんの手紙は、救助に関するものです。

猿留山道

様似山道・猿留山道を作るときに、遠山金四郎が幌泉に来ている。遠山の金さん景元、がテレビに出てくる人、江戸の終わりの話、その親が、幌満の念仏坂を降りてくる、ヘビがいやだった、お供の者がヘビを退治しながらきた。1800年のことです。幌泉には五つ半に着いた、晩の9時から10時に着いたと。幌泉には17日間滞在する。その間に猿留で家来の奴が溺れて死んだり、そんな日記が「未曾有日記」に出ている。当時函館の奉行をしていた羽太小左衛門の日記にも、遠山金四郎景国が幌泉まで巡視したと書いてあります。幕府の目付け、監査役でした。国後で和人が70人ほど殺される、日本人はアイヌを過酷にあつかった、口



猿留山道沼見峠から豊似湖を望む(平成18年6月)

シヤは親切に接した。ロシアはキリスト教を入れてくる、アイヌの子供にもロシア語の名をつけていく、アイヌは日本人を必要としなくなった。その連絡がなかなか伝わらない、国後から江戸へ。海が時化ると船は動かない。その連絡をとるための道路を作るために遠山たちが来たわけです。金をかけないでできるだけ早く作りたい、住民のための道路かということ、そういうわけでない。住民のためなら幌泉から庶野へ抜ける道、でも山道はコロップからまっすぐ猿留へ抜ける。これが猿留山道です。何か事件があったら馬が走って、人が走って、早くいけるようにする道路でした。<猿留山道の開削は寛政十一年(1799年)。>

佐藤) 笛舞の「たかはま」どこでしょうか?

参加者) ウェンコタンとは言いますね。シャッコタン、ポロマイ、ワツパシタ、山本啓一さんのへんからアイヌの宝物でたことあるんだ。昔は浜歩いていたんだ、国道のないとき。

参加者) 明治37年にできたナンブケ橋通って学校通った記憶がある。国道を作るとき土方で働きに来た人がキツネにだまされて、ポロナイのコンブ寄るところに入ったって話あったべ。俺が15のとき。

参加者) このへん船少なかったから、コンブたくさん採れた。クレオソート積んだ船干珠丸が遭難して、掃除した後はたくさん採れたが、その前と今じゃ同じでしょう。少なかったときは16駄しか採れなかったこともあった。一番で350駄のときもあった。

参加者) 俺が流しで釧路にまわってて、マス切り上げてくると、この辺の浜さマグロが何百と揚がってた。仲買が5円で買ってさ、5円で釧路まで運搬したもの、私らがね。コンパス一つ、感だけで釧路に通ったもんです。昭和12年13年14年ごろ。

佐藤) どこの家にもまわってましたね。3軒で組んで買ってけれって、3円から5円でした。煮て食って、焼いて食って、あましてるときだもんね。

参加者) 歌別から上(かみ)にマグロ獲れる網が入っていた。下(しも)側はニシン獲る網しか入ってなかったから獲れなかった。延縄で大きなオヒョウ釣れたね、どこへ行ったんだろうね。資源が絶えたってことでしょう。オヒョウの冷蔵船が来てましたから、量1量ほどのオヒョウを高く買ってくれるって、親父たちも釣ってましたね。

佐藤) 庶野では、盆かお祭りのときにオヒョウ釣りに

いってました。切り身をもらったけれど、身が厚かったです。もう、幻の魚ですね。

参加者) 当時は、獲れても商品にならなかった。

参加者) 北村音松さんが笛舞の最初の人。今は三代目。

参加者) 襟裳の灯台の時計、買ったんだ。何年も前に。町長がくれて言ったけど、俺も困ってるから何ぼでもいいから買ってけれって、でもこの間、苦小牧の骨董屋に何十万で売ってしまった。

目黒の昔を語る会

(昭和55年5月20日の記録テープから抜粋。)

参加者) 工藤さんの死んだじいさま(紋弥さん)の話では、猿留はアイヌの言葉でサルルンということらしいよ。紋弥さんの言うにはワラビタイに水溜りがあったんだって、そこにツルが降りるんだって、で、アイヌ語でツルのことをサルルンということらしい、ツルのいる村ってということらしいと聞いた。

参加者) 函館から船が来て、舳使って川向かいへ荷を降ろすと、今度は荷を背負って、川舟に乗ってくるわけですね。番人が乗って、お客がそれぞれ漕いで、1回2銭ぐらいでしたかね。馬で来て、無理に渡って、見えなくなって、それから渡し船に変わったと聞いています。川船は行ったり来たりするので、前後に動く四角い感じの船でした。

参加者) うちの爺さんは東北から来た船大工。

参加者) 昔は、猿留の集落の周りも大きな木が生えていて、遠くの山なんか見えませんでした。昔、マッチ工場がありました。

参加者) 佃さんは漁場、缶詰工場も。材料はアキアジ。船に乗せて函館に出していたが、その船が沈んで傾いたらしい。わしら学校上がるまでやってた。

参加者) 昔、聞いたことあるんだけど、奥にチャツナイという川があってそこにのぼるんだってね、獲った魚を結んで川流ししてきたことがあった。それぐらいのぼった。

佐藤) 成田由五郎さん、この人は函館戦争の時、弾の下くぐって歩いてた。「おっかないもんだって、戦争って、大砲っておっかないもんだ。」って、苦小牧に逃げてきた。この人のかか様が18、子供2人いた。女

の子2人、それを馬の振り分けの籠に入れて逃げてきた。苦小牧から幌泉までず〜と海岸を来たそうです。苦労したのは川を越えるときだったそうです。(橋がない時代)。海岸を来るといい砂浜だと思って、馬を進めていると、馬が急に足をとられる、魚の死骸の上に砂が積もっていたそうです。子孫の方々がそういうお話をしている。

参加者) わしらが物心ついた時には、家は草囲いだっただね。板囲いは何軒もなかった。ドングイをさぐり(外壁)にしてね、ムシ口張って暮らしてたね。昆布小屋は入札あるので、ドングイのかけに昆布小屋、前さムシ口張ってね、コンブ採って、出荷して。桎屋根、桎にわたったもんですよ。風さ吹くとね、6尺ぐらいの長さの、窓もなかったね。熱くなるとムシ口はいでね。窓ガラスなんかない、そんな時代でした。

参加者) 炊事場は、流しがあって、水汲んできて置いておいて、魚こさえたりね。木で流し作って、水は木のといで外まで出して。朝のごはん、仕度するに川さ行って、魚とってきて。

参加者) ほとんどのものは函館から、米、醤油、味噌、着る物、雑貨、昆布出して。300トン位の船が沖にくると、磯舟で行って、積んでくるんだ。川向かいが浜がいいから、上がって、背負って、川渡しに乗って、市街に配ったんです。月に2回位かな、コンブの時期には、連絡して来てもらったり。



いろいろな下駄とわらじ

参加者) 食べるものは代用食ばかり、米なんかないんだわ、イモ、カボチャ、麦。イモ、カボチャ、ダイコンは作りました。戦争の中心はまだつらいもんだと、そうだと思えば、なおそれほどでねえんだものね、別に戦争じゃねえんだから。

参加者) ご馳走ってなかったな。魚ばかり。ぼたもちは、何軒かでしか食べれなかった感じですよ。

参加者) 函館から樽をね、玉さく(樽を結んだもの)買って、黒砂糖を使ったもんですよ。何を作っても黒砂糖、甘いものをご馳走だったかな。大正時代だもの。盆暮れ勘定でしたよ。

参加者) 幌泉には賭博場がありましたが、猿留にも賭博場がありましたよ。猿留に遊郭が三軒あった時代もあります。マッチ工場があったころ。マッチの軸を作って船で送ってたんです。

参加者) 今の生活館の所に石屋根の家があって、川向の番屋で、引き網で魚獲ったったな、今の番屋の下あたりに、引き場ってのがあったんだな。昔、室蘭から大津までの百万長者を紹介する本に、猿留では目黒さんだけが載っていました。

佐藤) 目黒さんが、“かます”(むしろを袋状にしたもの)に4つ、天保銭を持っていたと聞いたことありませんか? その天保銭で鍋をこしらえました。

参加者) 目黒さんの初代はお金があったそうだが、二代三代四代と養子が続いて、函館の方にもお金を送るのに、サケを弁財船で運んだといえますよ。

佐藤) 米谷昇太郎さん(明治33年生まれ、三代目です。)先祖は津軽出身です。漁師ですね。大津に来て、それから猿留にきたんだけど、幌泉にまず入ったというんだ、幌泉で蕎麦屋やったといえます。岡部さんの先祖が亡くなって、猿留に来たと聞いています。

参加者) 学校は猿留尋常小学校、歴史は好きでしたね、算術は好きではなかったね。昔はテストも通信簿もなかったね。家が貧乏だと学校へ行けなかった。行くといっても1日ばかりだからね、歩いて行きました。下駄はいて学校へ行きました。トドの皮の鼻緒でした。足が臭くてね。皮1枚で下駄3足ぐらいいはけた。強いんですよ。しまい、よく切らずもんだから親が針金で鼻緒をこさえて、足がくさちゃって(化膿して)下駄をはかなくなったこともあったよ。服は着物でしたよ。冬に学校行くと行っても“しぼととき”だね。かばんではなく風呂敷でした。石板持って、ノートなんかありませんよ。書いて、けて、書いて。教科書はありました。“ハタタコ”です。教科書に出ていたクラサイタ(と同じようなもの)。運動会はありました。今の赤石さんの本家の家があるでしょう、そこに学校があったんですよ。寺小屋のようなもの。竹馬、杭打ち(相手を倒したら勝ち)、川あそび(魚とり)、魚も昔はたくさんいました。海は波が荒いので遊びませんでした。川で充分泳げました。ヤマベなんか800も1000も釣ったもの。橋の下でも何百も釣れました。ヤマベ

が釣れなくなって10年はたつね。マスが上がらなくなった。山の木を切ってしまったからね。

田中さん) 目黒の町並みも変わりました。道路の幅が倍になりました。道の場所はほとんどかわりません。山通りと浜通り。今は108戸。戦争の前あたりが一番戸数が多かったといえます。戸数があっても人口が減ってしまう。

参加者) 目黒でもサメ釣りしました。アキアジをエサにして釣りました。3艘か4艘、田中さん、安田さん。幌泉の市場から灯台のふもとまで、サメがず〜と並んだことがありますよ。マグロでなくてサメ。大正時代。

坂本さん) 明治29年生まれ?。生まれたのは鶴川。目黒に来たのは明治30年? 浜も山もなんでもやった。夏はコンブ、冬になったら山に入って、春先に柁をやる。柁はトドマツ。

参加者) 田中松次郎さんの家でも柁やってた。屋根をふくのには柁ばかり使ったんだわ、だから柁屋が多かったんだわ。

参加者) 猿留の小学校を辞めて、16の時に漁場へ行って、猿留の郵便局に1年勤めて、漁場へ入って、18の時から船頭、びっしり今までやってたんです。建網の船頭、50年ぐらいやりました。目黒の関根さん二十何年、赤石さんに十何年、他に十何年行きました。関根さんも赤石さんも春秋やってました。家に帰れば正月でした。

参加者) 明治の頃には亀田忠五郎という人が川向かいにありました。わしらが本当に小さい時期でした。定置をしておりました。

参加者) 明治37年生まれ(女性)、昔の遊びは「あやこ」、女と男は一緒に遊ばなかった。

参加者) 昔は区別されていたというか。学校は近いから、みんな休まなかったよ。



歌別小学校の鐘

米谷) 私たちの頃は、小学校は6年でした。

佐藤) 最初は4年だったんですね。6年になって、また4年になって、高等科が2年、次の年高等が3年、また次の年高等が4年になったり、よく変わっていたんです。

参加者) 先生は校長一人でした。授業の始まりは鐘でしたね。

参加者: 女性) 19で結婚しました。

参加者: 男性) 昔は親の言いなりで、男も女も結婚しました。親がいいばいかった。親からもらうんだから。あの若い人はいいやつだとか。

参加者: 女性) 髪は自分で結ったね。

山本さん(女性): 佃さんの先祖が西南戦争に行った。砲兵だといいます。幌泉に来て、店してた。丸焼けしてしまって、昼の火事で、それでじいさまが猿留で漁場やってた。家から網投げて魚釣りできたって。八谷さんの話もしてたね(八谷さんは今のカネサ(生協)のところ)

佐藤) 能登の人だってね。屋号はヤマトメだったかな?

参加者) 松前丸がきてたね。アキアジ積んで。

参加者) 昔の結婚式、親戚だけでなく、近しい人みんな呼んで。みんな招待。嫁さんに付いて行く人は何人って、決められてたな。だいたい、決ったったな。嫁さんが婿さんの家に行くときは5~6人づつは付いて歩いたな。



本町山の上通り(時代不明)

参加者: 女性) 私は草模様の着物、角隠しはなしで、頭は単に結って。杯で三々九度して、タカオセン? オチヨウ(お蝶)? 男と女の子が媒酌人の指図で. お膳のご馳走は、一人一人のお膳でやった。今の方が簡単だ。二の膳、三の膳って。近所で手伝いにくるんだ。今は生活改善だ~ってね。

参加者) 葬式も故人の家でやった。部落中の人がある。立派な祭壇はなかった。自分たちで作ってね。昔は供物がみんな段の上に上がったもんです。火葬場はありますが、昔は墓場の横に焼く場所があって、露天で焼いていました。そこに持って行って、置いて、木かぶせて、火をつけるわけさ。その前はほとんど土葬だった。

参加者) 産婆さんはいったよ。菊地さん。その前にもいたよ。取り上げるのが上手な人が産婆さんだった。母乳出ない人はごはん炊いて、その汁を与えていました。昔は子供が多かったな、7~8人は普通だった。戦争当時は産めよ増やせよで、10人産んだら表彰された。

参加者) よそから何かもらっても、一人では食べなかった、みんなで分けて食べたもんです。寝るときもくっついて寝ていましたね。

参加者) 祭りは盛大でした。今は当番あったけど、昔は全体でやったもんです。集まって飲むのがね、盛大でした。昔はたくさん飲んだ。祭りでも芝居演芸ってやったからね。今は歌が多いでしょ。祭りの準備とかは青年たちが全部やった。神輿も、山車も出しましたよ。夏祭りになると結構な賑わいですよ。昔は春もやったからね。運動会も部落中でやったからね。

参加者: 工藤さん?) 榎本武揚が猿留に来たとき、化け物屋敷といって、化け物が出る部屋があったそう。榎本がなるべくお客さんが泊まらないような、お客さんと引付くような部屋はさけて、なるべく離れのような部屋に泊まったのが、化け物が出る部屋だった。朝ま帰るときに柱に何か書いていったそう。函館から来た人が当時で1000円で譲ってけれって言ったそうだけど、柱を切り取って、持っていったけど函館大火で焼いてしまった。

参加者: 複数の声) コンブ増殖のために投石をしているが、いつからしてたか知らない。そんなに早くしていない、わしらが覚えから、14~15年もたちますかね。川向でね、14~15年できないな。樺太行く前からやってた。だいが前からやってた。

山形昌一 昭和3年(1928年)生れ

明治前に移住

私の曾祖父・山形亥三郎は、北海道がまだ蝦夷地と呼ばれていた頃、函館から一家で幌泉・小越村に移住したと聞かされています。幌泉場所請負人・福島屋(杉浦)嘉七が小越(現・えりも岬)で経営していた番屋の管理人として、原住民のアイヌを使役して漁をさせ、生産物の集荷・買上げ、あるいは生活用品と物物交換するような業務であったと思います。

元治元年(1864) 明治になる4年前には小越に、山形、柳田、上野の姓の者3戸が定住していたとの記録がありますが、それは曾祖父らのことです。明治5年には、青森県人を主体に、秋田、岩手県人ら50戸がえりも岬地区に移住し、船で直接上陸したそうです。移住漁民らは一時期、曾祖父らが管理していた大きな番屋に身を寄せて、住宅建築やコンブ干場の造成に励みました。

集落の形成経緯

移民には開拓使からは移民保護策として生活費の助成、福島屋は開拓使御用達として漁民にコンブ浜の割り当てや漁具・生活物資の仕込をしていましたが、曾祖父はその下請けとしてえりも岬地区を取り仕切っていました。

明治8年(1875) 幌泉郵便局が開局した年、福島屋が開拓使御用達を辞して函館に引き揚げましたが、その後は、曾祖父らは自分達で漁場を営むことになりました。当時の販売経路は、船で函館にコンブを出荷し、それを華僑(函館に住む中国商人)が買って中国に輸出していました。相場は、中国の国内が戦争などで経済が不安定になると暴落し、安定すると高騰する、の繰り返しであったようです。一般の商人は、函館から先の見通しはまったく分からなかったようです。

祖父は、えりも岬地区のために民生の安定にも尽力していたようで、明治4年に小樽の正法寺から寺院の許可を受けた迦葉院の壇信徒世話人として、施設整備に尽くしたと聞いています。大正9年には、先代の小林良道和尚(現・裕道住職の祖父)が24歳の若さで福島県会津若松から来寺したときも、曾祖父はその世話を引き受けていたそうです。

曾祖父は建網を営んでいましたが、地域の信望を集めていたことから、明治31年には、議会議員の前身の初代・幌泉村総代として、えりも岬地区から南条雄蔵氏とともに選ばれています。

その頃は、本町との間に満足な道路も無かったので、重病人は船で函館まで運んで行き、途中で亡くなる人もいたり、若死の人が多かったと聞かされています。

山形家のルーツ

曾祖父の父は武家の出で、姓名は遠藤又兵衛といますが、商人になったことから屋号として「山形屋」を名乗り、それが我が家の姓「山形」の由来です。曾祖父は、えりも岬に移住したときに、鎧・兜や文書類も持ってきており、鎧びつが真四角だったことで、鎧・兜は足利時代(室町時代)以前の作だったと思われます。それらの鎧は、祖父が文化財としての価値に疎かったため、納屋に保管していたときに、ネズミに喰われ、さらには秋祭りの仮装行列に貸し出して痛めたりしていたようです。その後、私が家を離れていた期間中に、捨ててしまい、後にとても悔しい思いをしたのです。

父のこと

父・信一郎はえりも岬生まれです。体が弱かったのでコンブは採取しなかったけれど、タコなどの水産加工を手掛け、弟の利三がコンブを操業していました。私もえりも岬へ帰ってから一時期、コンブ採取を手伝ったものです。

建網は賭け事のようなもので、2~3年不漁が続くと資金繰りが行き詰まって経営に苦しみました。町内業者も、それで淘汰されましたが、最後は岩間・山形漁業部が生き残ったのです。

三陸沖津波の来襲

私は、昭和3年3月えりも岬で、山形家の長男として生まれています。佐々木隆人前町長は同級生です。小学校へ入る年、昭和8年3月3日の深夜、えりも岬と庶野地区を襲った「三陸沖地震津波」のことは鮮明に記憶しています。前日の2日の昼、竹内君という友達とパッチをして遊び、彼に負けたのが悔しくて追っかけていきました。その夜半に来襲した津波で、海岸近くにあった竹内君の家が津波に攫われ、一家7人のうち4人が犠牲になったのです。子供心に悲しい出来事でした。そのときの罹災慰霊碑が襟裳神社の境内に建立されています。(建立当時は現在のえりも岬郵便局の交差点角にあった。)



昭和8年三陸沖地震津波記念碑(字えりも岬)

小学校時代

小学校3年生の頃に、えりも岬地区に初めて電気が導入されました。明るい電気が点灯したときは嬉しかったです。いま思えば薄暗い裸電球の明かりでしたが、ランプの火屋（ほや）磨きから解放されて安心したものです。

子供の頃には、えりも岬にも雑貨店のような高田商店があって、食品からパッチなども売っていました。店主は滋賀県の近江から移住してきたようでしたが、子供に恵まれなかったため鈴木勲さんの兄を養子にしていました。しかし、その子孫は現在も営業を続けています。

その頃、コンブを運ぶために、夏の期間のみ貨物定期船がえりも岬の沖に来て、荷物を舢舨に積んで船まで運びました。米、味噌、醤油などの生活物資も船で運ばれてきていました。それらの物資を取り仕切る回漕店もありました。

子供の頃に襟裳岬で大型貨物船が座礁した記憶があります。一隻は5~6千トンのピクトリア号という外国船でした。2隻とも鉄材を回収するために、間もなく引き揚げられました。

当時の小越尋常小学校は、襟裳郵便局の前局舎（昭和44年に町道沿いに移転改築）の隣にあり、在学中の昭和11年に高等科が新設されて、校舎が現在の小学校グラウンドの場所に移転改築（昭和39年火災で焼失）しました。5年生のときは、他校の運動会を見学に歩いて行ったものです。本町までは13キロほどですが、笛舞小学校まで20キロを超える距離で、歩いて行っても、すぐ帰らなければなりませんでした。

子供の頃の遊びは、自分らで考え出しながら遊んだものです。私がリーダーシップを発揮して遊びをいろいろ考えた記憶があります。

函館水産学校へ

私は昭和17年3月に高等科を卒業し、4月に函館・七重浜の庁立函館水産学校に入学できました。布団などは、日本通運で様似駅まで運び、そこからチッキ（鉄道便）で学校の寮まで届きました。前年の12月には太平洋戦争が勃発し、水産学校でも軍事教練が始まり軍事色へと変わってゆきました。

昭和17年頃には、えりも岬に陸軍の守備隊が駐屯していました。灯台の職員も多くいたり、他の集落とは異質の雰囲気でした。守備隊員だった東海林武雄さんは、地元の肥田さんの娘さんと結婚して、のち本町で鉄工所を営っていました。

水産講習所へ

私が函館水産学校を卒業したのは昭和20年3月です。4月には、東京水産講習所（現・東京水産大学）の分校に当たる朝鮮の釜山水産講習所に入学しまし

た。東京は米軍の空襲に晒されていたので釜山の方が安全だったことも原因です。講習所は2割弱が朝鮮系の学生だったと思います。しかし、昭和20年8月には終戦となり、9月に練習船で帰国しました。東京に帰ってきましたが、横須賀・久里浜の東京水産講習所校舎の一部が進駐軍に接収されていたので、下関海軍通信学校跡を校舎として使用することになって、急遽、下関に移動しました。

下関の校舎はバラック建てで粗末な建物でした。講習所は二分される形になったのです。その後、昭和22年の教育制度の改正で、東京水産大学と下関水産大学へと名称が変わりましたが、私が卒業したときは、水産大学卒業資格の水産講習所でした。

卒業後は農林省の国家試験を受けて合格しましたが、当時は公務員の給料が安かったので、同級生の多くは給料が倍も高かった太洋漁業、日本水産、日魯漁業などの大手水産会社へ就職したものです。私と一緒に合格して農林省へ入った人は、その後共済連や大日本水産会の副会長などの要職に就任しました。いま考えると、国家公務員に留まっていた方が良かったと思いますが、その時は相談する人もなく、若かったことから、給料の安い公務員に魅力を感じずともないまま帰郷してしまいました。

吉田正一元えりも町漁協組合長が日ソ漁業交渉の政府顧問としてソ連へ行ったとき、同じく政府顧問で先導した浅川次郎という人から、私と同級生だと聞かされたそうです。跡継ぎの立場からえりも岬に帰り、父と一緒に水産加工をしながら幌泉高校襟裳岬分校の教員をしていましたが、その後間もなく、函館水産学校の恩師で、当時、秋田県立船川水産高校の校長になっていた人から、高校の教員にならないかと誘いを受けたので、渡りに船とばかり、秋田に赴任し、同校で3年半ほど教鞭を執りました。その後再びえりも岬へ帰郷して水産加工に従事していたのです。

コンブの増殖

青年時代には村の初代水産技術普及員の岡部さんとともに、コンブの増殖の調査研究も手掛けました。「振興青年会」を結成して村役場から潜水具を買ってもらい、コンブ礁の調査や投石事業も行いました。しかし、投入した石にコンブが付着して成長すると、水中での浮力で石が軽くなって波で移動するために、人力で投入できるような石では効果が薄いことがわかりました。

気候の変化のこと

私が子供のころは、すでに百人浜一帯は禿山で、強いやませ（東風）が吹くと海面は真っ赤な状態でした。過去のデータ調査では、明治時代は現在のような気圧配置が続いたことで、寒くて台風はめったに襟裳岬へ

は接近しなかったので、建網の操業もできたのです。それが大正時代には気候が温暖になってから台風の通過が頻繁になり、禿山の覆土飛散に拍車がかかったと思います。

暖流の影響で、建網ではマグロ、フグ、カツオも漁獲されたが、コンブやサケは減産傾向をたどったのです。昭和の初期は、えりも岬でも強い台風が吹き、家が危険になって南条さんの頑丈な番屋に逃げた記憶もあります。現在は緑化もほぼ終わり、台風の接近も少なくなり、寒流の影響が強くなっていると思います。襟裳岬沖は、国内では有望な漁場といわれています。

町議会議員

私が幌泉町議会議員に当選したのは昭和 38 年 4 月です。町議で襟裳漁協の参事だった佐々木隆人さんが北海道指導漁連にスカウトされ、その後釜として地元の有志らの推薦を受けたからです。その時、えりも岬地区からは、私と生島芳雄さん、高橋栄治さんの 3 人が当選しています。翌 39 年には私が小学生のときに完成した思い出の校舎・襟裳小中学校校舎が火災で焼失しています。

私が町議会議員になって、吉田勘之助町長に最初にした一般質問は「襟裳漁港の整備について」でした。当時の漁港は防波堤も低いうえに港内も狭く、時化の時は安心して係留できない不安があり、港内で船を破損させた事故もたびたび起きていました。地元では「舟壊し潤」と呼んでいたのです。私は町議を 2 期勤め、町名が「えりも町」に代わった翌年の昭和 46 年に引退しました。商売と議会議員との両立が難しかったからです。

食品会社を設立

私が「えりも食品株式会社」を起こしたのは昭和 47 年 12 月です。日本国内でコンブの消費は必ず続くものと確信していたので、その食品加工を手掛け、今日まで継続していられます。わが人生、紆余曲折がありましたが、水産学を修めたことが活かされ、その方面での運にも恵まれて今日に至っています。

(平成 16 年 3 月 1 日採録、神子島清八)



襟裳小中学校焼失 (昭和 39 年)

藤井 健 蔵 昭和 3 年 (1928 年) 生れ

家族

ここノツナイで生まれた。8 人兄弟だが、2 人しか残っていない。俺と、金さんにかたっているのが妹で。一番目の兄は、兵隊にとられて死んだ。2 番目は「えつつこ (いずこ)」に入れられて、置いておかれたときに、ばい菌が入って、それが元で死んだ。他の兄弟も小さいときに早死にした。

親父は飲んだりして、人頼みばかりして、コンブ自分で採らないし、頼んだ人と喧嘩して、みんな帰ってしまった。そんな親だったんで 14 から、櫓こいで新浜の方までずっと行って、コンブ採った。ずっしり積んできた。

キツネにだまされる

キツネにだまされたということはよく聞いた。飲めば、飲んでだまされた、自分でだまされた気分になったんでないの。

笛舞の人が家によく来ていた。休め休めって言えば、よく寄っていった。町へ来て、飲んで帰るんだべさ、履物あっちこっちにやって、家に寄ったんだ。

兄がその履物拾ってきて、どういう履物かって言うから見せたら、「俺のだ。」ってこともあった。

ニワトリとキツネ

家で、ニワトリ 20 羽ばかり飼っていて、卵もとっていた。餌さくれに行くと、卵も取りにいいたら、キツネがドンと座ってニワトリをみんなやつつけて 1 ~ 2 羽残っていたかな。腹いっぱい食べて、どーんとながまっていた。俺はびっくりして跳ね上がってしまった。

もと、キツネはいっぱいたよ。ここ下がれば坂あるんだわ、今、渋田さんのあるあたりに巣穴がいっぱいあって、ぬくくなれば子っこ持って、出たり入ったりして、いっぱいいたのを覚えている。

だまされた!

キツネよりムジナ (タヌキ) の方が土性骨悪い、ムジナのほうがだまされやすい。

もと、配給の通帳があって、サッコツの道を帰ってくるとき、だまされて、裂いてしまって、ふっ散らかしてきたのを、拾ってきた人がいた。

南部家の沢に氷場所があって、飯田亀三郎さんっていう人が、氷場にジャブジャブ入って、出たり入ったり何度もやって、馬の糞、口にいっぱい入れて、自分の家さ行ったのか、誰かが見つけたのか、死にかけていたということもあった。

戦後のあたりだ、忘れてしまうども、だいたいそのあたりだ。俺が二十歳あたりだべよな~。

親父が言うには、笛舞の人が町さ行って、帰ってくれば、沖に船があって、それが町に見えたんだべさ。海さ向っては上がってくる。ふるってたそうだ。沖は明るくて海が光っていた、陸は暗いが水に反射して明るくなるから。

工事の現場でご飯食べて、昼寝していたら、相棒がだまされて、どっかへ行って、みんなで探したということも聞いた。

岩田健一さんという人が、様似で農家に行って、卵を買って、自転車で帰ってくるとき、あっ、けつつけられたな～と思って見ると、エプロンかけてきれいな女の人がいたんだって。「卵けるから帰れ」って言ってやったこともあると言ってた。

人ばかりでなく、キツネにもだまされることもあるんだなー、って思ってた。

タヌキ

家さまタギが遊びにきて、タヌキを持ってきた、すご～いノミがいた。たぬき汁は臭いがするんで食べなかった。

食べた

昔の人は、犬を殺してたべた、飲めば猫をごつんとやって食べていた。少し食べたことあるが、鶏肉のようにきれいでクセがなかった。焼酎飲むやつらが集まっては食べていた。カラスも虎バサミでとって食べた。

(平成 17 年 4 月採録、草野泰子、小川とく子)



幌泉市街 (昭和 42 年)



公民館 (昭和 45 年)

栃久保 幸一 昭和 3 年(1928 年)鹿追生れ

幌泉への道

父・栃久保耕太郎は道農業会の農業技術員として胆振の穂別町農業会に勤務していましたが、軍属として千島・色丹島、歯舞島へ農業技術指導のため単身派遣されました。昭和 20 年 8 月の終戦とともに、ソ連軍が千島列島を占領し始めたため、軍の配慮で占領される前に、色丹島から脱出することができました。

千島へ派遣されるときは、帰還後は希望の場所へ赴任させることになっていたのです。しかし前任地の穂別はすでに埋まっていたため、故郷の福島県で育った場所が海岸だったことから、海岸地の農業会への赴任を希望しました。

その時、幌泉農業会で農業技術員を探しており、農業会長を兼務していた長岡隆一村長の招聘で昭和 21 年(1946)3 月下旬に一家で幌泉へ着任しました。私はその年の 3 月上旬に旭川の旧制・永山農業学校を卒業していましたが、父はすぐ幌泉へ赴任したいとの意向でした。しかし、学校では私に、旭川市の青年学校教員の口を斡旋していてくれたのです。ですが、当時は下宿するには米の持参が必要だったため、就職を諦めて父と行動を共にして幌泉行きを決めたのです。

幌泉農業会に就職

見ず知らずの土地へ来村して、直ぐには条件の良い就職先が見つからなかったため沢町の奥地 4 キロ程の所に、山中清さんから 5 反歩ほどの畑を借りて食糧確保のために馬鈴薯づくりなどに精を出しました。昭和 21 年 12 月、父が農業指導員をしていた幌泉農業会に就職することができました。その後、22 年には農業協同組合法が施行され、翌 23 年 3 月には幌泉村農業協同組合が設立されました。

新農協の設立に発起人として尽力したのは広島千代吉さんで、長男の広島淳一さんが酪農を営っていました。千代吉さんは国道沿いの、旧北洋銀行幌泉支店の所(現在の竹内商店の所)で薬屋(売薬)を営んでいましたが、統制経済で廃業されたとのこと。

開拓入植の歴史

和里、桜岡、上歌別、豊幌に入植者が増えたのは昭和 21 年からで、団体入植ではなく、親類縁者を頼って来た人が多く、復員者、引揚者なども徐々に入植しました。豊幌は上歌別の岡さん宅の上の方で昭和 26 年に 7 戸が入植しました。上歌別は以前からの農業地帯で、戦前から岡辰吉さん外 12 戸が営農していました。戦後に入植した人の多くは、その後、過剰投資や牛の不受胎などの悪条件が重なって、離農していきました。

短角牛の導入

えりもに短角牛が本格的に導入されたのは昭和 25 年のことで凶漁対策でした。明治 20 年代当時、厚岸・浜中から導入したのを素牛にして、戦前から東洋の神田三太郎さんは 100 頭以上、年中放牧していましたが、大雪で餌が摂れずに多くの牛が死んだこともあと聞いています。私が来村した当時は、館田さんが和里の下、広島さんの向かいの土地で短角牛を蹄耕法で飼育しており、種牛も数頭所有していました。



羊の毛刈り（昭和 30 年代か）

馬の導入と競り

えりもでは戦前から馬の飼育が盛んであったようで、一般の人たちも多く所有していました。戦時中は村有牧野の有刺鉄線も軍へ供出の対象になったと聞いています。馬は特に軍馬としての需要が多く、荒川さんの先代で、人々から「馬政官」と呼ばれていた権太郎さんは、軍馬の生産に精根を尽くし、高く競り落とされると軍の調達官や将校の前で踊ったといひます。

荒川さんは、現在の診療所医師住宅から大内フミエさん宅付近の土地に厩舎を建てて、種馬と牝馬数頭を飼育していたと聞いています。

馬の飼料は当時「まんじゅう山」と呼ばれていた山（現在のふれあいの丘団地）の野草を刈り取っていました。その付近の土地の多くは、鹿野約翰さん（第三代鹿野村長）の土地であったといひます。軍からは購買官が来て破格の値段で馬を買い取ったそうです。昭和 12～13 年頃には、村内の飼育頭数が 2000 頭ほどに達していたそうです。

戦後も馬市のときは、多くの馬が競りに出され、市場は 3 日間位続いていました。用途は農耕馬で、主に九州方面へ出荷されていました。売られた馬は、飼い主から 10 日間ほど預託され、貨車の都合に合わせて様似駅まで国道を曳いていきました。

野生同様の馬を扱いやすくするために、まず先頭馬を決めて 10 頭ほど数珠繋ぎにして引き手が慣らし、朝の貨車積み込みに間に合うよう、数人で馬を追いながら夜通し歩いて運んだのです。引き手の中には、運び賃を様似駅前の「藤の屋」で夕方まで飲んで使い果

たす豪傑もいたようです。

当時から家畜放牧には村営牧野が多く使われていましたが、本格的な改良が進められたのは昭和 27 年の 3 ヶ年計画からです。その後、数度にわたる改良計画が進められてきました。

緬羊の導入（羊毛の確保）

緬羊の頭数は昭和 20 年代当初少なかったが、東洋やえりも岬を中心に飼育放牧されていました。本格的に導入されたのは 20 年代後半で、漁民が船で働く際、羊毛の保湿性に注目したことや、世の中の毛糸の需要も増えだし、羊毛と衣服の物物交換も行われていました。全道的な組織としてホクボウが誕生し、神田組合長も日高管内選出の役員になっていました。昭和 28 年が緬羊飼育の最高時で、村内で 2500 頭を飼育していました。

昭和 30 年代には、羊毛業者の委託を受けて、剪毛を請負う人もでたことから、農協は組織ぐるみで職員が羊毛の集荷のため、剪毛作業で農家を毎年 20 日間ほどかけて巡回しました。

早朝から夜遅くまで車のライトをつけての作業を強いられ、鉄での手刈りでだったので職員の多くは腱鞘炎に悩んだものです。

その成果として、ホクボウ傘下の組合で、えりも町農協は常に 10 位以内に入っていました。日高管内で、畑作のない農協として羊毛の集荷に大きく依存せざるを得なかったのです。

羊肉への転換

昭和 30 年代後半になると、化学繊維の衣服が普及し始めて羊毛の需要が下降ぎになり、変わって羊肉「ジンギスカン」への需要へ移っていきまいました。日高生産連では、屠畜場を門別町富川に開設しましたが、管内の農協では、出荷はえりも町農協が常にトップを保っていました。

ジンギスカンの需要には、羊毛用のコリデール種よりも肉羊に改良されたサフォーク種が適していることから、農林省が肉緬羊の改良増殖をはかるために、輸入サフォーク種 1 頭 5 万円とし、国が 3 万円、道が 1 万円、残りは受益者負担という制度を発足させました。

町とえりも岬緬羊組合と協議して 100 頭の導入を決め、道内で一番先に手を上げました。

道内では 1 市 6 町が導入を希望して、道が審査の結果、当町と羽幌町、網走市の南網走農協に決まりました。輸入の窓口は北海道緬羊協会で、同協会の杉山常務が購買責任者になり、その補佐役として、旅費の都合で 3 市町から 1 人が同行する事になりました。

抽選の結果、私の豪州行きが決まったのです。しかし、考えてみると、小規模の組合で、それに多忙な日々

を送っていたので、40日間の空白と、それに当時の感覚では豪州はあまりにも遠過ぎる外国でしたので、日高生産連の鈴木課長に辞退を申し出たのです。しかし、鈴木課長からは「海外はみんなが行きたがっている。せっかくのチャンスを活かすべきだ。」と説得されました。

また、前年に米国へ行って、ホルスタインの種牡牛ロイブルックテルスター号を購入してきた神田正秋組合長（当時、ホクレン専務で北海道綿羊協会の会長だった）からも「せっかく当たったのだから、勉強のためにも、組合のことは心配しないで行くべきである。」と励まされ、豪州行きを決断したのです。

そんなことで、町理事者をはじめ関係団体、有志の方々から公民館で、航海の安全を祈願して盛大な壮行会を催していただきました。それでも、出国は気が重たかったのですが、船での輸送には1頭の事故もなく、259頭を神戸の動物検疫所で検疫を受けた後、3市町の担当者に引き継いで、無事大役を果たしました。

えりも岬綿羊組合では、100頭の綿羊を基礎に、繁殖基礎300頭を目標にして、山村振興事業で畜舎1棟、草地改良6ヘクタールを実施しました。当初は順調に推移していましたが、放牧中に野犬に襲われる被害が絶えず、野犬掃討もなかなか効果があがりませんでした。

その後まもなく、輸入の自由化とともに外国からの安い羊肉が店頭に並ぶようになって、平成とともに、町内の牧野から綿羊の姿が消えました。現在は羽幌町だけが焼尻島で、豊富な草地と野犬皆無の中で綿羊を飼育しています。

家畜商の存在

昭和30年代には町内各集落に知事免許を持つ家畜商がいて、その数18人でした。農協は家畜を扱うのに免許は不要でしたが、集畜が軌道に乗るまでの間、家畜商の顔を立てるために、集落で家畜を買うときは、家畜商に手土産を持って挨拶にいったものです。

家畜商の多くは、口銭を稼ぐだけの存在だったのですが、本町の岡崎忠栄さんだけは、精肉も小売販売する業者でした。岡崎さんは、さらに、犬山さんや菅沼さんの山林を購入して、放牧地に変えて家畜を飼育する熱心な人でもありました。

（平成16年2月3日採録、神子島清八）



昭和30年代の網おこし

坂田達 昭和3年(1928年)生れ

収録の範囲：祖父のルーツから会社設立まで
祖父の時代にえりもへ

私は昭和3年6月16日、本町で生まれた。男5人、女3人の8人兄弟の三男だが兄2人は若くして他界している。祖父・末太郎は明治の半ば、青森県弘前市からえりもへ移住して、銭湯と回漕店を営んでいた。明治・大正時代のえりもは、道路も未整備で、経済交流はもっぱら船舶に依存していた。したがって、えりもは函館の商業圏として栄え、定期船に積み込む荷物は回漕店が取り扱っていた。

銭湯は幌泉川沿いの、現在のアキ理容店の場所で、養子であった父・保治は銭湯を引き継いでいたが、体調を崩して昭和20年4月に50歳で死去している。私は17歳で父を失った。銭湯施設はその後、佐藤さんという人に貸し、後に同じ場所に改築して渡辺嘉雄さんが銭湯を営業していた。

旧制・函館中学校時代

私は幌泉尋常高等小学校の小学校6年を卒業して、昭和16年4月、旧制・庁立函館中学校（現・函館中部高校）へ進学した。当時は、様似から列車で、函館まで16時間を要する長旅であった。特に日高線は客車と貨物の混合運行であったので、様似・苫小牧間は6時間もかかっていた。

帰省のときは、函館発午後11時半の稚内行き急行・夜行列車に乗車して翌日朝8時半頃に苫小牧に到着、日高線に乗り替えて、バスでえりも（幌泉）へ着くのは午後4時頃であった。

当時、えりもからの進学は、当地と函館が、昔から経済交流があった関係で、多くの子弟が函館を選び、中学校のほか、工業学校、水産学校、商業学校へ進学していた。

佐々木隆人前町長や山形昌一さんも函館水産学校に在学していた。

函館中学入学の年、昭和16年12月8日には太平洋戦争が勃発した。世相は次第に戦時色が濃くなりつつあり、中学校には職業軍人の配属将校がいて、生徒に軍事教練を指導していた。生徒の制服は黒の学生服であったが、教練時にはカーキ色の制服も着た。制帽は学生帽に白線3本入りであった。

私は父の知人宅に下宿して通学していたが、3年生頃になると食糧をはじめ物資が統制になり、弁当は米粒より大豆の方が多くなり、育ち盛りにひもじい思いをした記憶が今も鮮明である。

最初の下宿先が夕張へ引っ越すことになって、替わった下宿先は、えりも岬の福士徳治さんの伯父の家で、伯父もえりも岬出身で夫婦とも教員経験者であった。そこには、えりもからの生徒が多く、渡辺英樹さんの

叔父、後に、山中貞先生の夫になった人たちがだった。

戦争がだんだん激しくなった昭和18年(4月・ラバウル基地から前線視察中の山本五十六連合艦隊司令官搭乗機が撃墜される)4月、3年生になってからは勉強は二の次で、全校生徒が「勤労奉仕」という名の肉体労働に駆り出された。

働き手が兵隊にとられた函館近くの知内町や上磯町の農家には、田植え作業で生徒が一人ずつ農家に割り当てられ、一日中農作業に従事した。

夏は噴火湾の八雲町で、飛行場建設のための土方人夫として使役させられ、厳冬の夕張山中では、飯場に泊まって、造材現場の原木搬出、道路の造成にも使役させられた。現在の中学生の年代、16歳で大人並みの労働に従事させられていたのである。

函館港では、貨車から降ろされた石炭を貨物船に積み込む労働で、もっこにスコップで石炭を入れる作業に従事した。それを二人で担いで船内に運ぶのは、米英軍などの白人捕虜たちであった。

義務教育や一般社会では、英語は敵国語として排斥されていたが、戦時中であっても中学校では英語の授業があったので、作業中に捕虜と片言の英語が通じた記憶がある。

戦況が悪化した昭和19年4月、私が4年生になったときから、中学校では、陸軍士官学校、海軍兵学校志願を含む大学進学組と、海軍予科練習生や下士官など兵隊志願組にクラス分けした授業が行われるようになった。大学進学組には英語授業があって、兵隊志願組はその時間には、もっぱら軍事教練が課せられた。

昭和19年度からは、中学校の修業年数が5年制から4年制に短縮された。前線に送る兵員の早期確保のためである。したがって、終戦の年、昭和20年3月の卒業式で、4年生を修了した私は、5年生と一緒に卒業した。

軍隊へ志願

我々中学生は、20歳までに“天皇のために喜んで死ぬ”ことを誇りとする教育を受けていた。一種の“洗脳”である。したがって、昭和20年3月、函館中学



軍馬事務所(昭和10年代か)

校を卒業すると、ちゅうちょすることなく自分の意思で陸軍航空兵へ志願した。大学生らは在学中に、学徒出陣で半強制的に見習士官にさせられ、特攻隊へと駆り立てられていたので、胸中は複雑であったと思う。

私は特別幹部候補生として、兵庫県の加古川へ入隊した。そこで「第1希望」「第2希望」を問われ、私は第1希望の戦闘機搭乗員を志願したが、なぜか機上通信兵に回された。これでは特攻隊に志願できないと、がっかりしたものである。機上通信兵は偵察機や爆撃機への乗務が主体になる。

通信兵に合格した次の日、本隊の部屋に一人ずつ呼ばれて入ると、大尉が座っていた。少年兵にとって、職業軍人の大尉は神様のような存在であった。大尉は戸籍謄本を見ながら「お前は三男だし、弟もいるから死んで差し支えない。お国に奉公できずに死んだ兄の分まで働け。」と、その場で大尉に言い渡され、「死ぬるな。」と念を押されて「はい。」と答えた。しかし、部屋に帰ってから、このままでは、二度と親や兄弟の顔も見られないし、故郷の土を踏むことはできないのかも、暗い気分になったものである。

機上通信兵として一人前になるには、2年の教育訓練が必要とされていた。ところが入隊して間もなく、飛行場造成に駆り出され、訓練どころではなかった。

作業の行き帰りには、スコップを担ぎながら「- - -」などと、モールス符号の暗唱をさせられ、その時だけ通信兵を自覚させられた。

姫路市の近くにいたとき、6月に姫路市の大空襲に遭遇した。B29爆撃機の大群から投下された多量の焼夷弾が、空中で分散して雨あられの如く、住宅街に降り注ぎ市街地は一面火の海と化した。

“総員待避”の号令が出ても、土地勘もなく闇夜にどこへ避難してよいか解らず、軍服も着ないでちりぢりになり、近くの田んぼの中へ避難した連中は、空襲警報解除で集合してみると、泥まみれで疲れ切って、まるで“敗残兵”のようだった。統制を欠いた兵隊は惨めな姿になるものである。

昭和20年8月15日、ラジオの玉音放送は直接聞いたが、雑音がひどくて聴きづらかった。古参の下士官の中には、徹底交戦だといって、近くの山に立て籠ったりしたが、われわれは終戦から1週間後に故郷へ帰還の途についた。

太平洋側は米軍の上陸軍と交戦の危険があるとの情報で、日本海側を列車で北上したが、秋田に着いたとき、青函連絡船は米軍の命令で運行されていないとの噂で、そこに数日滞在し、軍隊毛布を売って旅館代を賄った。しかし、それはデマであった。

故郷に帰る

8月下旬の夕刻、ようやく故郷のえりもに辿りついた。しかし、我が家は7月の米軍の空襲で焼失してい

た。焼け跡にたたずんでいると、しばらくして叔母が来てくれて、家族は近くの農業会の住宅（現在の飯田宅の場所）に入っていると知らせてくれた。父をその年4月に亡くしていた家族との再会であった。

故郷で就職

父亡き後、次兄は結核を病んでいたの、小さい弟妹のいる一家の生活は自分の双肩にかかっていた。サケ・マス定置網漁業を営んでいた山本清さんの漁場の手伝いの後、北洋相互銀行の前身の北洋無尽会社幌泉支店に勤務して貸付係を担当した。

しかし、外交の担当者の説明と債権者の窓口での話が食い違うことがしばしばで、自分には向いていないと悟って2年で退職した。

漁業組合は戦時中に国策で一町村一組合に統合され、幌泉漁業会が結成されていたが、戦後の水産団体法の改正で、昭和21年に近笛・襟裳・歌別東洋・庶野地区が分離して各漁業会を組織していた。同23年には水産業協同組合法の施行を機会に、歌油漁業会が、歌別と東洋に分離することになったので、私は東洋漁業協同組合の設立準備に参画した。それが縁で、同24年8月の東洋漁協設立と同時に職員として勤務した。初代組合長には神田玉太郎氏が就任した。そこで私は7年間ほど勤務した。

運送業から土建業へ

その後は、漁協を退職して中古の三輪車を購入し、昭和32年からコンプの漁家庭先買いを手掛け、さらに運送業へと転換したが、当時の運送業は大臣許可であることや営業ナンバー取得の知識もなかったために、検挙されたりもした。

しかし、その後、札幌陸運協会の支援で運送業の大臣免許を取得し、昭和35年1月から「幌泉小型運送」を開業して現在の会社の基礎を築き、ダンプカーを所有していることから土建業へと拡大させていった。

（平成17年3月採録、神子島清八）



バケ縄で漁獲するタコ

東茂男 昭和6年(1931年)生れ

収録の範囲：出生から町議会議員当選まで

祖父母は富山県から移住

私の祖父・与太郎、祖母トセは、明治40年に家族と共に富山県から庶野に移住してきたと聞いている。当初は薪炭業の製造を営んでいたが、後に漁業経営に転向している。父・熊吉は漁業経営の傍ら、地域の振興にも積極的に参加して、戦時中は警防団長、戦後は庶野漁協理事、庶野水難救難所長なども歴任している。

戦時中に青年学校指導員に

私は父・熊吉、母トメの長男として庶野で生を受け、終戦の年、昭和20年3月、14歳のときに庶野国民学校の高等科を卒業した。同年4月には庶野青年学校の指導員になるために、漁船の焼玉エンジンの操作と修理を製造メーカーの技術員から講習を受けた。

父が7トン程度の木造漁船を持って、タコ空釣りやサケ・マス流網漁業を営んでいた。組合全体では14~15隻が操業し1隻の船に6~7人が乗ってたと思う。

私も卒業と同時に家業の漁業に従事したが、当時の漁船機関の焼玉エンジンにも大いに関心を持っていた。

機関講習を受けた後の検定にも受かり、庶野青年学校の生徒を漁船に乗せながら、焼玉エンジン操作を指導していた。生徒は私より年上の人もいた。

父・熊吉はタコ漁法の改良工夫にも熱心に取り組み、釧路からタコの「いざり曳き」を導入したりもしていた。しかし、タコ漁場には、空釣りの縄も入っていたことから、引っ掛ける危険もあって、当地では普及が難しかった。

戦時中から終戦後しばらく、漁船の燃料には魚油を使った。しかし、魚油は常温で固まるので、使用前に溶かすのに苦労したものである。漁から帰ってきて、魚を荷揚げしてから、燃料を積むのが大仕事だった。出漁する前にも魚油を溶かす必要があった。出漁してからもエンジンの調子が悪くなって、漂流している船をよく見かけたものである。機関士の腕が物をいった時代である。機関を分解して修理するのも機関士の腕次第であった。

タコ漁業に本腰

昭和30年代当初、妻ツヤと結婚（同29年）して間もなく、父の船はひとシーズンにタコを300万円漁獲した年があった。現在の価格に換算すると、3000万円を下らない水揚げだったと思う。朝に出漁して縄揚げにかかるが、“一間（ひとま）”に大きなミスダコが50~60匹も掛かかるので、作業は重労働だった。

漁法はタコ空釣りで、ボンデとボンデの間に、釣り針97本ついたざる7個分を繋いで“一間（ひとま）”

と呼んでいる。それを各漁船が350間ほど持って操業する。多い船では400間ほど使っていたのもあった。

7トンの漁船に4トンのタコを積んで帰港するので、波が高い時は転覆の危険を感じたこともあった。タコは大部分を広尾の仲買業者に引き取られ、一部はえりも岬の山形利三さんが買って煮ダコを製造していた。

地元の庶野では、漁協組合長の工藤兵治さんが煮ダコを製造していた。タコの浜値は、何年間かは一定で、漁獲量に関係なく決まっていた。それがタコ操業者にとって良かったのかどうかは、いま考えても疑問が残るが、漁獲量が安定していたので、操業が採算に合わないことはなかった。

昭和30年代のタコ漁期は10月から12月上旬頃までで、その後は冬山に入って薪切り、あるいは冬の造材への出稼ぎが主であった。昭和20年代の後半までは、増毛などのニシン漁場へ3~4月にしだきも盛んであった。各家庭の暖房に使う薪材の搬出も大仕事であった。切った薪はその場で割って、橋で平地まで下げておき、後は馬橋を頼んで家庭の庭先に運んだ。

戦後は昭和40年代までサケ・マス流網漁業が全盛で、学校の運動会も漁を切り上げるまで延ばし、毎年7月上旬に開催していたものである。漁協の総会も7月に延期していたこともある。

戦後は漁協青年部活動

昭和24年の水産業協同組合法の施行で、同年9月庶野漁業協同組合が発足した。同31年には、村の和田水産技術普及員のでこ入れで、青年漁師らが庶野漁村青年研究会を立ちあげた。同研究会は、庶野地区の漁船漁業にタコの漁獲が占める割合が大きかったことから、タコの生態を観察して資源保護に役立てようと、相坂勉さんと庶野漁港の一隅に親ダコを入れた生け簀を設置して、孵化を試みた。

同34年の全道漁村青年研究発表会には、町の神子島水産技術普及員の指導を受けて、会員の観察データを基に「タコの増殖研究について」と題して、相坂勉さんと日高管内実績発表大会で優勝。さらに2人で全道大会の札幌会場で発表し、高い評価を得て「努力賞」を獲得したのは、忘れられない思い出である。

その相坂さんが船長の6人乗組のサケ・マス小型流網漁船は、同42年6月、釧路沖で操業中に消息を絶った。惜しい人材を失ったと思っている。

娯楽の変遷

昭和20年代当初の娯楽は「かるた取り」だった。とくに正月から2月にかけて、若い男女たちは、かるたを持って各家庭を回りながら交流した。青年達について歩いた少年たちは、ランプのほよ磨きをさせられたものである。(庶野地区への電気導入は同22年に実現)



「かるた」とり

昭和30年代半ばまでは、映画の上映はひっきりなしであった。国道沿いの北村の大きな小屋(現存)が、筵敷きの芝居小屋に使用されていた。芝居もときどき来ていて、お年寄りたちは、役者に声をかけたり、お捻りを投げたりで賑やかであった。

時々、看守がついて刑務所の囚人が来村し、学校の屋内体育場で演劇を見せてくれたことも記憶している。刑の満期が近い囚人の社会復帰の訓練だったようで、その芸は玄人裸足のうまさだったが、しゃばではプロだったかもしれない。

地元の稲荷神社の祭りも、待ち遠しい楽しみの一つであった。毎年、宵宮には青年の演芸会が開催され、村人たちも大勢集まって賑やかで、露天も軒を並べていたものである。神輿担ぎも青年たちの心意気を示す絶好のチャンスだった。近年は、少子化と車の普及、娯楽の多様化で、すっかり寂れた感がある。

昭和30年代の道路事情

庶野中央市街地はかつて、庶野郵便局と長岡旅館前、我が家の前が国道で、すぐ前の海岸には大きな石がごろごろ転がり、高波のときは潮騒がうるさいほどであった。道幅も大型車の交差は難しいほど狭かった。

漁港掘削の土砂埋め立てを利用して、市街地の国道改良が本格化したのは、同40年代初期からである。大きく学校前に迂回していた国道の木橋は、同42年11月にシトマン川に永久橋が完成して急なカーブ2箇所が解消し、さらに勾坂さん宅のカーブ直線化工事も始められた。

町議会議員に当選

私が地元の有志に推されて、町議会議員に立候補、初当選したのは、昭和54年4月である。そのときは私の他、高橋梅治、大坂忠一、小金昭一、辻道生の新人5人が当選している。以来、今日まで連続26年間、町民の支持を得て議員の職務を司ってきた。その間に、同58年4月の2期目選挙ではトップ当選を果たし、平成7年4月から1期4年間、議会議長の座に浴した。

(平成17年2月12日採録、神子島清八)

後藤 昭二 昭和8年(1933年)大和生れ

米軍のレーダー基地が襟裳岬先端に

私は昭和25年(1950)春、襟裳岬に設置する米軍のレーダー基地で働く日本人を、日高支庁が募集したのに応募して就職した。そのときのレーダー基地建設場所は、現在、道道の襟裳岬駐車場へ下る小高い場所にあつて、隊員は一個小隊(100人ほど)であつた。レーダーは同26年に完成作動を開始した。

襟裳岬のレーダー基地の宿舎が完成するまでの間、米軍スタッフは現在の商工会館の場所にあつたカネキ林旅館を宿舎にしていた。

米軍がレーダー基地建設で使用する資材の多くは、昭和25年に2回ほど、えりも港に入港した米軍の上陸用舟艇から荷揚げして襟裳岬へトラック運搬した。私はその荷役にも従事した。当時のえりも港は、現在の漁協市場の場所まで砂浜で、米軍がブルドーザーでトラック運搬用の道路を造成して、同舟艇は港外にアンカーを投錨して入港し、帰りはそのワイヤーを巻き上げ船底を擦りながら出港していった。



幌泉港に入港中の米軍上陸用舟艇(昭和25年)

木の骨組みにテント張りの幕舎が数棟と、蒲鉾型資材庫に車庫など数棟があつて、円形の鉄骨造りレーダーが一基あつた。時は旧ソ連との冷戦状態のときで、太平洋沿岸の見張りを強化していたようだ。

そこで働く邦人は30人ほどで、仕事の内容は施設の警備と厨房、大工、洗濯、その他雑役などだつた。日本人女性も数人雇われていて、彼女らは洗濯や幕舎内の掃除を担当していた。通勤は毎日、曲がりくねつた砂利道を砂埃を被りながら、米軍のトラックでの送迎で、弁当持参で出勤していた。様子駅へ列車で輸送されてきた物品を、貨車からトラックへ搬入する作業にも従事したことがある。仕事の上では、日本人が多かつたので、兵士と会話する機会はほとんどなかつたが、必要な時は、身振り手振りだけでこう通じた。基地には日本人通訳が2人ほど勤務していたが、意地悪

な兵士の中には、英語の方言を使って通訳を困らせていると聞いたこともある。

一緒に勤務した仲間、現在町内に居住しているのは、阿江帝助さん、吉田良勝さんなどである。基地の炊長は日本人で、阿江さんは厨房に見習いで勤務して調理技術をマスターし、退職後に本町で食堂を経営していた。

基地を現在地に移転

襟裳岬を見下ろせる東洋の現在地に、基地が移転したのは昭和20年代の後半である。瓦ぶき平屋兵舎や資材庫などの建築に従事したばかりの昭和27年の早春(3月)午前中に突然地震に襲われた。

私は米軍兵士と2人で小屋で発電機の据え付け作業中であつたが、兵士が突然窓を開けて早く脱出するように促した。私は瞬間、エンジントラブルでも起きたための振動かと思つたら、周囲の建物を建築中の日本人大工たちも、慌てて外へ飛び出していたのを見て地震だと気付いた。

それまで、大きな地震を体験した記憶がなかつたと思う。その当時建築した平屋の建物は、現在でもその一部が活用されているようだ。

のちに、十勝沖地震後に津波が襲つてきた(27年)が、その際のえりも港の写真を見たら、津波が引いたあとの港内は海底が丸見えの状態であつた。

米軍兵士の娯楽

駐留していた米軍の兵舎内での娯楽はトランプが主流であつた。襟裳岬先端の幕舎には、“酒保”もあつた。えりも本町市街には、米軍兵士専用のクラブがあつた。上町の“ラッキー”や“若葉”などがその類の飲食店であつた。

米軍兵士は、一般の飲食店には、ほとんど出入りしていなかつたようだが、市街では、米軍兵士と出稼ぎ漁師や流れ者との酒の上でのトラブルは度々あつたようだ。

何度か、米軍の三沢基地から水上飛行艇がえりも岬港の付近に着水して、怪我した兵士を搬送していったことも記憶している。基地にMPは駐在してなかつた。

米軍専用店の女性従業員や将校お抱えの“オンリー”と称する日本人女性も多く住んでいた。カネサ吉田商事が建てた二戸建て四棟の住宅全部にも居住していた。町の人たちはそこを、長崎の外人居住区になぞらえて“オランダ長屋”と呼んでいた。それは現在の森林組合えりも支所上に並んで建てられてあつた。女性は一般住宅での間借りも多く、当時は本町市街も結構、国際的雰囲気豊かな感じであつた。

無線中継所への燃料上げ

米軍の青森・三沢基地と襟裳基地との交信のため、

当時は三枚岳に無線中継所が設置されていた。国道追分峠頂点の左手から入る登山口があった。旧えりも肉牛牧場の奥地に天幕を張って、兵士が寝泊まりし、交替で中継所へ勤務していた。

その無線中継所の発電機や暖房用の燃料は、日本人の基地従業員や臨時人夫が、登山道を担ぎ上げて、頂上のドラム缶を満たした。その作業に私も一時的に従事した。力のある人夫の中には、一度に一斗缶(18ℓ)2本を担ぎ上げ、それを1日2往復していた。臨時の人は一缶なんぼの賃金だったので、大いに稼いだ人もいたようだ。



三枚岳米進駐軍無線中継基地跡(平成17年4月)

(昭和29年、北部訓練航空警戒隊から先発隊19人が襟裳基地に到着する)

米軍撤退で退職

私は、レーダー基地が米軍から航空自衛隊へ完全に移管され、米軍の顧問も離町した昭和34年春に退職した。解雇という形であったが、日高支庁から退職金を受け取った。基地には9年間ほど勤務したことになる。その後は、造林関係の職についた。技術職の中には、継続して自衛隊に定年まで勤務した人もいる。

(平成18年3月採録、神子島清八)



本町山の上通りを行く
(昭和20年代)

長岡菊也 昭和8年(1933年)咲梅生れ

アザラシ

戦中か戦後、まだ子供の頃、小学校6年の頃の話。アザラシを獲った。

咲梅のウエンベツの近くで、帰りに岩の上で寝ているアザラシを見つけた。手でぶら下がっても届かない浜に下りて、叩く棒を探したが見つからず、石を投げつけた。逃げようとするから、後足をつかむと頭を上げて、大きな目を向けて「があ〜」ととっかかってきた。引っ張って、また石を当ててしとめた。後足を持って、引きずっても、逆毛でなかなか進まなかった。コンブ拾いのわら縄が、トンネルの所に掛けてあったので、それを3本ぐらい使って、縛って引きずると、凍っている所は、なんの苦労もなく引っ張ってこれた。皮に3cmぐらいの穴があいた(毛が抜けた)が、毛皮屋に1枚5~600円で買ってもらった。毛皮が良い状態で800円ぐらいだったと思う。そのお金で、当時はやっていた辞典などを買った。肉は煮て食べた。油は炒め物や、灯油がわり、皿に芯を入れて火をつけて明りにした。魚油よりは匂いもなく使いやすかった。天ぷら油にも使った。

近所の友達は、イタチを獲るのが上手だった。自分は1回も獲れなかった。カケスを寄せてトラバサミで捕って、焼いて食べた。

終戦

終戦のとき、アメリカが来たら咲梅台で暮らすと言って人が、咲梅台の奥、咲梅林道の近くでクマに殺された。咲梅の人は、アメリカが来たら滝で自決すると言っていた。(実際は自決していない。)

(平成16年1月17日採録、中岡利泰)

神子島 清 八 昭和 10 年(1935 年)生れ

収録範囲 昭和 30 年代 (1957 ~ 1965) のえりも町

昭和 30 年代の町内の道路事情

国道の道路状況

昭和 32 年 (1957) 5 月下旬、様似駅発幌泉 (当時) 行き最終便の国鉄バスは乗客がまばらであった。最前列の座席に腰掛け、ライトに照らされる前方を興味深く眺めながら、夜の砂利道を幌泉市街に向かった。

冬島を通過してからの狭い道路沿いには断崖が迫り、この先に市街があるのか、ひょっとしてバスを間違えたのかと思うような不安がよぎった。バスが狭い岩穴のようなトンネルに入ったとき、思わず座席を立てて後退した。夜の闇のなか、揺れる車体がトンネル内の岩盤と接触するような危険を感じた。

幾つか同じような岩穴のトンネルを過ぎ、急カーブの狭く長い橋を渡ったとき、集落の光が見え、乗客数人の乗降があった。停留所のプレートには「幌満」とあった。

それから間もなく、車窓から波打ちぎわや崖下に建つ家の灯りが見え、暗闇の彼方には灯台が光り、街を思わせる灯りの群落を眺望できた。

灯台の光に防波堤が浮かび、大きなカーブを曲がってすぐ、二階建ての家並が目飛び込み、街灯が両側の家並を照らしていた。ほっとして、救われた気分だった。

桜の季節が終わった幌泉 (当時) へ、余市の道立水産試験場から水産技術普及員として赴任してきたときの記憶である。

まだ日高と十勝を結ぶ日勝国道が未開通の昭和 30 年代初め、道央と道東を結ぶ主要国道の様似から広尾までのトンネルは、すべて岩盤が剥き出しの素掘りであった。

道沿いの屋根に石が乗った質素な民家の壁は、自動車が跳ねた砂塵や泥水に濡れていた。黄金道路は一部の区間が波浪の被害を防ぐため、コンクリートで舗装されていたが、岩盤が頭上に覆い被さっている個所が多く、大波のときは、砂とともに丸太などの漂流物が路上を塞いだ。

昭和 30 年代初期の庶野方面国道は、早春の時期に路面が膿んだ状態になり、バスの通行が困難になる個所もあった。追分峠を下って間もなく、苫別口までの間、道は小川に沿っていたが (現国道の下部) その区間は特に悪路で、凍結路面の融解で大きな水たまりができていた。

町内国道のすべてのトンネル内は狭く、乗用車の交差もできなかった。町内の国道の橋はすべて木橋であり、アベヤキ川に架かる橋は、現在の橋より上流へ大きく蛇行した道に架かり、庶野市街入口のシトマン川の木橋も上流にあって、国道は学校の校門前を通過



ぬかるみとバス

いた。 (昭和年 30 年代後半か)

本町市街へは、国道が南部家川橋から大きく海側を回り幌泉灯台下を通過して、大時化時には港の防波堤に沿って押し寄せた高波が国道に打ち付け、通行は危険に晒されることがしばしばであった。

本町の国道東側には、深い沢があり、そこに架かるシラヌナイ川の橋から緩い斜面を曲がってえりも小学校前を通過していた。えりも町本町市街地の国道舗装が完成したのは、昭和 35 年 (1960 年) である。へき地の道路も舗装できる日本の経済力の成長を実感し、文明の恩恵を感じた。

昭和 35 年、国鉄が札幌 ~ 様似間に急行「えりも」を運行させたことから、国鉄バスも百人浜経由の観光便の運行を開始した。当時、現在の日高信用金庫えりも支店の場所にあった駅舎と駐車場には、正午頃到着する 7 ~ 8 台の観光便のうち、数台のバスがはみだして国道に駐車するので、その時間帯の市街道路は通行に支障をきたすこともしばしばであった。



国鉄バス幌泉駅 (昭和 30 年代後半)

道道の道路状況

昭和 30 年代当初の道道襟裳公園線で、特に襟裳岬までの区間は、歌別では大橋から海側、東洋では通称「岩崎のカーブ」、旧東洋小中学校の前面崖上、南東洋から海側を回る油駒、油駒から襟裳国有林までの数カ所に、狭く急な危険カーブの連続であった。

昭和 34 年 (1959) 歌別川に架かる歌別橋が町内初

の永久橋に掛け替えられた。村勢要覧に掲載する写真を撮りにいった記憶がある。現在の歌別橋より幅員がだいぶ狭かった。

昭和 30 年代当初の百人浜は、国有林のはげ山緑化事業が始まって間もない頃である。えりも岬から庶野までの道道は、当然未舗装で路肩も周囲の土地とあまり変わらない高さであった。そのため、雨が降ると赤土の泥水が道を横断し、風が吹くと砂塵が吹きすさび、夏でも荒天時の夜間通行は危険を伴った。

大型バスが通行に最も難儀した東洋の“岩崎のカーブ”は、東京オリンピックの年、昭和 39 年に改良工事が急ピッチに進められていた。

村（町）道の道路事情

昭和 32 年、村は財政難から前年度に再建整備団体に指定されていた。土木係 3 人のうち、技師は一人のみで、道路改良に投入できる予算は、道路側溝 100m ほどで、土木事業は皆無の状態であった。しかし、同 33 年に国から新農山漁村の指定を受けたことで、一部の集落内道路を整備できた。

同 36 年末、吉田勘之助町長が当選してからは、道路改良を含めた建設事業が急速に進められた。

旧えりも小学校校舎裏の深いシラヌマナイ川の沢には民家もあったが、そこを埋立てて宅地化する工事がスタートしたのは同 37 年夏である。現在の警察官駐在所から山側への道路造成、さらにその下の沢の埋め立ても同時に進められ、同 39 年には国道がシラヌマ橋の手前からえりも小学校前に変わった。

通称“まんじゅう山”を削って公営住宅団地を造成する工事も同時に進められ、旧診療所横の道路造成も始まった。

一方、幌泉川を天蓋で覆って車道を造成する計画も同 39 年に着工され、右岸の護岸工事から着工し、昭和 30 年代後半の町道造成は飛躍的に進んだ。

昭和 30 年代前半の役場事情

私が赴任してきた当時、昭和 32 年の役場庁舎は前年度に改築したばかりだったので真新しかった。一階事務室は広々としていて、南窓側は卓球台を並べられるようなスペースがあった。前年度に財政悪化による「再建整備団体」の指定を受け、課制と収入役を廃止、係制に縮小して人員整理をしていたためである。それに来客用のソファーも置いていなかったためである。教育委員会も役場事務室の隅に教育次長他 2 人のみで、教育長は民間人で非常勤であった。

予算が限定されていたためか、書類保管庫は狭い屋根裏、書庫は 1 間幅のみのスペース、公務補は家族 5 人が 6 畳 2 間の狭い部屋に住んでいる、切り詰めた建て方であった。議会事務局も総務係が兼務であった。

30 年代当初の役場は万事のんびりしていた。正月気

分も消えていた頃、長岡隆一町長が朝「今日は藪入りなので、午後から休みにする。」と宣言し、職員たちは喜んで午後からマージャンに講じたものである。



昭和 31 年に新築された旧役場庁舎

電話は事務室に 2 台しかなく、離れている係の所まで急いでいって通話していた。道庁などへの市街通話は「普通」で申し込んでも、いつ繋がるのか分からず、急ぐ時は 3 倍料金の「特急」で申し込んでいた。

長岡町長夫人は役場職員に電話を掛けるとき、自分のことを「住宅だ。」と告げてくるので、新任職員はとまどったものである。

昭和 35 年になって、戸籍係に、濡れた紙面が青刷りで印刷される複写機が導入された。支庁などへ提出する書類の印刷に使用できたことから、他の係はかたくなに戸籍係長に気兼ねしながら使用させてもらっていた。戸籍係長は時間外の利用を遮断するため、複写機に木箱のカバーを被せて施錠して帰宅したものである。

昭和 30 年代前半は、まだ事務機器は謄写版全盛の時代で、特に定例議会が始まる 3 月当初は、予算書や議案作成のため、各係も応援してガリ版印刷に忙殺された。

昭和 30 年代当初、公用車のない時代、各種選挙の投票事務は、えりも岬以遠は投票日の前日からの泊まりがけで出かけ、学校やコンブ倉庫などに投票所を用意した。

旅館のない苦別地区は金丸宅にお世話になっていた。投票事務で必需の計算機は、鉄製の手回し計算機が役場に数台しかなかったのも、要領のいい者は、投票日が近づくと、他の投票所に持ち出されないよう周到に隠したりしていた。

目黒投票所が当たったとき、前日の黄金道路が高波で通行止になり、木製の重い投票箱を担ぎ、庶野から徒歩で出かけたこともあった。

戦没者追悼式

昭和 30 年代当初、戦没者追悼式も役場職員にとって大きな年中行事であった。現在幌泉灯台が建っているすぐ下に、戦時中に建立した忠霊塔があって、毎年 6 月 15 日には、公民館からパイプ椅子やテーブルを住

吉神社横の小道から揚げるが、天気の良い日や風の強い日は閉口していたものである。その頃は、まだ遺族も多く、戦争経験者も多かったので、役場横の広場で「銃剣術」大会が盛大に開かれていた。

(平成 16 年、自己執筆)

川村 和子 昭和 10 年(1935 年)生れ

子供時代

生れも育ちもえりも岬。当時の「小越」、家業はコンブ採り。一年中、男はコンブ拾い、女はミミ拾い(銀杏草)をしてました。

オオカゲの崖の下(灯台のかげ)あたりに、よくミミ(ギンナンソウ)が寄ってね。朝になればみんな走るようにして、あの切り立った崖を下りて、拾ったものです。今でも一軒くらい昆布小屋があると思うけど。

学校は、今ある場所で、二宮金次郎の銅像や奉安殿があつてね。複式の学級で、30 人位づついたの。先生が上の生徒を教えている時は、下の生徒は自習、といつても大きな声を出すと怒られるので、小さな声で遊んでばかりいましたね。

終戦後は、先生がいない時期が結構ありましたね。教科書が 30 人位に 2 冊か 3 冊しかなくて、ジャンケンで当たったりするのが、比較的金持ちの子供ばかりだったりして、おかしなものです。のぞいて見てはいじわるされたりした夢を、大人になってから見たものですよ。

小学校の先生は飯田先生、池田先生とかで、前の町長の佐々木隆人さんやえりも食品の山形さん、それに伊藤先生などが一時先生だったこともありましたね。

中学の頃(終戦後)は、一週間に 1 回、本校から中学校の先生が来たんですが、誰もこない時は、小学校の先生が時々ぞきにきたりしてましたね。

春になれば、すごく濃いガスがかかって、時々、百人浜に舟が難破して寄るんだわ。そしたら男の生徒が“舟あがったぞー”という、学校からいなくなったの。怒る先生もいないからね。マスとかニシン拾って、たいした親が喜んだものですよ。

何も食べるものなかったからね。

学校が終るとみんな家に帰らないで、我先に近くの丘に“こけの実”(ガンコウラン)を食べに行くの。初めは赤くて熟すと黒くなるんだけど、赤くてすっぱいのもみんな食べましたね。その辺一面にあったの。あと“どんぐい”(オオイタドリ)の若い茎や“ぞうのみ”(ガマズミの実)、“だいす”(スイバの新葉)なんかも食べましたね。

今思うと、海に囲まれてるんだから、“がんぜ”(エゾパフウニ)も今よりいっぱいあったと思うんだけど、食べるものだとは思わなかったね。みんなそうだったんでないだろうか。

娘時代・岬の緑化事業

米川さん(初代のえりも治山事業所所長) 満州で治山事業をしていて、終戦で秋田へ引きあげてきてから、酒田の百人浜の小さいみたいな所で植林をして成功した人で“小越”へ行って欲しくないかと白羽の矢がたてられて、昭和 28 年浦河営林署えりも治山事業所の初代所長となって赴任してきた。

その当時、私は 18 才。作業員の募集で、その緑化事業に従事したの。山を緑にするためというより、現実問題で、ほかに働く場所が全くなかったから、みんな出陣取りとして働いたんですよ。テレビなんかでは、海をきれいに!山を緑に!という一念で、村民こぞって身を粉にして働いたって、美しくなっていますが、私をはじめ、ほとんどの人がそうだったんでないだろうか。

最初は男の人 4~5 人と女の人 10 人位から始まったの。



百人浜緑化事業作業へ出発(昭和 30~40 年代)

作業の合間に、所長の所に営林署からのお客さんがくれば、女の人、何人かは、所長の奥さんの手伝いに行くように言われて、交替で行ったりして、家族ぐるみの付き合いでした。

最初の顔合わせみたいな時、すごいごちそうが出てね。サイダー 1 本づつ付いたの。バナナも付いたの。生れてはじめてサイダーという言葉を知って、バナナの本物を見たの。世の中にこんなおいしいものがあるんだと思ったよ。みんな兄弟に食べさせたくて、家に持って帰ったの。

作業

作業は、何回も何回も失敗ばかりだったね。整地して石ころ取って、(草の)種を播く、その上にスタレ敷いて、根曲がり竹で止めるの。次の日行けば、風に飛ばされて、赤土だけ。何一つないの。そんなこと何回もくりかえして。

ある日、所長が首うなだれて考えながら、浜を歩いていて、何げなくゴダ(雑海藻)の山に目をとめたの。そのころ、村の人たちは芋を作る時に肥料としてゴダ

を使っていたの。使ってみようということになってね。試しにやり始めたの。



百人浜緑化事業ゴダを敷く（昭和30～40年代）

冬になれば、ゴダを「何m何mで何ぼ」という具合にリヤカーに積んで、トラックの所まで運んで、ゴダを集めたの。それを敷きつめて、種をまいて、かまして、その上にまたゴダをかけて、そしたら一週間くらいしたら、一面にザックリ緑色の芽が出てね。見ごとだったよ。

それから草から苗、そして木と、いろいろ試して植えたね。

このころ飯田さんの弟さんが、岬ではじめてトラック持って働いた。私たちがやめてから、飯田常雄さんが働いた。本当に気の遠くなるような作業だったね。結局、このゴダで成功したんだと思うよ。

緑の森になったもね～。

結婚

昭和34年、幌泉の川村次夫さんと結婚。一男二女に恵まれる。58年父さんが春のカレイ網の舟の事故で、突然亡くなる。私が48歳の時、息子と長女は就職していて、二女が高校に入った年だった。それは落ち込んでね。結局、子供たちがいたから救われたの。洞口先生にも2年頑張れって言われてね。

ホタル

岬にはホタルいないよ。川のない所だから。ホタルは見たことなかったね。学校の裏に小さなセキ（セギ：小川）みたいなチヨロチヨロ川があったんだけど、石をほじくったらサルカニはいっぱいたね。

追記

あのころからもう50年以上たつのに、今でもあの米川所長さんの家族とはつきあいが続いているの。それでね、この間、その米川さんの奥さんからもう83～84才になるんだけど、手紙きて、今、帯広に住んでるんだけど、あの頃の事を“思い出すままに”とい

う題で書いたものを送ってきたの。

（と言って、私に読んでくれと見せてくれた文を転記する）

米川イネさん

昭和28年4月、当時、酒田にいた。山官だった夫が、浦河営林署えりも治山事業所へ行くことになり、3才と生後72日目の息子を連れて、初めて津軽海峡を渡った。

生れ故郷の秋田と酒田しか知らない私には、北海道は遠い外国のように思われた。しかも、熊が出るとおどかされたり、半分、泣きながらの渡道だった。今のように特急もなく、函館と札幌の親戚でおむつの洗濯やミルクのお湯のお世話になるなど、3日がかりの赴任の旅だった。

夫は事業所の開設準備で、早々にえりもに行き、私はクル病だった二男の治療もあり、浦河に2ヵ月ほど滞在したが、その折もえりものことをいろいろ聞かされて、心細い日々だった。

そして6月えりもに行ったら、話に聞いてたとおり、毎日10数メートルの強風で赤土が飛び、口をあけて歩けないほどだった。

また、夏は霧がかかる日が続き、むせぶような霧笛のひびきと風の音に、どうしてこんな所に来たのかと悲しかった。

当時はげ山だったえりもに、長年の治山工事が実を結び、緑がよみがえり、良質の昆布や魚もとれるようになった。

今も当時の人々と暖かい交流が続いている。夫の仕事が終ったら、故郷の秋田に帰るつもりだったのに、息子たちが帯広がいいと帰って来たので、ここに住みついた。

良き隣人、友人に恵まれ、幸せな老後を送れることに感謝している。

（平成18年4月5日採録、大平恵子）



百人浜・えりも岬地区の緑化現状（平成19年1月）

岡部 隆盛 昭和10年(1935年)目黒生れ

スナヤツメ

上歌別の成田さんの裏の沢にスナヤツメがいた。

伐採とザリガニ

目黒でもこの数年日高の業者が入って木を伐採したので、いい材がなくなってしまった。

水害から集落を守るために、猿留川をまっすぐにした。昔は川が二つに分かれていて、中州があった。水も湧いていて、ざるがに(ザリガニ)もいっぱいいた。肋膜とかしたときにだんごにして、巻けば、よくなるって、4年生の時、広尾の病院に入った人に連れられて、石をめくるとカエルが出てきていやだった。登りの沢の入口の水が湧いていたところにもいっぱいいた。

木工所

戦前、木工所が目黒の橋の近所であって、蒸気で動かしていた。郵便局の裏手にも蒸気で動かす木工所があった。林業者が材の払い下げを受けていた。戦後、木工所の機械は釧路に売られていった。高い煙突も立っていて、昼にはサイレンが鳴ってね～。赤石さんの先代です。

目黒には戦後も大きな木工所があって、高い煙突から煙が出てました。大きな帯鋸もありました。

大横断

猿留川の河畔、右岸の林の中で見つけた石柱「大横断」ってあるやつ、浦河の細道測量が請負って建てたんです。川の両方にあるし、上流にもあります。コンクリートに、真鍮製の棒なんかもありますよ。トラ落としにもあります。川の水量調査に使ったのかね～。

馬頭観音と電信大師

目黒小学校へ行く前の坂のツツジの中に馬頭観音あるでしょ。あれは昔、トラ落としにあったんです。下げてきたんです。でも、私有地ということで、平成16年4月17日に目黒の墓地に移します。建立者は赤石さんの先代たちでしょ。

ワラビタイ沢にあった電信大師については、目黒の佐藤義昭さんが詳しいでしょう。昔、馬追いしていたから。

母親とイガイのライスカレー

母親は猿留山道を歩いて目黒に嫁に来たと聞いている。中学校卒業の際(昭和25年頃)、謝恩会の時、みんなで「まるこー」(イガイ)を採ってライスカレーにして食べたことを覚えています。肉なんか買える時代ではなかったですから。



まるこー(イガイ)

黄金道路と教科書

目黒の中学校は麻野中学校の分校だったんです。4月に雪崩で黄金道路の道が壊れて、隧道の入口が埋まって、補給ができなくなった。教科書がトラックで来なくなった。それで、教科書を麻野まで取りに歩いて行きました。ババ殺しのところだけは、浜がまったくなくて、道路にあがって歩いたんです。他は全部道路下の浜を歩きました。今では潮が引いても歩けないところいっぱいあるでしょ。

(平成16年4月、平成17年11月採録、中岡利泰)

草野 泰子 昭和17年(1942年)本町生れ

西洋長屋と西洋坂

福祉センターの1本北側の道、草野宅の下側に、「オランダ長屋」と呼ばれる建物があった。

沢町から墓所へ行く坂を「西洋坂」と呼んでいた。近くに洋館みたいな建物があった。

(平成16年2月15日採録、中岡利泰)

小学校の頃、突きん棒の船も幌泉港に来ていた。時化で船が出ないと、学校(幌泉小学校)に来るの、暇だから。夏とか秋だったら、窓開けてるでしょ、覗くんだわ、女の先生が嫌がるのね。

(平成16年1月17日採録、中岡利泰)

野阪 敏雄 昭和20年(1945年)庶野生

通学

小学生の頃、ウエンベツまでコンブを採りに家族で行っていた。毎年、春に山から木を切ってきて、小屋を建てて、コンブが終わるまで暮らしていた。学校へは毎日歩いていった。1時間ぐらいかかった。自転車に乗れたのは最後だったな～

時化ると波が来るので、ふとんや鍋を持って崖の上に逃げた。家財道具は毎年春に船で運んでいた。

コンブ漁

7月の10日ごろから10月一杯いだんだわ。マルツウ(日通)のトラックが来て、積んで、検査員が来て、

2回か3回来るんだわ、俺が学校に通うのに、マルツウ(日通)のトラックが来ると、上に乗っけてもらって・・・

マルツウのトラックは何回か来ていた、小屋がコンブで一杯になるから。

目黒のお祭りあるでしょ、9月26・27・28かな、行って見たんだわ、ウェンベツから目黒まで歩くんだわ。

ウェンベツのトンネルからこっちが庶野、向こうが目黒。コンブは庶野の旗の合図でやっていた。咲梅の旗の合図で採っていた。

ウェンベツに集落あったけど、隧道から向こうが目黒だった。

おやじとキツネ

うちのおやじは飲ん兵衛だったから、自転車で庶野に用事足しに行くでしょ、帰ってこないの。母親が心配で、オラちっちゃかったから、外に出て見るんだわ。咲梅の方見るんだわ。黄金道路の入口の方見えるんだわ、“たるきの坂”っていうんだわ。あっこカーブ曲がると自転車の明りが見えるんだわ。ウェンベツからね。「あっ来た来た。」って母親が言うんだわ。ところがね、なんぼたっても来ないんだわ。2時間たっても、3時間たっても。10時近くなってもね。ほんなら、酔っぱらって、どっかの小屋に入って寝てるんだわ。

ある時ね、帰ってこないから、母親ね、見てるんだわ。母親も、ほったらね、明りがいっぱい見えるんだわ。いっぱい、ポコポコポコ〜と、みんな見てるんだ〜俺ら兄弟も母親も、「今、来たわ〜しゃけど、なんだべ〜」って「なんか、光いっぱい見えるど〜」って「あ〜キツネでねえか〜」っていう母親の話なんだわ。悪いキツネでねえかって。光がいっぱい見えるんだよな。「車でないど〜」って。

ウエンベツのこと

小学校6年生頃までウエンベツにいたな。夏の期間だけね。あんまりにも不便だから、庶野に干場作った。

ウエンベツには、庶野から、俺ら別家だべさ、本家と、西野秀男さん、矢陸さん、目黒からはね、安田さん、米谷さん、目黒の目黒さんだ、それと漆館さん、9軒か。ウエンベツからトンネル越えると高橋さんがいたわ。10軒だな。

水は沢水。竹割って引っ張って。

カタクチイワシ

秋の10月ぐらい、カタクチイワシ、来るんだわ。渚が真っ白になるんだわ。大きな魚に追われてっていう話なんだけど、真っ白になるんだわ。「ほら〜来たぞ」ってね、洗面器から樽から、みんな持って行くんだわ、ガキどもから大人まで、拾いにね。焼いたり、干したり。

イカ船の遭難

1年分の食料を春に持って行くんだわ。磯舟で。櫂や櫓漕いで。でね、あの頃ね、魚に不自由しないんだわ。大きな船が座礁するんだわ。イカ船とかサバ、よっく丘に上がったもんだわ。だからね、魚に不自由しなかったな。

本サバの40cmぐらいのやつ、海が真っ白になるんだわ。船底破れるから流れて、海面一面サバだらけなんだ。ちょっとあめったったけどな(少し痛んでいたけどな)、汐してあって。そしてイカ船ね。秋になるとイカ船来るんだわ。上がっちゃうんだわ。

船の残骸を平沼さんが持って行くんだわ、油タンクだけは置いてあったわな。油タンクだけは扱い物になんねえんだわな。エンジンだとか全部持ってってたもな。

その時の船はみんな木造船、レーダーもなんもないから、あの頃は目で見て、今でも残骸が沈んでいて、あるある。庶野の「カネコ崎」、ルーランのところ、西野パンク屋さんの先、今でも油タンクあるよ。貨物船のね。

(平成16年1月17日採録、中岡利泰)

石川 昭 昭和24年(1949年)えりも岬生れ

ウを食べた。

昔、観光館近くの崖で、夜、懐中電灯持って‘うのととり’(ウミウなど)を捕まえに行った。簡単に捕まり、首を切って、毛をむしって、焼いたり、鍋にして食べた。結構うまかった。

(平成16年2月13日採録、中岡利泰)

柳田 勝彦 昭和29年(1935年)えりも岬生れ

小学生の頃

苦別川に大きなタモを入れて、上流から魚をぼって、大漁した。獲れたのは、ウグイにカジカ、火をおこして焼いて食べた。うまかった。食べるものが少なかったから。その時のボスは、(駿河)秀雄さん。俺らみたいな年下が声をかけても人数が集まらなくて、たいして魚も獲れなかった。間ができるから、そこから逃げるから。秀雄さんが声をかけると多人数が集まった。

苦別の金丸さんの奥は、おっかなくて行けなかったけど、秀雄さんたちは、奥にイワナがいるとあって、獲ってきていたが、俺らは口にできなかった。秀雄さんが中学生、俺が小学生の頃の話。

百人浜の様子

緑化の写真に出てくるキャラバンは、金丸さん、通称「ヤエ」さん。みんな「ヤエ」と呼んでいた。馬に鞍をつけて、薪を運んで岬で売っていた。小金さんら

がトラックを買って、薪を運ぶようになるまで、馬でやっていた。金丸ヤエさんは、今の淡路牧場のあたりに二階建ての洋風の家暮らししていた。

小学校の頃、今の神田牧場や淡路牧場の周りは大きな木が生えていた。苦別ヘイモやカボチャを植えたり世話をしに行った帰り、暑くて、その木陰が涼しくて通るのが好きだった。今の自衛隊道路の入口から少し岬側から、砂漠のようだった。そこより苦別側は、木や草が生えていた。神田牧場や淡路牧場の周辺の牧草地は、草地にするのに木を切って、牧草地になる前は木が生えていた。

小金さんは、トラックで薪を運んだり、ゴダを運んでいた。岬に運んだ薪は高橋与惣治さんのところで、大きな丸ノコで二つに切って売っていた。

(平成 16 年 3 月 16 日採録、中岡利泰)



幌泉市街地 (時代不明)



初代一色村長ら (明治 39 年ごろ)



幌泉村役場前 (大正 13 年以降)

町史編纂資料より

昭和 46 年に発行された「えりも町史」の編集作業の過程で、当時の町史編さん委員により、昭和 38~40 年ごろに、明治から大正・昭和初期にかけての生活の様子を採録した記録 (31 名分) が、保存されていました。

ここでは、テーマごとにその記録を記載しました。

お話し手：

長谷川フデ (庶野)	山本喜一郎 (笛舞)
山崎万次郎 (笛舞)	工藤 紋弥 (目黒)
駿河 チヨ (小越)	西川岩二郎 (本町)
藤井 昇三 (東洋)	水野 茂吉 (本町)
三代目小松延枝 (小越)	竹内 苗吉 (小越)
立花 豊吉 (本町)	小笠原ヨシ (笛舞)
広島千代次郎 (本町)	西島 留吉 (上歌別)
白川政太郎 (近浦)	八谷 サダ (本町)
白石 万蔵 (目黒)	金丸元太郎 (苦別)
菅沼 誠治 (本町)	越後 ミエ (上歌別)
岡 辰吉 (上歌別)	村中 滋雄 (上歌別)
大西敏太郎 (目黒)	池田 タヨ (小越)
中野 勇 (本町)	長谷川コウ (東洋)
中島伊三郎 (庶野)	長岡定次郎 (庶野)
金森商船 物応早見	佐々木久四郎 (小越)
高橋 キヨ (笛舞)	

生い立ち

長谷川フデ

庶野に来たのは明治 26 年 (1893) で青森から連絡船で函館に来て、函館より汽船で幌泉に上陸した。幌泉庶野間は歩いたが、人馬がようやく通る細い道路で、昭和 38 年頃の国道とは全然別の所であった。

庶野に来たときは戸数 35 戸位で、住民はみんなコンブ採取していた。(当時の家は草小屋であった。)

山崎万次郎

先祖は築前小三郎 (山崎万次郎は孫) で、笛舞村に来たのは明治以前のことであるが、年代は不明である。

工藤紋弥

私の家は目黒にあったが、7 才のとき、小越に行って、学校に入った。その当時に襟裳灯台が始めてできた。明治 22 年 (1889) である。その後、10 才の時、幌泉の学校に入り、13 才のとき、内地に行った。

駿河チヨ

私は明治 15 年 (1882) 10 月 30 日、小越で生れた。幼少の頃、父母に死別して、金丸さんに育てられた。

藤井昇三

私は明治 15 年(1882)に東洋(焼別)で生まれたが、先祖、藤井宇平が明治 4 年頃、大和のスミヤキコタンに来て、土地を開拓して作物を作り、後に馬も飼い、生活していたという話を聞いていた。

水野茂吉

幌泉には明治 41 年(1908)に山形から来た。当時の氏名は佐藤茂吉であった。

水野良助が幌泉に来たのは、明治 20 年で、幌泉ではヤマタ本間多次郎経営の商店の支配人となり、銀杏草、その他、生産品の仲買をしていた。

私は明治 41 年現役兵として、旭川第 7 師団歩兵第 27 連隊に入隊して 2 ヶ年勤めて、43 年(1910)に除隊して、水野良助家の養子になった。当家には馬が 30 頭余りもいたので、駄馬運送業を始めた。

三代目小松延枝

初代 小松与太郎を語る。

小松与太郎は青森県北部大畑村に生れ、土族であったが、藩政奉還にともなって産業を営み、回船問屋を営んできた。北海道との取引に帆船を就航す。若年より船乗りとして技術を習得したのである。

当時、襟裳の海藻、昆布、魚粕などの商取引に着眼して明治 8 年(1875)に小越村に居を置いて回(漕)船問屋をしたのである。小越港内には、当時、その帆船を繋留のため岩礁に穴を穿ち樺杭を立ててあったのは最近(昭和 38 年頃)までのことである。

明治 15 年(1882)に大畑より家族を移住せしめ、以後は沖合漁業に従事したのである。

小笠原ヨシ

父、小笠原金蔵が明治の初めに笛舞村に来た。その当時、実兄小笠原丑蔵は、すでに笛舞村に来ていたので、昆布採取や沖合漁業に従事したが、後に炭焼きをした。

西島留吉

私は上歌別で生れた。父は明治 22 年(1889)ころ、富山から渡道し、帯広から目黒に移住。さらに上歌別へ落ちついたという。

八谷サダ

私は明治 12 年に幌泉で生れた。

白石万蔵

私が目黒に来たのは、明治 40 年(1907)頃であった。主として昆布を採り、そのほかは柁夫、または、柁造りをした。

越後ミエ

幌泉に来たのは 5 才のときで、親は成田与五郎で、上歌別で畜産や木炭焼をしていた。

岡辰吉

私が上歌別に入植したのは、昭和 6 年(1931)の春である。当時は民有未墾地開発資金が借りられるようになって、未墾民有地が開放された。

村中滋雄

初代村中久四郎は幌泉場所請負の福島屋の大工棟梁として、明治以前早くから幌泉に来ていた。

長岡定次郎

私の三代前の長岡正兵衛は、新潟県生れで慶應元年(1865)5 月蝦夷地に渡り、函館に來りて漁業を営んだ。

高橋キヨ

私は、寺島家より高橋家に嫁に来たのであるが、初代、寺島庄一郎は妻と二人で、安政年代の頃、福山より幌泉に来たのだそうである。

当時は福島屋がおった時代であったので、近浦でサケマス建網漁業を営んだ。このとき中澤徳兵衛が南部より歌別に来たが、住宅もなく裸一貫の無一文であったので、当分の間、夜は俵をはき、俵を着て眠ったそうである。

当時は、橋場徳兵衛といったのであるが、後に、中澤徳兵衛となったのは、多分、中澤家の養子になったのでしょう。

建網は魚がたくさん獲れたが、庄一郎は病弱のため、中澤徳兵衛を船頭にし、更には徳兵衛に漁場を渡したが、豊漁で漁場は栄え、笛舞、歌別、坂岸などにも漁場を開き、一代にたくさんの財産を残し、部落にも大変尽くした人である。

庄一郎は、漁場をやめてから、村の役職や水産物検査員などをしていたが、息子の時代になって、昆布を主業として生活したという。

高橋家の祖父が笛舞に来たのは明治 7 年(1884)で、中澤徳兵衛の漁場で永年働いた人である。その後、徳兵衛が病気のため、建網漁場をやめたので、二代目、高橋松三郎が笛舞の漁場を引受けて建網漁業を営んだが、ときには、鮭の大漁の年もあり、また、不漁の年には、お正月用の鮭一尾で、十数人が正月過ぎしたこともあった。

漁業

魚は手繰網でたくさん獲れて漁粕にした。当時は昆布採り舟に、2~3 人乗って、4 月から 7 月上旬頃までカレイの漁をした。

サケの建網は函館の村本惣兵衛という人が経営していた。このほかに咲梅、フンコツにも建網がたっていた。(長谷川フ)

当時(明治15年ごろ)川崎船にて手繰漁タラ釣りを経営した。労苦は並大抵のものでなかった。その後、春秋にはサケマスマグロ定置網を建て、漁獲も多く一千石場所と讃えられた程であった。サケマスはほとんど塩蔵にして函館または内地方面に送ったものである。

襟裳岬周辺は雑魚が多く、ことに「アブラコ」は年中豊漁なので、明治40年(1907)に村の人達にアブラコを漁獲せしめ、缶詰製造をしたが、一ヶ年経営して失敗した。アブラコの身は煮ることによって、身はもろく、缶詰としては適当でなかったのが原因とわかった。

小松与太郎は明治43年(1910)死去したので父は二代与太郎を襲名した。襟裳岬の近海の沖合はマグロが大量にいることがわかったので、これを漁獲するべく、函館よりラッコ捕獲帆船の古古船を買入れ、漁夫13名を雇い、マグロ流網漁業を営んだところ、大漁であったが、当時、帆船のため、風向によって市場への輸送が困難で、腐敗などにより経営も成り立たず、二カ年で失敗したが、断念できず、更に明治45年(1912)マグロの巻き網を考え、静岡県より巻き網技術の漁夫を雇入れ、マグロ操業に従事したが、潮流の変化が激しいために漁獲に至らず、遂に失敗に期した。(小松)

目黒沖に出て、魚を獲ったのは3~4艘で、メヌキ、タラの延縄、または手繰漁であった。サケマスの建網は3ヶ統あった。サケは300石位とれたので、1000束祝いをした。猿留川にサケは上らなかつたが、マスの大きいのが上った。サケは後になって、川で孵化してから3年目で川にのぼった。その後、孵化をしないので現在(昭和38年ごろ)はのぼらない。(白石)

明治40年(1907)ごろから幌泉にて漁業に従事した。その当時は、南部家のヤマヨの岬で大高養吉と、引網、刺網、カツオ釣りをやった。4月頃から7月中旬まで引網で、コマイ、ニシン漁をした。大量に獲れて、魚粕にした。製品は、第五東高丸や高山丸に積んで函館の取引問屋、本庄合資会社に送って、商取引していた。(菅沼)

明治の末に歌別の浜では主として、昆布、ふのり、銀杏草、漁業は丘手繰でカレイを獲り、魚粕にした。マス、タラ釣りもしたが、主として乾燥した。(越後)

庶野での漁業については、手繰網で魚をとり、川崎

船に5人乗り、百人浜の沖で、半日で満船して来た。魚は全部粕にした。魚粕は、函館で、100石(15t)600円位で、一俵(36貫:135kg)で4円50銭であった。手繰漁は日清戦争が始って、昆布が安くなったので、その時から始めた。当時で8隻やっていた。

この村で手繰から延縄漁に変わったのは、越前から来た田村才太郎という人が、川崎船でオヒョウ釣りを始めた。当時、オヒョウは大漁で、魚体も一匹2貫目(7.5kg)から8貫目(30kg)位のものが普通で、マサカリで切って釜に入れ、魚粕にした。

次に延縄でタラ釣りに変わった。5月6月と昆布を探る前までやった。製品は開きタラにした。その製品が良く、根室方面の開きタラと同様に東京市場で売れた。

タラを釣るには、タコのエサが一番よいので、当地の手繰船、または幌泉より買ってきた。

昭和7年(1932)に私が漁業組合の会議で浦河に出張した。帰り様に立寄り、空針でタコを釣る延縄をやっているのを見て帰り、組合員に詳しくタコの延縄の話をしたので、菊田己之助が浦河より経験者を依頼して始めたところが、漁があって、エサに不自由しなくなった。それからはコンブ採りが終ると、直ちにタコ漁に着業した。大漁で一パイが5貫(19kg)から8貫目(30kg)位で、値段は一パイが50銭位で、様似から仲買人が来て酢ダコ、または煮ダコにして青森方面に送った。

これが庶野でタコの延縄漁の始めて今日に至った。

私が昭和7年(1932)に道庁から検査員に任命されていたので、昆布はもちろん、開タラ、酢ダコ煮ダコなども検査し出荷した。

昆布については検査規定もあったが、品質の改良については特に努力した。(中島)



幌泉市街(明治41年、現:本町)

当時は焼別だけでも、川崎船が10隻位はいたでしょう。手繰網で漁獲した魚は、全部、魚粕にした。魚油もできた。盛んな時には、幌泉郡内で、200隻の手繰船があったが、大半は廻船で、地元の船は少なかった。

函館よりの廻船時期は、5月より来て、8月ないし、

9月まで漁業に従事していたが、コンブ採取時期になると、コンブ干場のため魚粕の干場がなくなり、切り上げて帰る船もいた。

土地の人でもよくやったのは相当あったが、川村重蔵さんのお父さんは、初めからよくやっていた。鮮魚の仲買人はいないので、漁獲したものは、自分で全部粕にした。製品についても、仲買人などはいなかった。函館に仕込親方がいて、取引きしていた。取引先は、本庄、松屋、坂屋、西口などであった。中でも、本庄は、サツコツに漁場を持っていて、自ら漁業経営をしていた。私も海産商もやっていたので、各村を廻って、商取引きをした。(西川)

昆布(コンブ)

明治40年(1907)に笛舞近呼で昆布採取者65隻で一戸平均500駄(一駄8貫匁:30kg)の収穫で豊漁であった。普通の年で200駄から300駄の収穫である。

値段は一駄、上昆布で1円~1円70銭、下昆布で一駄12銭のときもあった。

大正末期のとき昆布は薄生のため一戸当り8駄から20駄のときもあった。値段は上昆布で一駄、2円50銭した。(山崎)

私が目黒に来たときの生産物は、昆布が主で、函館と販売取引していた。昆布の輸送は帆船でしていた。

目黒には汽船が来るのが少なかった。米、味噌などの生活品は、船の都度、積んできたが、ここに商店がなかったので、その他の日用品は、幌泉から購入した。

ある時、高橋徳蔵は、馬で幌泉に行ったが、馬を逃がして、幌泉より米一俵と味噌一樽(13貫目50kg弱)を背負って、目黒まで山道を歩いて来たという強者であった。

時化で船が何日もこないときは、幌泉より米を馬で運んだこともあった。(工藤)

その当時(明治中頃)昆布はたくさんあって、一戸300駄も採った。値段は、上昆布で一駄80銭から1円位であった。

昆布採りの時期になると、弁財船がたくさんの食糧や雑貨品を積んで来て、昆布と物々交換で、その他の干魚などを満載して内地に帰った。(藤井)

手繰漁を切上げて7月中旬からコンブ採取した。当時は昆布もたくさんあって、一戸平均、300~400駄も採った。値段は上昆布で、一駄1円位で中下は30~40銭であった。(立花)

近浦では生業は主として、昆布を採取していた。一戸当り60~100石で、値段は上昆布で100石500円位であった。昆布の規格は上中下の等級にわけた。上昆

布は長さ4尺(120cm)、中昆布は長さ3.5尺、下昆布は長さ3尺で一駄の目方はいづれも8貫匁(30kg)であった。

当時、販売は幌泉のヤマタ本間多次郎、西野頼吉が仲買で、弁財船に積んで函館に送り、問屋と売買取引していたようであった。(白川)

目黒での昆布採りは、当時(明治40年頃)30戸あった。そのあたりは、他から来て誰でも昆布採りをした。収穫は一艘当り100石(4000貫:15トン)位採った。値段は100石、500円したので、大変値がよく、皆喜んだ。検査規格は、上、中、下と三段にして検査を受けた。当時の昆布は汽船に積んだ。(白石)

明治40年(1907)頃から昆布採取もやった。幌泉(大和、新浜含)で81隻であった。収穫は一隻150駄から200駄は採った。値段は上昆布で80銭位。中昆布で40銭位。下昆布で20銭位であった。

販売は幌泉商人も買っていたが、明治35~36年(1902~03)頃より函館の問屋と取引をしていたようで、たいがいの方は汽船に積んで函館に送った。

(菅沼)

昆布(コンブ)・海藻

その当時の生活の状態は、昆布さえ探っていれば生活ができた。庶野に私が来た時は、戸数49戸であった。聞くところによると、明治25年(1892)に、海氷が押し寄せて、昆布、海藻を全滅させたが、翌年からはたくさんできた。

庶野の昆布は主として支那に輸出されていたのであるが、明治27年(1894)に日清戦争が始って、貿易が断絶したために昆布は大幅に値下りした。函館には清国の領事館があって、清国の商人がいて、主としてその人が昆布の値段を決めた。その頃、函館で100石(15t)が400円、1駄が一等で80銭であった。一戸当りの漁獲高は500駄(15000kg)くらいであった。ほかに布海苔(フノリ)、銀杏草(ギンナンソウ)と採取した。値段は、布海苔が一番安い時1円に5貫40匁(20kg)、高い時で1円に1貫60匁(6kg)であった。銀杏草は、安い時は1円で10貫匁(37.5kg)位であった。(中島)

春になると4月下旬頃より、フノリ、ギンナンソウをたくさん採ったが、値段が安く乾燥した。フノリ1円に1貫位、銀杏草は1円に2貫目位でした。(藤井)

建網の形式

明治38年(1905)頃の建網の形式は、中又キといって潮の流れによって、上(カミ)の方、または下(シモ)の方からでも網起しができた。今の時代から見れ

ば至極く簡単な方法であった。

網の長さは、30間(55m)で中10間で手網は150間であるが、魚の入口は狭かった。(山本)

マス建網一ヶ統13人、サケ建網は25人で役人は船頭、下船頭、若者頭、チップ乗りなどである。給料は期間中(3ヶ月)普通雇入で25円。船頭は一人五分増、役人はそれぞれ分増が付いた。(山本)

建網を営んでいたのは、近浦で中澤徳兵衛、上古丹では岡本嘉兵衛、笛舞では中澤徳兵衛であった。春は、5月よりマス・イワシの建網を建て、9月よりサケの建網を営じた。(白川)



中澤徳兵衛頌徳碑

(笛舞神社：大正13年建立、平成12年撮影)

昆布が終ると、10月よりサケの建網を各村とも営じた。サケは大漁で一ヶ統300石も獲れて、1000束祝をした。(藤井)

手繰網漁業

明治38年頃、手繰漁が始まっていた。上古丹(うへこたん：現在の笛舞漁港付近)は、自然の船溜がよいので年々漁業者も増加した。明治の末から東洋の藤井市松、佐々木梅之助などは、毎年1月より4月末まで廻船して、手繰業を営んでいた。(山本)

明治29年(1896)頃、小越の沖では手繰漁はできないので、油駒に行って漁業をした。魚が大漁で一日に二回も沖に出て漁をしたこともあったと聞いていた。そのうちに百人浜の沖でカレイが獲れたので、油駒にいた船と小越にきて手繰漁をした。その年に大津波があつて、人は一人流されて死んだが、船を流したり、家を破損したのもあった。

私の養父は、明治35年(1902)頃、アブラコ釣りをしていた。時期は春であつたがたくさん釣れるので、魚粕にした。当時、タラヤカスベもたくさん釣れたが、これらは乾燥して製品にして売った。(駿河)

明治25年(1892)頃、当時すでに、丘手繰でカレ

イを獲っていた。丘手繰網でカレイを獲った時期は、4月頃より7月上旬までであつた。魚はたくさん獲れて、魚粕にして、36貫俵を30俵から40俵もとつた。その後、明治30年(1897)頃、藤井市松、藤井鉄五郎がすでに川崎船で手繰漁を始めていた。

当時、歌別沖でサメ、カレイの群集している場所を発見してから手繰漁が益々盛んになった。それ以後、内地の越前、越後、および函館方面の川崎船が手繰漁に、エンドモより、歌別、幌泉、笛舞、近浦間に120隻も来ていたようだ。

地元の船を合わせると150隻余りの手繰船がいたでしょう。漁期は2月より7月10日頃までであつた。

漁獲高は、一隻当り、平均、魚粕にして100石は獲つた。内地漁船は、来るときも、帰りも、汽船に引かれて、毎年往復していた。魚も獲るに従つて、年々減少してきたので、内地、および函館方面の漁船は、大正の初期には来なくなった。

カレイの漁獲が少なくなつてから、キンキンを獲るようになった。キンキンもたくさん獲れたが、そのうちに、発動船で底引手繰が許可になつてからは、川崎船による手繰漁は不振となり、経営も成り立たないのでやめてしまった。(藤井)

明治38年(1905)頃に越中越後越前函館方面の手繰船が200隻も来た。アベヤキからエンドモまでの間にそれぞれ分散して手繰漁を営んでいた。当初は、往復とも帆をかけて自力で航行したが、その後は汽船に引かれて往復していた。時期は5月上旬から7月中旬まででした。

経営の方法は水揚高の歩合分けで、一人当たり最高200円から最低70~80円位であつた。

私の父親が明治17年(1884)に幌泉に来た当時、カレイを買いに行くと2尺もあるカレイを、10銭で味噌樽(13メ入)で2樽もくれたのには、もてあました。この時代は、魚粕にすることもせず、頭と腹を切って乾燥していたそうである。製品にしたのは、弁財船に積んで売買していた。(竹内)

私が子供の頃、笛舞で戸数20戸位であつた。

明治35年(1902)(16才)頃は、手繰漁は盛んで、主として越後、越中、加賀、函館方面の船で地元の船も合わせて100隻余り操業していた。内地船は来る時は汽船に引かれ来た。漁期は3月より7月上旬までに終わり、漁獲は平均して一隻当り、魚粕にして100石(15トン)位であつた。漁期が終わるとまた汽船に引かれて帰った。当時は幌泉の街は大変景気がよかつた。御座敷は4軒で大繁盛であつた。魚もあまり獲りすぎて年々漁獲が少なくなり、明治の末期には内地漁船も来なくなった。(立花)

最初小舟で手繰漁をやっていたが、川崎船で手繰を始めたのは大分おそくなってからである。また、内地からイワシの巻網（アグリ漁）をやりにきた頃から手繰船が盛んになったようだ。（八谷）

幌泉で手繰漁を始めたのは川村金作氏であったようだ。私が子供の頃（明治34年1901頃）丘手繰網でカレイがたくさん獲れて魚粕にした。その当時は、一日に2~3航回もして魚を獲った。

明治36年（1903）頃から越後越中越前、函館方面の手繰船が約120隻も来て、エンシマより笛舞間にいて漁業を営んでいた。来る時は汽船に引かれて来たが、帰りは北東の風が吹くと自力で帰っていった。

漁期は4月より100石以上で、少ないのは50~60石位であった。その当時の幌泉の景気は非常に盛んで、貸し座敷、料理屋、一盃屋などあり、商店なども活気づいて、中々の賑いであった。

内地漁船が幌泉に来たのは、大正6年（1917）頃までであった。

大正3年（1914）頃より発動機船の底引手繰船が始った。幌泉で発動船の始りは、大坪藤助さんと浜長由次郎さんの2隻。その後、川村重次郎さん、新松弥吉さん等であった。発動機船が盛んになるに従って、川崎船による手繰漁は全くなかった。発動機船も幌泉に港がないために、大型船は室蘭を根拠にして漁業を営んでいた。（菅沼）

この当時、函館尻岸内の漁船が60隻位。歌別、幌泉、南部家に来て、手繰漁をしていた時期は、4月より6月末までであった。（越後）

明治20年（1887）頃、高橋徳蔵がカレイ手繰漁業を始め、大正の中頃まで盛んであった。漁獲は一隻魚粕100石位（15t）であった。（大西）



幌泉市街（明治38年：日露戦争祝勝パレード）

サケ建網

サケの建網は中澤徳兵衛という人の漁場があり、その漁場で働いた。当時、サケはたくさん獲れた。中澤徳兵衛は笛舞、近浦、坂岸の三ヶ場所も経営していた。その他、守田安衛門は油駒で、山本八衛門は幌泉で経

営していた。漁夫は土地の者、その他函館からも雇われて来た。

漁期は10月より12月中頃まで、給料も漁期間中15~16円から、役付で25円位であった。当時としては給料もよかった位である。

中澤徳兵衛さんは漁期中、朝早く夜の明けないうちから浜に座布団を敷いて、丹前を着たまま戻って、天候を見ては、沖に出る指示をしていた人であった。また、よく天候の良い悪いを見分けたものであった。

（立花）

（歌別での）サケ建網の場所はエンドモカ、番屋前で中澤徳兵衛、林重吉が経営していた。歌別の番屋は福島屋の番屋であったが、後に林重吉の所有となった。

（村中）

猿留のオニトップおよびウエンベツのサケ漁場は、佃富吉が開拓した。チブヤニは高橋徳蔵が開拓したのである。大正9年（1920）の鮭漁は、一漁場で一回に3,000尾も獲ったことがあった。一期間中一ヶ統3,000石から5,000石は普通であった。建網の形式は角網を改良したのである。（大西）

猿留川のサケマス

昔より大正の終わりまで猿留川にサケがたくさん獲っていた。11月頃には水溜りに30~40尾のサケがいた。

マスは7~8月頃は川底が暗い程のぼったが、誰も獲って食べようとはしなかった。（大西）

イカ釣り

聞いた話であるが、ほかの船でイカがたくさん獲れたが、小越の人は釣りに出ないという。訳は、昔、この村でイカ釣りに行ったが、たくさん釣れて船を沈めてしまったので、沖から帰って来た人がいないので、イカ釣りをやめたという事であった。（駿河）

イワシの陸揚げ

昭和8年（1933）6月襟裳岬の海岸にイワシの大群が押し寄せてあがった。村の人達は総出で、夕暮で舟にすくいあげて運んだり、また、陸にあげて、坂の上まで背負あげて石油箱1ヶ5円で売ったり、いづれも、みな魚粕にした。一戸で魚粕7~8本も造ったのもいた。

これは潮流の寒暖の変化によるものと思われる。その後においても、たまたま多少のイワシが陸にあがる。（駿河）

アグリ（イワシの巻網）

アグリは大正2年（1913）頃に幌泉の渡辺藤平、堤留吉が共同で二ヶ年経営した。漁船漁具、雇人は南部（岩手県）より求めて漁業を行ったが経営不振のため廃止した。（白川）

明治の末頃、南部の八戸より、アグリ（鱒の巻網）を雇船して経営した。乗組員は、沖乗 32 人、おかまわり 4 人、飯炊は 2 人 計 38 人であった。

イワシはたくさん獲れた。ときには、大きなニシンを一巻に 200 石も獲れたときがあったが、その時などは、わく網からニシンをくみ揚げ、陸に来て、なつば（魚の入る場所）までの籠かつぎなどに使用した人は、200 人もあった。このときは一日に米 3 俵と 2 升炊き、おにぎりにして食べさせたのであるが、皆な休む暇がないので、腹が減って食べるのではなく、休息のために食べていたのである。この日の漁は、私の漁場で一巻で獲ったが、外の漁場では皆無であった。

アグリ漁は 3 年位でやめたが、結果的にはどこの漁場も欠損に終わったようである。（高橋）



イワシ水揚げ（昭和初期）

クジラの陸揚げ

昭和 16 年（1941）9 月 15 日小越、白昼沖合より白波を立てて陸に向かって、相当の数のものが突進して来たので、村民は戦時中のことでもあり、敵の潜水艦が押し寄せて来たという。大騒ぎになったが、だんだん近づくに従って潜水艦でないことがわかって、安心と同時にクジラとわかった。陸に押し寄せたので村民は総出で懸命の努力によりロープを結びつけて陸揚げしたのは、大は 15 尺（4.5m）、小は 9 尺位のもの、270 頭であった。売却したのもあったが大部分は食糧にした。

多分、潮流の変化によるものと思う。（駿河）

クジラの骨

襟裳キャンプの下の沢にクジラの骨があったと話を聞いていた。何時の時代のものかわからない。

（池田ハル翁は明治 7 年（1874）襟裳で生れ、91 才であるが病床にて話は聞かれない）（池田）

スケトウダラ漁業

昭和の初期に和船によるスケトウダラ漁が盛んになってきた。地元の業者と東洋、襟裳の漁業者も廻船して来たので、笛舞地区で 12 隻も経営した。

漁期は、1 月より 4 月中旬までであったが、年々漁場も遠くなってきたのと、各船とも網の数を増やしてき

たので、昭和 8 年頃より発動機船により経営した。漁獲高は期間中、1 隻 8,000 束から 12,000 束（一束 20 本）も獲れたので、漁業者自らの製造加工であったので、大変多忙であった。当時最低値は一束 13 銭のときもあった。

漁業者は各自、函館商人と取引していたので、製品は汽船で函館に送った。

明治の末より大正、昭和 12 年（1937）、日支事変が始まるまで、魚はたくさん獲れて、村中は活気があった。（山本）

タラ釣り

明治 25 年（1892）頃、東洋にてタラ釣りをしていたが、たくさん獲れて、何程いたものかわからない位であった。

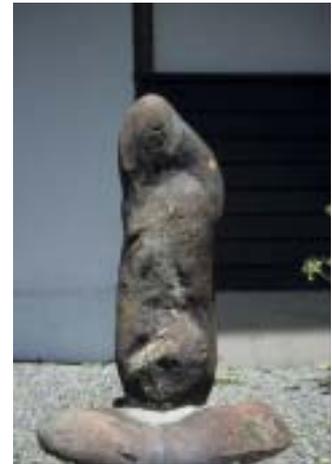
タラは三枚に開いて乾燥し製品とした。当時、弁財船が来ると食糧品等と物々交換した。（藤井）

カトザメ釣り

カト鮫（カドザメ）を釣ったのは、大正 5 年（1916）頃より始めたが、大漁であった。漁期は 10 月 11 月で時化の多い時期であったが、一隻当り、150 本より 200 本位は漁獲した。一本 15～16 貫（60kg）より、20 貫（75kg）位で値段は平均 13 円もした。サメは青森県人の大好物なので汽船に積まれて輸送された。（藤井）

大正 4 年（1915）頃より、カト鮫（カドザメ）釣りが始まった。当初は幌泉船も様々に 4～5 隻行って経営していたが、その後大正 6 年（1917）より幌泉で 14～15 隻の船が鮫釣りをした。時期は 10 月 11 月の 2 ヶ月で、海の荒れる時期だが、沖に出た日は一本 30 貫（110kg）前後のカトザメを、最高 40～50 本も釣ったこともある。値段は大小平均して、一本 7～8 円であった。短期間ではあったが、相応の漁獲高であった。サメは主として汽船に積んで青森魚市場に送った。

漁場はサガ場の 250 尋（1200m）の沖合まで行くので、しかも和船であり、また時期的に時化のため、危険が多いのと、またサメも薄漁になったので大正 8 年頃やめた。（菅沼）



鮫供養塔（法光寺）

カツオ釣り

明治 40 年 (1907) から 45 年 (1912) まで 5 ヶ年、昆布が終ってから秋 (9 月 ~ 10 月) に延縄でカツオ釣りをした。4~5 人乗組のボン川崎船が、5~6 隻であったが、随分釣れた。一日に一隻当り、350 尾から 400 尾位は釣った。

魚はカツオ節に製造して函館に送った。(菅沼)

マグロの旋網

明治 42 年 (1909) 頃、すでにマグロの旋網が内地の静岡から幌泉に来て、南部家の潤を根拠にして、マグロを獲っていた。一日に大マグロ (30~50 メ) 500~1,000 本の漁獲であった。青森から冷蔵船が来て積んでいった。値段は一本、2 円~2 円 50 銭であった。

このときの経営者は三ヶ統であった。数年たらずに不漁となったので、経営をやめたが、その後、今のマグロの突きん棒がはやってきた。

その頃から幌泉の人達がイワシの旋網をやったが、失敗して財産を捨ててしまった者も相当いた。(菅沼)

ハタハタ

明治 42 年 (1909) よりハタハタ漁を始めたのは大高養吉である。

刺網や引網で“ヤマヨの岬”で獲った。漁期は 11 月 20 日頃より 12 月 10 日頃の短期間であったが、たくさんとれて全部魚粕にし、函館に送ったのである。多い年は粕建 (一本 36 メ詰) 56 本も獲ったことがある。プリ子はミゴ縄につないで乾燥して食糧として秋田に送った。その後、ハタハタは生で秋田方面に送っているが、毎年漁があって、今日でも獲れているので、お正月の仕度の収入として大変喜んでいる。(菅沼)

ハタハタは大漁で粕にした。プリコは煮て白でついて、乾燥して粕にした。(越後)



ハタハタの大漁

(昭和 30 年代)

コマイ

明治の終わり頃から、コマイは引網で春の季節に獲れた。南部家の潤は、上半分は大高養吉で、下半分と幌泉の潤は林重吉、漁業権を持っていたのは二人であった。

一日に数間も網を引くので魚は大漁であった。全部魚粕にして函館の取引間屋に送った。(菅沼)

川崎船の改良

昆布が安くなったので、手繰りや、タラの延縄などをやってきたが、従来の川崎船の甲板は、板子を敷いていただけであったので、時化になると波が入りやすく、航行も危険であった。

明治 36 年 (1903) には、暴風にあつて、百人浜付近で遭難し、多くの人々が死んだ。当時、川崎船が改良されてきたので、なんとか改良したいと思って、幌泉漁業組合より分離して、庶野猿留漁業組合を設立した。組合名で、道庁に、改良川崎船の補助を申請した。二カ年の間に補助を受けて、6 隻を造って、タラ釣りやメヌキ釣りを盛んにやった。これが改良川崎船の始まりである。(中島)



明治時代後半に活躍した川崎船 (模型)

発動機船

改良川崎船を造ったが、帆船であるので、風の吹きようで航行するので、容易ではない。特に、北東の風の時は、襟裳岬を経て、幌泉に行けば危険でないが、南東の風になると、庶野の潤に入るのは困難であった。

たまたま船が遭難して、漁夫も死んだので、なんとか発動機船を造って、沖合の遭難をなくし、また、天候にあまり左右されないで出漁するために、発動機を造ったのである。それは昭和 10 年 (1921) 頃であった。

経営は村の人が 30 人で株式を組織し、組合を作り、吉田善太郎を組合長にして、一人 500 円の出資をし、道庁より低利資金 2,000 円を借り入れて、電気チャッカーの発動機船 5 隻を造った。

漁に出ると、メヌキは大漁であった。1 尾 1 貫目 (4kg) 位のは 50 銭で、どうやら間に合ったが、何分にも機

関士が、運転技術未熟のため、故障を生じて、出漁も思う様にならないので、とうとう、経営も成り立たなくなり、欠損して、2000 円程の借金を負ったので、発動機船を処分して、組合を解散した。

小型発動機船を造ったのは、幌泉でも庶野が始めてあった。その後は、個人で発動機を造って、漁業経営をして、今日に至った。(中島)

小型発動機船ができたのは、大正の末頃で各村とも漁業も経営したが、機械の操作の未熟と経験が浅かったため、故障で出漁できず、また、出漁しても遭難事故が多かったため、漁業経営は不振であったが、後次第に改良されて、発動機船による漁業が盛んになった。(藤井)

大正 5 年(1916)室蘭より 15 馬力、7 トン余の小型発動機船を買入れ、襟裳岬沖合のメヌケ(サガ)釣りを経営し、漁獲の成果をあげたが、販路は浦河広尾方面のための、魚粕しか方法がなく、好結果に至らなかった。

機械船をもって漁業を営んだのは小越村では最初のことである。

大正 7 年(1918)に 20 馬力小型発動機船 8 トンを建造してマス流網、サガ釣りを経営す。また、函館日魯株式会社の襟裳岬沿岸のオヒョウ釣りに、部落の磯舟を曳船して、二ヶ年経営してオヒョウの名声をあげたのも当時のことであった。

その間、サケ定置は例年連続的に経営するも、大正の初期頃よりは魚も次第に減少をきたしたので不振になったが、率先して各種漁業を行い、また常に改良と工夫をなして漁村開拓のためにことごとくしてきた。

また、部落の公共的面には率先して寄附を行い、小越村に私設消防、水難救護所を設置して多くの海難者を救助したのである。(小松)

漁業組合

昔は幌泉一円で幌泉水産会を設立していたが、これを解散して、歌油(歌別、歌露、油駒)漁業協同組合を設立した(大正 4 年 1915)。(藤井)

水産法ができて、幌泉水産組合ができたのは、明治 20 年(1887)頃かと思われる。私が来た後の組合長は、奥田信一で、昆布についての一切を牛耳っていた。鹿野約翰の父親は小使いであったが、浜に出ると、相当いばっていたものだ。松岡さんも、幌泉水産組合の書記をしていたらしい。

当時の役場は戸長役場であった。その時分に青年会ができて、私が青年会長をした。(中島)

クレオソートの被害

昭和 6 年(1931)3 月頃、干珠丸(3,000 トン位)が、クレオソートを満載して、横浜より釧路方面に航海中、濃霧のため進路をあやまり、歌露のエンシマ海岸に座礁した。一旦、離礁したが、運悪く、大時化に見舞われ、汽船は難破したので、積んでいたクレオソートが流出し、付近一帯の海藻類、昆布、その他、魚介類は全部死滅したので、部落民は生活の困窮をきたしたが、役場では早速、救済事業を始めてくれた。

仕事は浜に寄り上がったクレオソートのついた砂や砂利をモッコで背負って道路に敷いたり、時化になっても流れない所まで、背負上げたので、みんな総出で働いた。

当時、道庁より専門の技師が来て、3 ヶ年は昆布、海藻類は生えないだろうと言われたが、翌年になると、被害を受けた附近には、昆布、布のり、銀杏草など、例年にない位よく生育したので、大変よかったと村民一同喜び合った。(藤井)

農業

庶野で畑地を出願して、成功して検査を受けて払い下げになった。要領のよい人は雪のある時期に願い出し、雪のある時期に成功検査を受けた人もいた。全く適当なものであった。作物は自家用程度の野菜を作った。(長谷川フ)

畑作は、野菜を作っていたが、自家用程度で専農者はいなかった。(八谷)

農業経営をしていた人は記憶にないが、畜産はやっていた。

役場に日高開発史があり、参考になることが書いてあった。(西川)

庶野では、馬鈴薯(ジャガイモ)は、私が来た当時から皆作っていたが、たくさんとれた。どこの家でも、塩煮、または餅にして食べていた。また、馬鈴薯を細かに刻んで、ゆでて、乾燥させて、糎(かて)にして食べた。南瓜(カボチャ)その他の野菜もたくさんとれた。後に、農(農業)を本業として入植したのが、上島良吉のお父さんで、土地は、長岡さんの所有地を坪 7 銭で買い受けて耕作した。昭和 21 年(1946)からは、今の開拓者が 10 戸入植して、今日に至った。(中島)

馬

畜産は昔から経営していたようだ。馬を持っていたのは、大場、鹿内、浅木の三人で、馬は放牧されていた。私が来てから、明治 39 年(1906)に種馬牧場を設置するのについて、西支庁長は「国の土地を村にくれるから、村で 200 円負担せよ。」とのことであった。

その土地は庶野の区域内で、馬の放牧場になるので、200 円出すことによって、20 年間ただで使用できるといので、庶野で 200 円負担した。牧柵の設置も各戸に割り当て、追分よりサクバイの台まで二ヵ年で完了した。馬の入牧料も一頭につき 50 銭にして、年間放牧した。その当時、雌馬と種馬を一緒に放牧したのは、明治 38~39 年(1905~06)頃からであった。その当時の所有頭数は、一戸当り 5 頭から 20 頭であった。

その内に、日高畜産組合ができて私も総代になり、総代を一期つとめて、その後評議員となり、日高畜産組合に 20 年役員として籍をおいた。在田さんが畜産を始めたのは後のことで、大正の初め頃であった。約 100 頭の馬を持っていた。私が村会議員になったのは、大正 5 年から、昭和 22 年までで、休みなく議員をつとめた。(中島)

馬はたくさんいたが、年中放牧していた。多く持った人は 30~40 頭も飼っていた。雪が降って山で食べる物がないと家に連れて来たが、雪が深いので藁を敷いて、その上を歩かせた。新しい藁は 1 枚でまにあったが、古い藁は 3 枚も重ねた。

明治 29 年(1896)頃に大雪が降って食べる物がなく、山に放牧していた馬は多く斃死した。(長谷川フ)

幌泉に畜産組合ができたのは、明治 22~23 年(1889~90)頃で(町史では明治 20 年)林重吉が組合長になって経営した。当時どの村でも各自、馬を 5 頭より多くて 100 頭位はもっていた。年中、牧場に種牡馬と一緒に放牧していたので、自然に繁殖していた。

その後、明治 37 年(1904)頃より、種牡馬は舎飼することになり、漸次、馬が改良されてきた。

目黒は牧場がなく、また、山は急で馬の放牧に適さないので、広尾のオシラベツの山に放牧した。(工藤)

明治 35 年(1902)には私の家にも馬は駅通馬のほか、15~16 頭あり、浅木 10 頭、大場に 15~16 頭あった。その後、キスケに在田牧場ができて、何年に来たかわからないが、馬を 100 頭余り持っていたようだ。また、私が来た当時は、幌泉の金子さん、本間さんが、短角牛を持って来ていた。追分より庶野地区の牧場に馬 200 頭位。牛も 100 頭以上放牧していた。当時は、種牡馬も雌馬も一緒に放牧して、自然に繁殖させていたが、繁殖率は大変よかった。

明治 40 年(1907)頃、大雪が降って、草の用意もなかったので、大半の牛が死んだ。私が来た以前に、幌泉畜産組合ができていたようだが、明治 39 年頃解散した。(長岡)

幌泉より旧山道の咲梅台に来た時、夕方であったが牛の団が、夜、休むときは子牛を中に入れて、親牛

は外側に角を向けて円陣を組んで寝ていた。熊の予防のための一方法であった。(工藤)



家畜市場(新浜、郷土資料館付近、昭和 10 年代)

明治の末頃、牛馬飼育していたのは、菅沼定太郎・馬 50 頭、本間多次郎・馬 30 頭・牛 30 頭、太田虎蔵・馬 10 頭・牛 20 頭、成田由五郎・馬 50 頭、川村金作・馬 50 頭、吉田熊蔵・馬 300 頭、山本八工門・馬 40 頭、飯田宗作・馬 5 頭・牛 30 頭、菅原忠蔵・馬 20 頭、その他、2~3 頭位はどこの家でも持っていた。

当時は、畑作をする者もなかったので、年間放牧していたが、大正の初め(大正 4 年のことか)3 月の彼岸に幌泉特有の下風(しもかぜ:北東~東の風)で吹雪となり、雪が 2 メートル位も積もり、牛馬は草を喰うことができなくなった。また、家に下げても飼料もなかったので、牧場内で集団してお互いのたてがみや尾の毛を喰い、また、木の枝なども食べて餓えをしのいだのであったが、雪がとけてきたときには、栄養失調となって、ばたばたと斃死した。このときは、幌泉全村の家畜の大半は雪のため死んだのである。

この下風のとき、南部家の山で炭焼をしていた、高橋某一家 5 人は家が倒壊したので炭釜に入って、炭火をたいていたが、吹雪はひどく釜の入口が閉ざされ、木炭ガスのため、父と子供 2 人が死亡。母と子供一人は辛うじて脱出して附近のカネコ太田虎蔵の厩舎に避難して助かった。(水野)

明治 36 年(1903)頃、幌泉で馬を最高飼育していたのは、吉田熊蔵氏で 297 頭持っていた。種牡馬と一緒に主として歌別の海岸牧場に放牧していた。ほかに川村金作、成田、菅沼、木下、細川等で、皆々 20~30 頭は持っていた。その他の人々も 5~6 頭位は持っていた。上歌別では三浦弥助氏がたくさん飼っていた。(竹内)

苦別では、大正の初め頃より畜産を始める人が多くなったので、軍馬も生産するようになった。また、畑作物も作るようになったので、漸次、人家も多くなって、昭和 33 年(1958)頃には、30 戸となった。畜産は益々盛んとなり、金丸元太郎・馬 40 頭、小山内勘三・

馬 15 頭、高橋国定・馬 6 頭、須藤長次郎・5 頭、その他の人々も 2~3 頭は飼養していた。昭和 26 年(1951)頃より、短角牛を飼育したが、成績は良く、また、最近(昭和 38 年頃)では乳牛を飼育するようになり、現在では 4 戸で 30 頭となった。個々の経済もよくなり、更に他の人々にも普及したい。(金丸)

私の父親は明治何年に来たかはわからないが、家で子供の頃に持っていた馬は、駄馬が 7 頭で、駄賃付(馬で荷物を運搬)をしていたが、ほかに繁殖用の馬は持っていなかった。他の人は 3 頭から 20 頭位を持っていたが、種馬と一緒に年中、山に放牧していた。その頃で 2 才馬一頭 5 円位であった。

明治の末期に大雪で牛馬がたくさん斃死したようだ。詳しいことは忘れた。(立花)

明治 40 年(1907)頃、幌泉で馬を持っていたのは菅沼の家では 80 頭で、それを 100 頭にしたいと言っていたことを聞いていた。吉田さん、川村金作さん、庶野の在田さんらは 100 頭以上の馬を持っていた。当時は年中放牧で、幌泉郡内で 2,000 頭以上の馬はいたそう。放牧ばかりしていたので、盗まれてもわからない者もいた。当時 2 才馬の売買は一頭 5 円~10 円位であった。

軍馬の買上げになったのは、明治 42 年(1909)からであると思う。その後、毎年買上げになって、大正に入ってから、釧路の白糠牧場に輸送され育成されていた。当時から馬の改良がさげばれてきたので、優秀馬の改良に畜産家は努力してきた。(菅沼)

幌泉郡内で種牡馬を飼育していたのは、在田、山形、小泉、三浦虎蔵、三浦富太郎、長岡定次郎、菅沼一(定太郎)、成田由太郎、吉田、荒川権、広島昇、立花豊、野村友らで、これに伴う牡馬も相当の数であった。当時から軍馬農耕馬の買上げが盛んになってきたので、種馬を舎飼して、競って馬産改良に力をつくした。

(菅沼)



百人浜を行く荷車馬(昭和 20 年代か)

駄馬運送業

明治 43 年(1910)に除隊して、水野良助家の養子になった。当家には馬が 30 頭余りもいたので、駄馬運送業を始めた。

当時の道路は馬道程度で、砂浜を歩いたものであった。

ヤマタ本間で仲買した昆布ほか、海産物は全部、笛舞、近浦、様似町の旭、また、新浜、歌別方面より駄馬で幌泉まで運んだ。その当時の汽船は、幌泉港に停泊し、他の港に入港しなかったため、大変不便であった。食糧品、日用雑貨品や漁具資材などは、幌泉に陸揚され、駄馬で各部落に運ばれたのである。

当時、仲買人には、ヤマタ本間多次郎、西野頼吉、山本八衛門などがいた。

海産物の運搬が終ると、主として薪や木炭を山から運送した。

手繰漁が盛んであったので、魚粕の製造に多くの薪が必要であったのである。

明治の終わりに、浦河、様似方面でカトザメが釣れた。サメの餌はサケであったが、様似、浦河でサケ不漁の時は、幌泉より駄馬で運んだこともあった。

(水野)

馬車

私の兄が札幌で牧畜業を盛んに経営していたが、兄が死亡のため、牧場を止め、牧夫を解雇したので、馬車の必要もなくなったので、幌泉に馬車を持って来たのは大正 5 年(1916)で、札幌より馬に引かせ来たが、道路が不完全な時代で大変苦勞であった。特に様似より幌泉まで、砂浜が道路であったので歩くのに容易でなかった。それが幌泉に馬車の入った始めである。当時は荷物の運搬は駄馬によって運んでいたが、道路がよければ、駄馬の 7 頭分位を馬車一台で運んだので皆びっくりしていた。その後、道路の改良に伴って馬車も多くなってきた。(菅沼)

乳牛

乳牛を飼育したのは大正の始めで、当時、牛乳は自家用程度であり、そのほかは、生まれた子馬に飲ませて飼育した。(立花)

幌泉に乳牛の入ったのは、大正で、成田由五郎が始めて飼育した。当時は自家飲料程度で、流通ができないので、あまり盛んにならなかった。(菅沼)

最初の事業として、昭和 14 年(1939)に荻伏から乳牛 6 頭を買い入れ、16 年には荻伏の乳業会社へ牛乳を出荷した。出荷は乳業会社から牛乳缶を借りてきて、朝早く西川商店のバス停留所まで、牛乳を自転車で交代で運んだものである。

17年には公農公社に乳業事業が移ることとなり、上歌別の集乳所も買収されたが、私は担当者として集乳作業に従事していた。

閉鎖したのは、昭和32年(1957)のときである。(岡)



馬を使った牧草刈り(昭和30年代)

短角牛

短角牛を持っていたのは、成田由五郎、加藤イノ、本間多七郎などで、明治40年(1907)頃から飼育していた。主として、庶野のキスケ牧場に年中放牧していた。(竹内)

幌泉に短角牛の入って来たのは、明治38年(1905)頃である。当時はヤマタ本間多七、守田安衛門、寺井重太郎、広島万吉らで、後には、ほかの人々も飼育した。これも年中放牧であった。多い人は40~50頭も飼っていた。(菅沼)



放牧中の短角牛(昭和30年~40年代、悲恋沼)作物

昔から巳年になると、凶作になり、7年間も続いたという。それで寒さに耐える作物を多く作るようになったと言われている。(小笠原)

寺小屋

歌別で初めて寺子屋を聞いたのは明治7年(1874)頃で、今の四ツ谷岬のところを中番屋といったが、そこで佐々木平吉が先生となって、村中長吉ほか5人の生徒を教えた。その後、上歌別の休み所に工藤文吉が

寺子屋を開校したので、生徒は村中長吉、藤井市松、安田正五郎、吉田サキの4人であった。(村中)

私の父、工藤文吉が先生となって、「上歌別の休み所で寺小屋を始めたのは、明治13~14年(1880~81)の頃で、歌別、油駒方面の生徒も教えた。」と父が言っていた。(工藤)

学校

庶野の学校は明治16年(1883)に、今(昭和38年当時)の警察のあるところに、先々代の吉田勘之助が建設したのが初めてであると聞いていた。

その当時、学校は長さが5間、幅4間で、真中に柱が立っていた。私が来た時もこの学校であった。先生が一人で、生徒は30人位いた。その当時は、学校へ来たい者は来る、来たくない者は来ないという状態であった。

その後、次第に生徒も多くなり、代用教員をおくことになって、今(昭和38年当時)の新井さんが初めて代用教員をした。私も勉強が好きで、青年会を結成してからは、青年のために夜学には力を入れて、教育を盛んにしなければならぬと考えていた。

大正5年(1916)に、村会議員になると、学務委員を兼ねたので、また、学校も狭かったので、4間の5間を増築することに努力した。その後、今までの学校を解体し、現在の組合の倉庫にした。旧学校を新築した。それ以降は昭和24年(1949)に今(昭和38年当時)の学校が出来た。(中島)

庶野の学校は旧学校の位置であった。シトマン川に丸太の一本橋で子供達が渡るに大変危険であった。(長谷川フ)

襟裳(小越)の昔の学校は川の下にあり、位置は今(昭和38年頃)の川崎松太郎宅の浜の方に建てであった。学年は4年制で、生徒も30人位はいた。先生は藤井先生で、その後に原先生が来た。勉強はいやで、学校にあまり行かなかった。(駿河)

油駒の学校は旧学校の位置で簡易小学校であった。



油駒尋常小学校(明治12年)

修学は4年制で、私共の学んだ頃、生徒数は23人位で、先生は一人であった。私も油駒の学校に入学したが、2年に当時の原先生が小越（襟裳）校に転任したので、私は原先生の下宿して、小越の小学校に通学したが、間もなく尋常6年制となった。小学校を卒業して、補習科に入って終了して、幌泉の渡辺商店の番当も3年勤め、家に帰って、漁業に従事したのは17才であった。（明治32年1899）（藤井）

私が幌泉の学校に入学した時は、生徒は40人位で先生は校長先生ほか一名であった。当時の本は全部漢文で、大変面倒であった。その後、間もなく本が改正された。当時は尋常4年までしかなかったが、その後、高等科ができた。（八谷）

現在（昭和38年）の役場と消防番屋の間は、学校の運動場であった。当時は、正式の幌泉小学校で、鹿野約翰さんは先生であった。鹿野さんは、先生をしているうちに、日露戦争に召集された。歌別には分校、歌露、油駒は焼別に学校があった。（西川）

病院

当時、病院は、今（昭和38年）の洞口さんのところであって、幌泉病院という名称で、村で経営していた。医者は、広田院長ほか一名であった。幌泉郡内でも、病院は一カ所で、後に、庶野にもできた。（西川）

庶野の開業医が来たのは、明治35年（1902）である。当時の医者は村田改造という人であった。一年半で転任した。その後に来たのは片倉医師で、4~5年いて転任した。

それからは、医者は5人かわって、昭和6年（1931）頃、拓殖病院ができた。今の桜橋の付近である。医者は洞口さんであった。道庁から一ヵ月200円の給料がでた。洞口さんも事情があって恵庭の村医として転任した。

その後は更に医者が4人もかわった。これまでは、庶野でも相当な額の助成金を出して、医者の慰留に努めた。昭和34年（1959）に道立庶野診断所ができて、今日に至った。（中島）

私の夫が病気になったので、当時庶野に医者がいなかったの、幌泉まで迎えに行き、診察をしてから、更に薬をもらいに行ってくるので大変不便であった。また、苦勞をした。（長谷川フ）

アイヌのこと

（祖母から聞いた話）当時船問屋を営業として弁財船に昆布、ふのり、銀杏草、干魚などを積んでは函館方面の商人と取引をしていたという。その頃、アイヌが

多くいたので使役した。

昔、小越村にアイヌの首長がいて、十勝アイヌが丸木舟で襟裳岬を通るのに来たが、それを通さなかったので、舟をオリベツの石山附近より陸を油駒に運んで海路幌泉に来て様似方面へ行ったという。

前の笛舞小学校の裏山を高台と称して、アイヌが山の裾に堀（溝）を掘って障地を築造していたという。（山崎）

私が子供の頃、家では商店をやっていたので、アイヌが買物に来ていたが、何戸位あったかはわからない。私の家の向いに代書をしていた稲垣さんという人のところにアイヌが来て、戸籍をつくってもらっていたようだった。私は小越で暮したこともあるが、昔、畑を掘るとアイヌの刀やその他、いろいろな物が出てきたという話を老人から聞いたことがある。（八谷）

昔、幌泉郡内の各部落にアイヌの勢力者がいたようだ。歌の文句にあるように、襟裳に又太郎、笛舞に板五郎、サツコツに作久松というように、建網の漁夫がサンパ船を漕ぐ歌の文句のハヤシにされたものである。

女性は口の染め方が地域によって違っているので、十勝メノコ、白老メノコ、平取メノコ等一目でわかるそうだ。（菅沼）

クジラの食中毒

アイヌは油の多い魚を好んで食べた。あるとき幌泉に腐敗したクジラが寄り上った。クジラの腐敗したのは食べてもなんでもないという話から、アイヌたちが、皆それを食べたところ、中毒をおこして大部分のアイヌが死んだことがあった。その後、様似、十勝方面からアイヌが来て、居住したので、明治の初期に今の新浜に集めて定住させたが、次第に他方面に出ていった。

当時アイヌの生活は、夏は昆布の採取や魚を漁獲し、または鹿狩りをして、その肉を常食とした。春には山菜をとり、ことに「オベロ」（おばゆり・オオウバユリ）を採って、それを白でついて、だんごにして、乾燥し長く保存して、主食としたらしい。（村中）

アイヌの墓地

笛舞の安保鉄五郎宅の上に道路開削の工事したとき、人骨がたくさん出たので、アイヌの墓地であったようだ。（山崎）

戸数

明治33年（1900）頃の近浦は戸数14戸、上古丹（うえこたん：現在の笛舞港周辺）15戸、笛舞（現在の下笛舞）16戸、計45戸であった。（白川）

明治 38 年 (1905) 頃の笛舞の戸数は 21 戸であった。
(山崎)

当時 (明治中頃) 幌泉の町の戸数は、60 戸余であった。
(八谷)

明治の末に歌別の浜で生活したが、当時の戸数は、
コロップ 5 戸、浜中 2 戸、歌別 13 戸 (番屋前) 東歌
別 10 戸、計 30 戸であった。(越後)

慶応年代に和人で歌別に定住していたのは村中久
四郎、岩間太左工門、越後鉄太郎ほか七戸であったと
いう。主としてコンブ、フノリ、ギンナンソウを採取
したり、漁業を営んでいた。(村中)

明治 39 年 (1906) 当時、焼別の戸数は 8 戸であ
ったが、年々移住者によって増加した。(長谷川コ)

私が物心つくようになった明治 25 年 (1892) 頃の
戸数は焼別で 10 戸、オシヨロスケ 5 戸、油駒 5 戸、
歌露でも 5 戸位であった。(藤井)

津波について

明治 29 年 (1896) 5 月の節句の晩に大きい津波が来
て、庶野でも大分被害があったようだ。三陸沖地震津
波。(長谷川フ)

明治 29 年 (1896) 5 月の節句の晩に大津波があ
ったので、漁船、その他、魚類を流して大損害を受けた。
三陸沖地震津波。(藤井)

昭和 8 年 (1919) 3 月 3 日午前 2 時半、長い地震が
あり、同 3 時大津波が起こった。村の被害は次のとお
り。

記

死亡者は 8 名。流失家屋 9 戸。全潰家屋 2 戸。納屋
流失 7 戸。半壊家屋 45 戸。納屋 27 戸。

流失発動機船および破壊船 4 船。チップ船 30 船。
その他、漁具等損害大なり。三陸沖地震津波。(長岡)

幌泉大火

明治 36 年 (1903) に、大火があつて、市街目抜通
りの半数約 30 戸が焼失した。これは幌泉で初めての
火災であった。(八谷)

道路

後に聞いた話であるが、近藤重蔵の造ったという道
路は、幌泉、上歌別、追分峠の上を経て、三枚岳の中
間を通過して、豊似湖に下つて、目黒に出、更にピタタ
ヌンケまで海岸を通り、その地より、オシラベツまで

山道を開発して広尾へ通じる道路である (猿留山道と
ルベシベツ山道のこと、猿留山道は最上徳内・中村小
市郎、ルベシベツ山道は近藤重蔵が開削)。

私が目黒に来たのは、明治 17 年 (1884) の時であ
る。その時歩いた道は、幌泉会所の所より上歌別に出
て、追分峠を経て、庶野の駒止から猿留山道を経て、
目黒に来たのである。



猿留山道絵図 (北海道歴検図: 北海道大学附属図書館蔵)

その後、明治 18~19 年 (1885~86) 頃、様似より
幌泉を経て広尾まで海岸道路ができて、歩いたことも
あったが、時化で道路が破壊されるので、目黒庶野間
に新たに山道を造って歩いたのである。

その後、今の黄金道路ができたのである。最近 (昭
和 38 年) になってから、浦河営林署で、庶野より豊
似湖を経て、目黒に通ずる林道を造ったので、それで
道路は 5 箇所となった。(工藤)

昔から幌泉より浦河まで行くのに海岸を歩いたので
あるが、明治 41 年 (1908) に様似から冬島まで山
の上を開削した。この工事の請負人は庶野の長岡清次
郎であった。下請負人として、私の父、竹内三衛門ほ
か 4 組あり 3 ヶ年で完了した。道巾は 2 間であったが、
冬期間は雪なだれ、また降雨には道路はいつも破損す
るので通行も困難であった。その後 3 年程過ぎてから
海岸に道路の付け替をした。大正 3 年 (1914) 頃から、
冬島より幌泉間の海岸線道路で時化などの場合、通行
困難な箇所から石垣を造り、道路を部分的に造ってき
た。当時はすでに極めて難所の箇所はトンネルが通っ
てあった。冬島、幌泉間の道路が完成して、ハイヤー
が幌泉まで来たのは大正 5 年 (1916) 頃であった。

幌泉より上歌別を通過して庶野線の道路は、私が 26
才 (大正元年) に道路工夫になったとき、ニカンベツ
川より追分山道まで受継ぎ区域であった。すでに道路
はできて馬車が通る程度の道巾であった。当時の道路
管理についての指示は支庁であった。

歌別より襟裳までの道路は、鹿野村長時代に運動し
て「人馬の歩く程度でもよいから」と再三運動して室

蘭土木で道路をつけたが、年代はわからない。

猿留山道の開削道路（明治時代に開削された新山道）は庶野の長岡清次郎氏の父親、長岡正兵衛が請負して造った道路であると父より聞いていたが、何年頃に造ったかわからないが、大正 10 年（1921）頃より幌泉産の軍馬を釧路の白糠牧場に輸送するのに猿留山道を通るため、道路の修理工事を請負したのは、様似の赤松四嘉太郎氏であった。当時の道巾は人馬が通る程度の 3 尺巾位であった。（竹内）

私が若いころ（大正の初め）は、庶野へ通じる道路は、歌別川から豊似岳の中腹を通っており、ほんとうの山道に過ぎなかった。庶野から目黒へ通じる山道は豊似湖畔を通って猿留川沿いに下っていったものである。（西嶋）

様似に引越した時は明治 45 年（1912）頃で、道路がなかったので砂浜を歩いて行った。崖で通れないところには、トンネルができてあった。家財道具は小舟で運んだ。また、当時の話によると幌泉より札幌まで出るのに、馬で 4 日もかかったそうである。

様似に 12 年住んで、その後、幌泉に来た。その頃には道路もでき、様似までハイヤーが来ていたが、幌泉までは車が来ていなかったの歩いて来た。（八谷）

私が明治 35 年（1902）庶野に来て間もなく、日露戦争に行き帰還したが、近藤重蔵が造った道路については、何も話を聞いていない。幌泉より上歌別、追分を経て庶野の駒止より猿留に至る山道は、長岡家三代目の親父が、明治 32 年（1899）に一部請負して造ったと聞いていた。その後、今の黄金道路に変更されたが、着工年代は忘れた。しかし工事中に昭和 8 年（1933）の津波で大被害を受けたことは覚えている。工事は昭和 9 年に完成した。

駅通の前は駅伝といって、明治 18 年（1885）に駅伝取締規則によって駅伝が設置された。このこと、取扱人については、庶野で馬を所有している人々が、庶野駅伝業者組合を組織して、駅伝取締所を定め、駅伝の事務取扱人を組合人の選挙で決めた。

その時、取扱人に長岡正兵衛が選挙され、事務取扱の届を郡役所を経て、札幌県の許可を得た。名称は、幌泉郡庶野駅人馬継立所取扱人であった。駅通の経営取扱人は旅人の不便から、必ず旅館を経営することになっていた。馬 2 頭を貸与され、これを繁殖させながら使用するような指示された。また、牧場も官より与えられて管理した。駅通馬は旅人に賃貸したが、当時庶野幌泉間で 30 銭位であった。その後、だんだん値上がりして 2 円にまでなった。（長岡）

私が上歌別に入植したとき昭和 6 年（1931）は二級

国道がようやく開通したときで、砂利も入っていなかったの、雨降り時の悪路は想像以上にひどかった。

砂利が入れられたのは昭和 19 年（1944）のころである。（岡）

駅通

私の家は昔から目黒にあったが、私が内地から帰って来て、この地に定住したのは 16 才のときである。駅通は明治 11 年（1878）からやっていて、道より月 3 円の給料をもらっていたが、事務取扱があまりにも厳格であったので、明治 32 年頃、事務取扱を一時やめたが、他にやる者もなかったし、目黒は地形上、通行人が不便であったので、廃止するわけにもいかなかった。道より、駅通再開の話があり、明治 39 年（1906）に再度、駅通をやった。

駅通は必ず旅館を経営することになっていたの、家では明治 40 年から旅館を始めて、旅人の便宜を図った。（工藤）

弁財船

弁財船というのは内地の能登、加賀、越中の人達の商船で、あらゆる商品を満載して国を出港し、一年に 2 度ほど北海道の上場所と三場所の 2ヶ所を廻航して、商品を売った。そうして、昆布、魚類の製品ができるまで、その地に停泊滞在し、製品を買受けて、満船してから内地に帰った。幌泉でも、元の油駒の潤はベンザイ船泊とって、良き船潤であった。（工藤）



現在の油駒（平成 19 年 1 月）



弁財船（北前船）模型（郷土資料館）

弁財船で内地よりたくさんの品物を積んできて、売り捌き、昆布ができると積んで帰った。弁財船は多い時では、4 艘も潤に繋留されていた。当時としては、物資の不自由はなかった。

弁財船の出入が多かったせい、幌泉には貸座敷が 7 軒もあった。(八谷)

幌泉会所

幌泉の会所のあった所は今(昭和 38 年)のカネサ商店のところより渡辺さんまで、一棟で間口 20 間、奥行 10 間位であった。

会所を廃止してから田中さんが宿屋をしていた。その後、明治 24 年(1891)頃、私ら 5 軒が入った。今の蔵町には、会所の倉庫がたくさんあったという話を聞いていたが、私が知ってからは、二階建の倉庫が一軒あった。この倉庫は、大切なものを入れるための文庫であった。(八谷)

先代から聞いた話。福島屋が安政二年に豊似岳の中復に相馬の馬頭観世音菩薩を建立したが、石碑は内地より弁財船に積んで持って来た<猿留山道にある馬頭観世音菩薩は文久元年(1861)に建立>。当時の道路は幌泉より上歌別を経て歌別川上流を上り、猿留に通ずる開削道路で、当時はこの道路によって、日高十勝間の連絡をしていたといわれている。

石碑はこの道路を駄馬で運んで建立したとのことである。このとき頭取は初代村中久四郎であった。当時アイヌも大分いたので、大工のことを「バンジョ」といった。すなわち久四郎バンジョの通称であった。(村中)

初代池田丑三助は明治以前に幌泉会所において、小越、庶野、猿留番屋の飛脚をしていたという。明治の初めに、小越村に定住した。当時の住居は山から木を切って、三角小屋を建て、周囲はカヤで、入口には葦を下げた粗雑なものであった。あるとき、友人と酒を呑んでいたところ、熊がのぞいて、びっくりしたこともたまたまあったという。(池田)

番屋

目黒にも昔、番屋があったようだ。それは、幕府時代の役所で各村に設けて、税を取りたてたところだ。

その当時は、「二、八」といって、生産品の 2 割は税金、8 割は生産者のものであった。

また、旅人で困る者は、宿泊もさせたようだ。建物は、相当大きなものであった。また、倉庫もあった。(工藤)

目黒の墓地のあるところをフンコ番屋という。当時道路は寛政十一年(1799)に様似～幌泉～猿留まで開

削した時に旅行者の便宜を図って、旅宿所があったものと思われる。それを番屋と称したようだ。(大西)

小越に番屋のあったのは山形さん宅の所であったことを聞いていた。昔、昆布を探ったり、また、サケを獲って切り上げると、番人を置いて、函館または内地に引揚げていった。(駿河)

税庫

襟裳(現：えりも岬)に税庫が建てあったのは、今(昭和 38 年頃)の漁組の倉庫のあるところで、昔、税の代金に昆布を納めさせ、入れてあった。(駿河)

定期航路

幌泉に汽船がきたのは、明治 23 年(1890)頃で津島丸というのが定期船であった。函館幌泉間を 24 時間で航海した。その当時、扇谷でも帆船で、宮古丸を経営していたが、その船も売り、古い汽船に買い変えたが、結果は失敗に終わった。(工藤)

幌泉の船潤の杭が立ててあったのは、昔、帆(パイ)船時代で、100 石積とか、50 石積とかいう帆船をつないだ杭である。

当時の物資輸送は、幌泉ばかりでなく、釧路、根室方面の品物も、みな、海上輸送で行ったのである。汽船のない時分で、みな、帆船が輸送していた。

その時分は帆船航海であったので、襟裳岬があるために、西風の吹いた時は、内地方面へ行けなくなって、小越、または庶野に停泊し、北東の風が吹くと、釧路、根室方面へ行けなくなって幌泉に停泊した。

それでも、日高でも幌泉が一番繁華街であった。私が来た時代で、貸座敷が 2 軒もあった。料理屋も相当あって盛んなところであった。

これというのも、時化のために、パイ船が何日も停泊して、天候が回復してからそれぞれ、目的地へ向かって、航海に出たからであった。

私が来た時は、尼ヶ崎汽船株式会社の船と、金森商船株式会社の船が、道庁の補助を受けて、定期航路として、浦河、様似、幌泉、広尾、大津方面の物資輸送をした。<命令航路>

私は当時、汽船も少なかったので、幌泉汽船株式会社を、明治 34 年(1901)に設立し、下関まで行って、買栄丸を買い受け、航海せしめた。

翌年、浦河でも、三場所汽船株式会社を設立して海運業を始めた。その内に、釧路の前田汽船株式会社は経営が成り立たなくなって営業をやめ、三場所汽船株式会社に船を買ってもらった。この様な状態で、ほとんど船で航行していたので、我々が内地から来た時は島流しにされたようなものであった。

(一ヶ月の航海は何回か。)

定期は、5日毎に航海することになっていたが、何分にも、天候によって、予定通りにはいかなかった。悪天候の時は10日も20日も航海できなかった。

私が来た時は、汽船による定期航路であった。おそらく、明治20年(1887)頃から汽船で航海をしていたものと思われる。(西川)



北海道交通要覧図(航路も記載されている)
(北海道庁土木部道路係「道路概況」大正14年付図)

定期航路については、明治33年(1900)に、函館のイチヤマシヨウ商店と約束して、長谷川が回漕店をして、私が事務の取扱をしたのが初めてであった。月給は6円であった。幌泉では定期航路は、相当早くからできていたようだ。なお、幌泉では地元の汽船組合ができていた。山本、西野、山田らの経営であった。庶野に回漕店ができるまでは、全ての生活物資は、幌泉より馬で運んできた。汽船が寄港するのは、月に2回位で、主として函館釧路間を航海していたので、積荷などがあれば、旗の合図によって寄港してもらった。

その時のイチヤマシヨウ商店は、個人経営の汽船であった。その後、広尾がだんだん開発され、農産物もたくさん出荷されるようになった。定期航路ができて、函館の金森汽船株式会社の回漕店が広尾にできたので、農産物などを積出しするようになった。それで庶野にも月に5回位は寄港するようになった。これは庶野としては、初めての定期航路であった。(中島)

私の伯父、扇谷似太郎は弁財船で商売していたが、その時代にはすでに汽船が幌泉に来ていた。それで、伯父もその弁財船を売り、幌泉で株式で汽船を買って商売したが、失敗して財産を全部なくした。(八谷)

造材

目黒の山は道有林だが、幌泉郡内でも、木が良質であるので、木材は毎年一万石は出ている。積取船が来て、内地方面に持って行った。(工藤)

目黒では、明治の末期に川崎常吉が造材を経営して

いた。木材は弁財船が来て積んでいったこともある。その後、初代赤石定吉が経営していたが、一時中止し、広尾町の堀田毅が経営して、現在(昭和38年頃)盛んにやっている。

赤石二郎は最近の事業であるが、特売を続けている。立木の払下は両者とも道有林で年間30,000石位である。(大西)

猿留村の開拓者

明治8年(1875)に目黒源吉という人が、一番先に定住した。当時は大分入植したようだが、不便のためか、根室方面に引越したようだ。残ったのは、高橋徳蔵一人である。(工藤)

猿留村の名称、起源

昔はアイヌが住んでいたようだ。伝えられているところによると「ツルル」と呼んでいたようである。これは、ワラビタイにツルがたくさん来て遊んだので、ツルルと呼んだらしい。(町史では、ヨシ原の中にある川から由来しているとある)

その後、和人が来てから猿留と呼んだが、ここには猿はいないので、ツルルが猿留になっただけ。その後、昭和17年(1942)の字名改正で、目黒の「開拓者」目黒源吉の姓をとって目黒といった。(工藤)

猿留奥地の開拓

大正2~3年(1913~14)頃、仙台から開墾の目的で、今野のほか7戸が入植したが、土地を耕さないで木材を切り出していたが、遂にこの地を捨ててどこかに行った。(工藤)

神社

住吉神社は、私が来た時は、燈台の所(灯台山)の金毘羅さんのところに祀ってあったが、明治31年(1898)に、現在のところにお宮を新築して、御神体を移した。

住吉神社は、函館の福島屋という漁場の請負人が、幌泉にもってきて祀ったのが初めてである。

稲荷神社は、山本漁場の稲荷さんで、山本さんが伏見(京都)に行って、稲荷さんの御神体を受けてきた。

私が昭和13(1938)年に内地に行って帰って来たら、住吉神社の拝殿の床が抜けてしまっていたので、改築をしなければならぬことを、氏子総代から相談を受けた。かねてから、幌泉に来て50年になったら、何か記念になるものを寄附しようと考えていたので、当時、丁度45年になっていたのも幸いだったので、幸にも神様のことでもあるので、「本殿を私が寄附するから、拝殿を村でやってくれるならば賛成である。」という私の意見に同意され、住吉神社を改築することにした。

本殿、拝殿とも、材料は内地の檜材であった。鳥居、



江戸時代 1864 年に奉納された手水鉢（住吉神社）

階段も私が寄附した。階段は、紀元 2600 年の式典に、北海道、道民総代として、近衛内閣の時に招待を受けたので記念として寄附した。（西川）

稲荷神社

目黒の稲荷神社は秋田県の人が御神体を持ってきたのであるが、何年頃かは不明。（工藤）

寺井重太郎さんの先代が歌露で漁場を経営したときに祀ったもので、後に歌露部落の稲荷神社として祀り、毎年、春と秋祭りを行っている。（藤井）

話に聞くとところによると、庶野の元の稲荷神社は、ルーランの上にあつて、大変粗末なお宮であつた。

明治 14 年（1881）頃に番屋前に移転し、その後、外国船が木材を積んで遭難したので、広尾の人が、木材を買い受けた。その時、昆布、海藻に被害があつたので、木材百石をもらい受け、今の神社を幌泉の先代石井大工さんに新築してもらった。

庶野に稲荷さんを持ってきたことについては不明である。（中島）

お寺

私が来た頃は、庶野の寺は説教所で、幌泉の光明寺の分教所で光明寺が出張して来ていた。初めての寺の住職は熊谷さんという人で、明治 35 年（1902）に来た。私がこの寺で熊谷さんと二人で書き役をしたこともある。

その報酬は一戸 1 ヶ年 1 円を納めて便宜を図った。（中島）

妙見さま

豊似湖の上にある妙見神（猿留山道沼見峠にある石祠、安政 6 年 1859 建立）は、私の考えでは近藤重蔵が造った道路（猿留山道は最上徳内・中村小市郎が幕府の命で開削）で、そこより次に下って行く道である。昔、幌泉より十勝に通じた道路であつて、大変さびし



沼見峠から馬蹄湖（豊似湖）を見る

い山道なので、神を祀り、神に頼るといふ気持ちで近藤さんが祀つて（場所請負人福嶋屋嘉七らが建立した）、通行人に安心感を与えたものと思う。（中島）

目黒の寺は、元は説教所であつて、宗流は門徒宗である。種本という坊さんがおつたようだ。明治時代のことであるが、はっきりした年はわからない。（工藤）

お寺は、当時から現在の寺があつた。あまりにも数が多いので、「お東とお西と合併したらどうか。」また、「同じ宗派は合併して、寺らしき寺を建てたらどうか。」と意見を述べたが、取り入れられなかつた。私が来てからでたきのは、庶野の説教所だけである。

（西川）

アイヌ語地名

幌泉のいたる所の名称はアイヌ語である。

1. ウエンとはきたない言葉である。（悪いという意味）
2. ウエンコタンとはきたない村である。（町史には疫病などがはやった可能性が示されている。）
3. ‘ベツ’のつくのはみな川のあるところである。
4. 大きいことは「ポロラレ」という。
5. 小さいことは「ポンチヨ」という。
6. 目黒の山、沢の名称は、アイヌ語である。
7. タンネナイとは、深い沢である。また、大きい沢ともいう。（町史では、長い川）
8. カラスコタンとは仮小屋を造ることをいう。（町史では、カルシコタンといい、キノコの村）

（工藤）

小越の様子

明治 25 年（1892）（10 才）頃の小越の戸数は何戸であつたかわからないが、今（昭和 38 年頃）の学校の裏の小川より下の方に家がほとんど建てあつた。学校、神社、お寺もあつた。風が吹くと家に砂が飛び入るので御飯も食べられないので、その後、住宅も川より現在の市街の所に移転して現在に至つた。（駿河）

百人浜の状況

20才(明治35年1902)の頃、野菜作りに苦別に通作(通って耕作)した。当時小越苦別間は、道路もないので海浜を歩いた。

現在の道路の上の方は木が生いてあった。また草も相当延びて生いてあるので歩くのには淋しかった。

また、木の切り株などもたくさんあったので、以前は相当の密林であったかも知れぬ。(駿河)

明治33年(1900)頃、襟裳から焼別まで、母と一緒に行って来たが、当時の道は今(昭和38年頃)の道路線と変りなかった。木の生いている状況は昔も今も変わらないが、草は相当延びてあった。(駿河)

襟裳の一带は、昔から今のような状態であったが、沢地には、大木が生えてあったようだ。当時、すでに木は切られて、太い根元が残っていたが、潮風のため木はのびていなかった。(藤井)

庶野に来た当時の百人浜は現在のような赤土で草も木もなかったが、木を切った根株が残っていた。(長谷川フ)



小越市街(現:えりも岬、昭和20年代)

私が小越へ行ったのは、大正時代であるが百人浜は赤土であった。その時分、苦別までの間に枯れた木が立っていた。(八谷)

幌泉船入間設置

船入間を造るには、発動機船が10隻以上、なければできない。発動機船があるところでも、中々、船入間を造ってくれないのに、「西川君、君は熱心に漁業のために運動しているので、船入間を造ってやりたいが、発動機船、一隻もないところへ造ることはとてもできない。」と道庁の水産課の方が言われたので、「それでは発動機船何隻あったら造ってもらえるか。」「少なくとも10隻はいる。」「それでは私が10隻の発動機船を用意するから、その際、よろしく頼む。」とお願いし

てきた。帰ってから平野に2隻、川村に2隻、地元にはほかにないので、室蘭へ行って、箱部に頼んで一隻、浦河へ行って、小泉に話して一隻、大坪が船を借りてきて一隻、砂原由太郎、新松弥吉は、函館のマルダイ、阿部さんの仕込で漁業をしていたので、本人と話し合いをしたところ、「資金がないのでやれない。」と言った。そこで私が資金を出してやることにした。

早速函館に行き、マルダイと話し合いの結果、新松に一隻やることにした。8隻が決ったが、2隻はやる人がいないので、私が2隻経営することにした。朝に沖へ漁に出て、翌日帰ってくるのであるが、満船である。経営してからすこぶるもうかった。

発動機船、10隻できたのは、昭和2年(1927)であった。それから道庁へ行き「発動機船、11隻できたから、約束通り船入間を造ってもらいたい。」とお願いしたところ、私の熱意に動かされて、造ってくれることに決った。

工事予算は、全部国で負担するわけにいかないの、村でも2~3割負担しなければならないというので、負担することにした。その後、私の発動機船が一隻、幌泉の船間を繋いでいて、時化のために破壊されてしまった。保険に入っていたので、損はしなかったが、これ幸いとして、現況の写真をもって道庁に出かけて行って、私の発動機船の沈没した事情を述べて、極力、早急に船入間を造ってもらうことので了承を得たのは、昭和4年(1929)であった。それで道庁の方と、農林省へ行き、工事費19万5千円に決った。この工事は浦河の谷万吉が請負することに決った。

この時、クレオソート油を積んだ汽船が歌露に座礁した(昭和6年)ため、油が流出して、附近一帯の昆布、海藻、魚介類は全滅した。大被害をうけた。

その時分、起債に東京へ行った栗山君の兄さんが、内務省にいたので、その時に運動の仕方を教えてもらった。「あなた方は、課長や局長に始めから言っただめだ。係が調査するのだから、係によく話しをしてから、上司の方に話すべきである。」と教えられたのである。

帰って来てから船入間の工事をするようになって、人夫一人、一日1円20銭のところを、クレオソートの被害で村民は生活に困っていたので、一日1円で働く人がたくさんいて、毎日、役場に50人から70人の申し込みがあった。谷さんの工事請負契約については、15万円に決定し、4万5千円をまけてもらった。

船入間の入口が狭いので、船の出入りは困難だから、これを拡張すべく、協議して工事をすることにした。笠原さんが1万円寄附してくれることになったので、先代の吉田さんと相談して、西川1万円、吉田1万円、寺井5千円、計3万5千円を寄附して、入口の拡張工事をした。

とにかく、この船入間を造るのには、大変苦労した。

それでも、運動のために出張しても、旅費等は、役場よりもらったことはない。自費で歩いた。(西川)

庶野船入澗設置

庶野は早くから、ルーランに漁業者がたくさんいて、私に相談に来て、「ルーランに船入澗を造ってもらいたい。」と、また、番屋前の方では、「番屋前に造ってもらいたい。」と話があり、お互いに要望し合った。

これを村会に提案して、ルーランに造ることに決議した。この運動も私がした。庶野では両方の折り合いがつかないので、ルーランの方を道庁の研究課の方が調査の結果、遠浅でだめだと判定された。仕方がないので、村会でも庶野の船入澗を造ることを取りやめることにした。

庶野では、話をまとめて「是非造ってもらいたい。」とのことで、翌年、村会で再び庶野に船入澗を造ることに決議した。工事は、村でやることになった。このようなことで、庶野の船入澗ができたのである。これができる、襟裳でも「船入澗を造ってくれ。」と、また、笛舞からも要望された。(西川)



庶野港(昭和30年代後半以降)

沖合漁業を経営させるには、発動機船でなければならぬというのは、私の念願であった。川崎船であれば、陸に巻き上げや、下げをするが、発動機船を陸に上げるのは容易ではないし、また、進歩的でもないの、なんとかして港を造りたいと考えていた。

この時、北海道庁の勅任技師、伊藤長衛門という人が、港に関する課長であったので、その方に、港を設置する場所を話し、また、そこを見てもらった。

その頃、ルーランの人達は、ルーランに港を作りたいと希望したので、場所を見てもらったら、「100万円かけなければ、船の入る港にならない。番屋前であれば60万円位でできるでしょう。」と言った。その時の60万円は大金で、とてもできる見込みがたななかった。工法によっては、それほどかけなくてもできるだろうと思ったが、組合としても、当時は1000円位の予算しかなく、どうしようもなかった。

昭和8年(1919)、三陸沖の津波があって、5人の人

が流されて死んだ。庶野の総被害額は、15万円で、この対策事務所を長岡の二階に設けて、支庁の方や林村長が来て、色々と協議した。

その後、御内努金が御下賜されて、一戸一円宛配分した。私はこの時の御内努金を元にして、貯蓄することを村民に勧めた。

その後、幌泉村で、庶野に船入澗を造るべく計画して、予算38,000円を計上してくれた。こんな予算では、船上場程度だろうと思ったが、設計を見たら、周囲をコンクリートで囲んであったので、やはり船入澗だと思った。

工事は指名入札で、谷さんと札幌の伊藤組で入札したら5万円以上なので、仕方なく谷さんに頼んで随意契約で、工事を着工してもらった。その時、現場監督は早坂さんであった。

谷さんは工事を着工したが、どうせ間に合わない工事だから、保証金も少なかったので、工事をやめてしまった。仕方がないので、この工事は村直営でやるより方法がないと決心した。

この船入澗の設計は、道庁でしたのであるから、早速、道の港湾課に、松浦村長と私の二人で行き、入札の経過を話し、村の直営工事としてやることにして、補助を受けるべく、今後の足掛かりとしてお願いし、色々と工法の打合せや、港内に船上げ場を設置することを話した。

その当時、旧船入間の右半分を先に造ったのであるが、船入澗の中は十分掘られてなかった。昭和13年には、左の方を49,000円の予算で造ることになり、庶野の部落民は勤労奉仕をした。その後は、昭和28年(1953)に工事の拡張が計画され、現在(昭和38年)国で実施している。(中島)

税金

明治35年(1902)に、総代に当選した。通知が来たのでびっくりした。28才の時であった。事前に相談も受けなかった。当時は立候補などもなかった。その当時の総代は、12人であった。今では生きている人は一人もいない。

守田安衛門、中澤徳兵衛など、当時の大元老と会議で口論した。問題は、今の町民税を、戸数割と言ったのであるが、課税方法は等級割で、一等から十等までであった。最高者10円で、最低者1円であった。これは現在の資産所有者の状況よりみて、戸数割は少なくとも、一等より五十等までにすべきであると議論して、とうとう五十等までに課税することにした。その後、明治39年(1906)に二級町村になった。(西川)

商店

幌泉に来た当時の商店は、西野ほか5軒あって、みな海産商、雑貨店で、大きな商店ばかりあった。取引

先は函館で、仲買いたした生産品を送っては商品を仕入れしていたので、品物はたくさんあったが、物価が非常に高かった。(西川)

幌泉には、呉服、雑貨店、仲買商業等、5~6軒の商店があった。船が来るたびごとに、食糧品、その他雑貨をたくさん積んで来たので不自由はなかった。当時、油駒、小越の各村からも買い物に来ていたようだ。(八谷)

明治39年(1906)9才のとき、字東洋(油駒村ヤキベツ)に来た。父卯之作は大工をしていたために、家にいることが少なかったため、母は餅屋を始めた。後、次第に菓子雑貨品を販売したが、東洋では私の家が商店の始めであった。

当時、焼別の戸数は8戸であったが、年々移住者によって増加した。

生活物資およびその他、雑貨品は幌泉で購入して駄馬で運んだ。米は一俵5円50銭であった。(長谷川コ)

私が明治35年(1902)に庶野に来た時、北村商店ただ一軒あった。米、味噌、雑貨などを扱っていたが、品物が少なかったため、幌泉より馬で運搬した。

当時は函館に取引先があって、生産品を送り、委託販売をしていた。とくに冬期間は時化が多いので、船の航行もないので、食糧品は越年用として、翌年の4月頃までの分をたくわえていた。当時はすでに定期船が航海していた。(長岡)



庶野港(昭和30年代、国道改修前)

庶野での商店は北村という人が明治29年(1896)頃に来て、まんじゅうを作って売っていた店が一軒であった。その後、函館の商人と取引して店を拡張した。

それ以前は、幌泉より商品を買っていたようであった。(中島)

笛舞では、当時、食糧品は幌泉より駄馬にて運搬していたが、日用品雑貨は、近呼で田中伊六、上古丹(うえこたん)では扇谷石松、工藤宇三郎などが商店を営んでいたため、不自由はなかった。(白川)

貸し座敷

貸し座敷を経営していたのは、亀田、マルス、カネヨシ、清花楼、福原の5軒で、女は一軒に6~7人おった。

女の出身地は、ほとんど岩手県人であった。

弁財船が盛んに出入港していた時代は、女郎屋の7軒もあったという話であるが、明治36年(1903)頃より、内地漁船の来た時代は、一番盛んであったようである。魚もたくさん獲れ、漁夫も大勢来ていたので町は随分賑やかであった。毎日、女郎屋などは通帳を出して客人を寄せていたものである。その後、大正、昭和となり、漁業の不振により、女郎屋も少なくなり、戦時中に全部廃止された。(菅沼)

遊廓(先代から聞いた話)

初代中野勇助は函館にて遊廓を経営していた。当時、幌泉は海産物およびその他の物資の取引で弁財船の出入りがはげしいと伝え聞き、安政時代に幌泉に移住した。遊廓の支店を営んだ場所は南部家で、屋号をマタマンとして、店開きをした。

当時、日高広尾管内に遊廓は一軒もなかったため、広尾の男達は馬で幌泉まで来て遊んで帰ったとのことである。

その時代、すでにあらゆる物資は、函館より弁財船で取り寄せて、昆布その他生産品と物々交換したので、生活には何ら不自由しなかった。

明治2年(1869)10月2日物資仕入のため勇助(祖父)は弁財船に乗り函館に行く途中、時化のため三石沖で遭難沈没し、勇助は死亡したため、遊廓は妻(祖母)が継続して経営した。

明治になってからの遊廓は松川(寺田幸吉)、カネヨシ(角谷外次郎)、ヤマフク(福原廣吉)、ヤマイチ(広島万吉)、亀田中五郎、マルス(青山)らが幌泉で経営した。

明治40年(1907)頃より、幌泉の各地に内地の漁船が百隻余も来て手繰漁を営んでいたため、幌泉の景気は大変なものであった。遊廓は6軒もあった。女廊は一軒に6~7人おったが、女廊買いには5日位前より申込んでおかないと女を求めることができなかつたというほどの繁盛ぶりであった。当時の玉代は一晚1円50銭であったが満員の状況で大繁昌した。

(中野)

風呂屋

風呂屋は明治37年(1904)頃一軒あった。昔も今の場所で、経営者は亀田忠五郎である。浴槽は一ヶ所、男女混浴で、風呂賃は大人三銭、子供は一銭であった。とくに遊廓の女達は午後3時か4時頃になると風呂に行くので、その時間は、なじみの男らで浴場は満員で丁度浴槽の中で、いもでも洗っているようであったとのこと。

マタマンは明治の中頃、遊廊を廃業して幌泉に来て、ソバ屋を始め、また料理屋もやったが、現在三代目であるが食堂を経営して今日に至った。

明治 43 年 (1910) 頃、大暴風があったので各地は相当の被害を受けたので、天皇の御代として侍従官が幌泉に御見舞に来て、カネキ林旅館に一泊して翌日帰った。(中野)

明治 42 年頃、風呂屋は 2 軒あった。一軒は今 (昭和 38 年頃) の風呂屋の場所で亀田某が経営していた。もう一軒は郵便局の坂の下 (小林栄宅) で扇谷松次郎が経営していた。当時、越中、越前、加賀の漁船が 100 隻余も幌泉に来て、手繰漁業を営んでいたため、風呂屋はもちろん、すべての商売は大繁盛した。

明治 35 年頃の幌泉の商店は、西野頼吉、カネコ太田虎蔵、本間多次郎、柳三吉、八谷などで、相当大きく経営していた。(広島)

通信

幌泉に来た時には、郵便局があったが、設立年月日は不明である。(西川)

裁判所

幌泉には明治 29 年 (1896) までは、裁判所もあったそうである。私が来た時は浦河に移って、幌泉にはなかった。(西川)

役場

私が来た時は、戸長役場で、幌泉村 9 ヶ村 (近呼、笛舞、幌泉、歌別、歌露、油駒、小越、庶野、猿留) であった。明治 39 年 (1906) に、初めて二級町村になった。(西川)

警察

私が幌泉に来た時は、浦河の分掌としてあった。(西川)

庶野に警察ができたのは、学校ができて間もなくであったろうと思う。北村さんの話を聞いたが、「当時赴任してきた巡査に『私の家に泊まって下さい。』と話したら、『我々は民間人の家に泊まることはできない。』と断られた。」と話していた。当時の警察官は相当の権力を持ち、また、メンツを考えていたらしい。(中島)

幌泉各村の役員

総代 (後の議員) 以外に、当時の人で達者でいる人は、中島伊三郎さんである。私と一緒に、明治 31 年 (1898) に来た人だが、島根県の人だ。(西川)

人物伝

幌泉の開発に尽くした人は、寺井重太郎、その前は、山本八衛門、伊藤栄吉、南條勇蔵、部落で尽くした人は、長岡正兵衛である。(西川)

エゾシカ

冬期間は別段仕事もないので、山に行き、鹿を獲った。肉は食べたが、皮一枚 80 銭から 1 円位で売って、生活費に充てた。(藤井)

水田

私の父、鉄五郎が笛舞の沢にて住居したが、昭和 3 年頃、水田を 3 反歩作って、米 12~13 俵位とれた。(藤井)

酒造り・ヤマカの水

明治 28 年 (1895) 頃、幌泉で酒を造っていた人は、高山孫衛門でヤマカ (高山孫衛門の屋号) の坂の下に酒造蔵があって、酒造りをしていた。この水は湧水で幌泉で一番よい飲料水で、酒を造るのに最適だそうである。年間、相当量を製造していたが、高山孫衛門が死んでから二代目の友吉が経営していたが、そのうちに経営が不振なのか広尾に引き揚げて行った。

次に幌泉の山の上で、今 (昭和 38 年頃) の千葉さんの所に大同という人が酒造りをしていたが、何年頃やめたかわからない。(竹内)

ヤマカの湧水は大変良質で酒造りに適していた。高山友吉という人が酒倉を造って酒造りをしたのは、明治 28 年 (1895) 頃であった。当時、幌泉市街の飲料水は全部ここより汲んで使用していたようだ。(八谷)

< “ヤマカ” アイヌ語で

“ヤム・ワッカ” 冷たい・水という意味 >



ヤマカの湧水 (本町)
(平成 19 年 1 月)

父より聞いた話であるが、昔、疱瘡 (痘瘡) や麻疹 (はしか) が流行したとき、伝染しやすい病気なので、その家の玄関に花染 (赤で染めた布) を張って、病気が発生したことを標示して、他人の出入りを厳禁し、病人が重病になると、赤い着物と頭巾をかぶせ、家族

の者達も他家には出入できなかつたという。また、そのときには家族の者は自分の家の屋根に上って、大声で泣いたり、または嘆いたりしたそうである。それで漁船が沖に出て時化にあって入港する場合などは、屋根にあがって、入港の合図をするものでないと昔から伝えられている。(立花)

貸元

明治 35 年頃、幌泉市街の西洋の坂のところで、貸元(ヤクザの親分)をしていたのは、岩倉全十郎という人で、子分は 10 人位で、火災などにおける火消役をしていた。家には火の用心と書いた堤灯と薫が用意してあった。

また、その反面、博打の宿で寺銭を得たり、弁財船に荷物の陸揚げや積荷などもしていた。

毎年正月元旦は、各家で入口の横に樽に水を入れて用意してあったので、子分達は丸裸となり、ふんどし一本で各家庭の用意してあった水を頭からあびて一軒ずつ廻り、威勢のよいところを見せて歩いた。

(広島)

金融

事業の資金として考えたのは一人1ヶ月1円掛けの講を始めた。毎月5日にやるので5日講として。約20人であったが、だんだん加入者も増えてきた。借用希望者には抽せん等によって貸付した。(中島)

豊似湖のニジマス

豊似湖にニジマスを孵化したのは昭和6年(1931)で、第一回は熊の被害で、第2年目は腐卵して失敗した。第3年目には孵化も順調にいき、現在(昭和38年ごろ)に至り、多くの魚がいるようだ。

アメリカの兵はときどき釣りに来た。(白石)



豊似湖ワカサギ養殖(昭和30年代後半)

住宅建設

昔の住宅の建築は、山に木がたくさんあったので、自分で木を切り出して、鋸で挽いて建築した。その当時、小島寅吉という人が大工なので、習って、たいていは自分で建てた。(中島)

気候

今(昭和38年)の気候より昔は、随分寒かった。石油、酒などが凍ったこともあった。(八谷)

ヤマベ

ヤマベはマスの子であるが、川で自然孵化して、メスは海に下るが、オスは絶対海に下らない。

釣りをしてオスばかりで、筋子の入ったヤマベは見たことがない。マスが川で産卵するのに掘を掘っていると、ヤマベのオスがたくさんついて、白子をかけるので、孵化しないことはないようである。(白石)

苫別の開拓と地名

苫別が開拓されたのは、古老の話によれば、明治の始めに和人が入植して、炭を焼き鹿狩りをしたり、また、耕作や馬を飼育して開拓が始まったという。

苫別の地名はアイヌ語で“トワンベツ”“トワン”はワラビのことで、ワラビ多きともいう、“ベツ”は川である。その外の地名は開拓者にまつわるもので、主として和人名が多い。

アイヌの沢は昔アイヌが多く住んでいて鹿を獲り、主食として生活していたので、“アイヌの沢”と名づく。(“アイの沢”と呼ばれている。)

アバ沢：アバ沢はアバオドという人が住んでいて、ひこころ(しこころ：キハダ)やカツラの木で漁具のアバ(浮き)を作って漁場に売っていたので、アバ沢と名づく。

下も沢(しもざわ)：下も沢には“下オド”、という人が狩人をして暮らしていたので下沢と名づく。

五十嵐の沢：五十嵐という人が鹿狩りをしてこの沢で暮らしていたので五十嵐の沢と名づく。

大けの沢(おけのさわ：大け 大きいの意)：大けの沢の名称は佐々木長三助という身長7尺もある人が住んでいたため名づく。

トケイ台：トケイ帯はトケという人が狩人していたので名づく。(東京台と呼ばれている。)

アゼ台：アゼという人が住んでいたため名づく。

重吉がま：重吉という人が炭焼きをしていたため名づく。

まごえの沢(孫衛門の沢)：孫衛門という人が入植したため名づく。

この他にもヌカリ谷地、折別なども開拓に入った人たちの名づけである。その後、これらの人々は他に移住したらしく定住者は少ない。

明治の末期には金丸元太郎、佐藤運吉、藤田寅次郎、宮古英一らが入植して木炭を焼いたり、漁場に薪を駄馬で運んだりしていたが、大正の初め頃より畜産を始める人が多くなったので軍馬も生産するようになった。(金丸)

上歌別

上歌別では藤田さんが最初の入植者といわれている。今の清太郎氏は三代目である。

私の父が上歌別へ来たのは、明治 24~25 年（1891~92）頃という。そのときすでに、三浦さんと藤田さんの家があったという。その次に山根さんが入ってきたという。

父の仕事は春から秋にかけては漁業に従事し、冬期間は薪の切り出しなどに従事していた。（西嶋）

明治 40 年（1907）頃、上歌別に住んでいた人は三浦弥助、三浦虎蔵（三浦弥助の長男であるが、父 弥助は産馬<の沢>で住居していた）、成田与作、西島源六、藤田仁助、成田与五郎、山岸徳太郎、9 軒であった。いずれも畜産や木炭焼、薪切りをしていた。

（越後）

私が上歌別に入植したのは、昭和 6 年（1931）の春である。当時は民有未墾地開発資金が借りられるようになって、未墾民有地が開墾された。

私が入った土地は山本清さんの所有で、池田さんと 2 人で 31 町 5 反の払い下げを受けた。

庶野は在田牧場、幾田源次、中野悦太郎さんらで、アベヤキは、尾田さん（2 戸）の計、7 戸が同時に入植した。

一戸平均 15 町 2 反程度である。（7 戸で百数十町歩）資金の額は地区によって異なり、私は 1680 円を借りた。償還は据え置きの 25 年賦償還のために償還畑をつくり、償還組合を結成して私が組合長になり、終戦後 23 年（1948）までかかって返済した。

私が入植のころの上歌別は、昆布採取と馬の放牧（年中）を兼ねている者や、馬車追いと薪の切り出しに従事している人のみで、専農は一戸もなかった。私と池田さんが初めてであり、幌泉の最初の専農家でもある。

入植のときは、馬 3 頭と農機具、それに米 25 俵持ってきた。そのころ土をプラウで起こしたのは私が最初である。幌泉には一機も入っていなかった。

入植した年から 1 年に 2 町ほどクワで開墾した。畑には木の株が多くてプラウを入れることができなかったのである。初めはあと二人でエンバク 1 町 5 反のほか、大豆 5 種類と小豆 2 種類を蒔いた。エンバクは反収 3 俵半ぐらいであったが、大豆はほとんど収穫がなかったので、種子が混ざりあってしまい、種類がわからなくなった。それが共進会で入賞したので、道では「ホロイズミ大豆」と命名した。

昭和 6 年（1931）から 10 年（1935）までは全道的な冷害に見舞われた。それを契機として防風林や暗渠の設置が叫ばれるようになったようだ。

入植のときは、不成功に終わったら一家心中を考えて

いたが、4 年間の不作続きで、それを覚悟した。

しかし、昭和 11 年は久しぶりの豊作に恵まれたので、起死回生の道を見出すことができた。（岡）

農事実行組合

上歌別の農事実行組合は、昭和 12 年（1937）7 月に組織した。規約作成を依頼し、そのときの勧業係主任が骨を折ってくれた。

組合の目的は、将来酪農経営の計画と、地元消費の野菜を供給することであった。組合員は 12 名である。

（岡）

上歌別の電気

上歌別に電気が導入されたのは昭和 23 年（1948）で、農山漁村電気導入事業によってである。部落全戸で 6 万円を負担したが、労力提供などもあり、金額総負担はなかった。（岡）

蛭子の坂・西洋の坂

富越宅前の坂を「蛭子の坂」といった。蛭子源次郎は幌泉の役人をしてしたが、住宅がそこにあったので「蛇子の坂」といった。

「西洋の坂」はそこに住んでいた人が、西洋のことをいつも話していたので「西洋の坂」という名称がついたのである。（村中）

英国船の座礁

明治 15 年（1882）支那人（中国人）700 余人乗った英国船が、油駒村（字東洋）のテスケに座礁したが、辛じて全員救助された。

当時の油駒村は人家も少ないので各村の家庭に分宿させた。当時の又万（マタマン）でも 40 人も宿泊滞在させたということです。



昭和 8 年襟裳岬に座礁したマノア号の乗組員
柳田旅館前、庶野行きのバス。（柳田旅館所蔵）

そのときの遭難について東京の所属会社に電報で知らすべくも、当時幌泉に電信電話の施設がなかったので、サッコツ（大和）の伊藤栄吉さんが役場より門

鑑（旅行証明書）を交付され、草鞋をはいて、徒歩で7日間もかかって室蘭に行き、電報で遭難状況を会社に知らせたということです。遭難した支那人は帰りに際して、長いこと滞在し、大変お世話になったという御礼の意味で、記念に掛軸を一幅書いて残している。（中野）

アメリカ船の遭難

大正7年（1918）9月頃、石油を満載したアメリカのスタンダー会社の油漕船が横浜に行く途中、白浜のドンドン岩付近に座礁した。付近の昆布、海藻が全滅するおそれがあるので、村では道庁に報告した。汽船は油を放出し浮いて離礁したので、函館方面に行った。この時、油は陸岸に害せられ、5寸位の厚さで海に浮いていたので各戸とも、入れものにくみ取った。今の東洋方面からも石油缶を持って来て、一缶10銭でくみ取り料を払って馬で運んだ。

この石油で村の人々は3年位、灯火をともしたらしい。（長岡）

庶野の開拓者

庶野の開拓者として、明治3年（1870）に、長岡庄兵衛さんが、その当時14才位であった長岡長四郎さんを連れて、27戸の人々と一緒に入植したのが始めである。それまでは、函館の福嶋屋の漁場になっていた。当時の支配は松前藩で、運上屋として、倉庫もあり、昆布の収穫の2割を税金として、品物で納めた。

役人は関半之丞で、村でも、小越の南條、歌別の北村、サツコツの伊藤が役人の仲間であったと聞いている。なお、運上屋のあったところは、番屋前として、今日でも名称がある。その後、藩が廃止になって、道となったので、関半之丞は引き上げることになった。

お別の際に、陣太鼓に盃をのせて、酒を飲んだが、その時の写真が幌泉の住吉神社にあるという話である。（中島）

私の三代前の長岡庄兵衛は、新潟県生れで慶應元年（1865）5月蝦夷地に渡り、箱館（函館）に來りて漁業を経営した。

明治2年（1869）胆振国を経て、日高沿岸より庶野村に來り、昆布の豊富なるを調査して一度函館に戻り、明治3年（1870）5月函館および長万部より、石川県人、青森県人27戸を連れて來たのが、初めてこの地に定住した。移住者はいづれも、宅地海産干場など、その筋よりもらい受け、居宅も造らせしめて、昆布などの採取を営む、自宅は当村27番地に造りしも、不幸にも明治11年（1878）10月全焼し、翌12年に、28番地に居宅を新築、引越した。

その後、明治15年（1882）前の住宅地を学校敷地に提供し、現在（昭和38年）の庶野尋常小学校（旧

学校）の前身である。

明治16年（1883）4月7日、郵便取扱役拝命令18年10月、庶野駅逓の前身、庶野駅伝取締人拝命令、36年技官のまま、84才にて死亡。

その間、自分は十勝方面にサケマス漁業を成せるも、多くは連れ來る移住者のために、米、味噌、その他日用品を函館方面より借り來たりて、供給す。その負債は、自分、または子孫の支払うところとなりしも、移住民よりの負債は、全部これを各自に与へたり、しかして自己の遺族に残したるものは、前記職各々用いたる。居宅ありしのみ。海産干場の一ヶ所すら所持せず、地方開発のため、世走するを喜び戻れり。温厚篤實にして、人の非をもせめず、移住民らに自己の家族同様すべて見てなしたり。壮年より酒は一滴も飲めず、好みは盆栽発句を始めり。（長岡）

庶野郵便局

庶野局の設立は、明治16年（1881）4月7日で局長は長岡庄兵衛であった。取扱事務は通常郵便集配である。為替貯金事務を取扱ったのは、明治29年（1896）7月1日である。

また、電信事務は明治32年（1899）4月から扱った。33年7月からは小包などを扱った。42年（1909）11月1日から、電信為替を扱った。電話事務は昭和8年（1933）1月11日から開始した。現在（昭和38年1963）40戸に電話がある。（長岡）

庶野の桜

庶野の桜は植樹したものでなく、自然に生えていたものと思われる。現在（昭和38年1963）あるものの中で古いのは周囲が大きい方で9尺。小さいので6尺ある。上部の方が二本からみあっているので夫婦桜と称している。樹齡は300年位はたっていると思われる。その他にも古木はたくさんある。珍しいのは、梅の木に桜の木が生えて花が咲いていたが、暴風のために折れて枯死した。（長岡）



庶野桜公園（昭和43年）

金森商船株式会社

常務取締役 物応早見氏

記録 昭和 39 年 4 月 25 日 函館市にて

金森商船の歩み

金森商船は明治 16 年（1883）汽船回漕組を開業した汽船矢越丸（70 トン）を造って室蘭市と日高門別を航路としていたが、月 3 回往復すれば積荷がなくなるので、青森南部方面へも廻船していた。その後、道内の貨物も増加したので、明治 20 年（1887）の頃には 200 トン級の汽船 5~6 隻をもって、日高、十勝、釧路沿岸まで回漕した。

金森商船の祖、渡辺熊田郎は明治 20 年（1887）に共同運輸会社の荷捌倉庫建物土地の一切を買収して貨物保管を専業としたのが、函館における倉庫業の起源といわれている。

熊田郎は明治 40 年（1907）に死去したが、一族によって金森合名会社が設立され、その後、大正 15 年（1912）には金森商船株式会社となった。

それより先、明治 32 年（1899）に金森商船は道庁の命令航路として、十勝、釧路の定期航路に就航していた。

函館を起点として、釧路、十勝では広尾と大津、日高では、三石、浦河、幌泉、様似、庶野が主な寄港地であった。

そのなかでも、釧路と十勝（広尾大津）航路が主であったと思う。

船は、300~400 トンの貨客船で、函館からは雑貨など日用品の輸送し、帰りには海産物を運んだ。乗客もけっこう多かったように記憶している。

大正の末期には、日高航路も拝命して、三石、浦河、様似、幌泉、庶野へも寄港した。

そのときには、千島のエトロフ航路も同時に拝命して、漁業家へ食糧および雑貨の輸送につとめたものである。

ちなみに、昭和 11 年（1936）ころの所有社船は、2,240 トンにして、年間輸送数量、65,000 トン、乗客 4,300 名であった。

同社が、命令航路として就航していたときは、尼ヶ崎汽船や千島汽船と自由航路として日高線を就航していた。

昭和 17~8 年頃（1942~43）になると、第二次大戦とともに、所有船が徴集され、終戦のときは一隻より残っておらず、全部、撃沈されてしまった。

それからは、漁運業をやめて、現在は、一隻の船も所有していない。倉庫業を経営して今日に至っている。

私の記憶によると、大正 7~8 年（1918~19）ころの函館のおもな船会社は次の通りである。

日下部汽船 KK、千島汽船 KK、函館汽船 KK、東邦水

産 KK、浜根船舶部、松田汽船 KK、橋谷汽船 KK、それに金森商船 KK である。

また、昭和 11 年（1936）頃に当社が所有していた、おもな船船は、東御丸（400 重量トン）東春丸（370 重量トン）東竜丸（230 重量トン）第二京運丸（720 重量トン）松山丸（510 重量トン）である。

当社の創立当初からの資料は、終戦時、進駐軍の検査をおそれて、その大半を焼却してしまったため、輸送量などについては不明である。

マンモスの臼歯発見について

佐々木久四郎

襟裳に移住していた渋谷氏は、砂金採取業をしていた。

昭和 12 年（1937）8 月のある日、雨が降ったので、砂金が流れているだろうから、手伝いをして欲しいというので、暇でもあったので、手伝いに行った。場所は襟裳より 2km 離れた、熊さんの沢の小川で、上流に行ったところ、貝のかたまりのようなものがあったので、珍しいと思って家に持ち帰った。

その年に、下関から地質学の先生（氏名不詳）が襟裳に来た時に見せたところ、これは貝のかたまりである。下関にもたくさんあるが、私に譲ってほしいと言ったがやらなかった。

どうも貝のかたまりとしては、腑におちない、何かの化石に間違いないと思い持っていた。



佐々木氏発見マンモス臼歯（右下あご第三大臼歯）
（国立科学博物館に送られた実物）

その後、昭和 27 年に北海道大学の地質学の湊先生が襟裳に来ていたので、見せたところ、北大にたくさんあるという話であり、または、私に一万円で譲ってほしいと言ったり、話が判然しないので、誰にも譲るわけにはいかない。

このような話のうちに、「マンモス象の臼歯であるようだ。」のことが話されたので、「それでは。」と、湊先生に鑑定をお願いしたところ、東京に送って鑑定の結果、マンモス象の臼歯であることが確認されたので、東京国立科学博物館に寄贈した。